

Here I Stand



SCENARIO BOOK

目 次

シナリオブックについて ..XX	2 勢力担当時の注意点 ..XX
初めてのプレイ ..XX	相対的勝利 ..XX
シナリオ ..XX	E-Mail を利用したプレイ ..XX
セットアップ概要 ..XX	プレイの中断 ..XX
1517 年シナリオ ..XX	反応カードの使用 ..XX
1532 年シナリオ ..XX	デザイナーズノート ..XX
トーナメントシナリオ ..XX	プレイの実例 ..XX
時間制限によるプレイ ..XX	歴史的背景 ..XX
3 ~ 5 人でのプレイ ..XX	宗教改革時代の登場人物 ..XX
担当勢力 ..XX	イベントの説明 ..XX



シナリオブックについて

シナリオブックの前半では、Here I Standをプレイする際のシナリオ毎の初期配置について説明を行います。後半部分はデザイナーズノートと宗教改革の時代の歴史背景の解説となっております。

初めてのプレイ

宗教改革の時代のヨーロッパについての知識があまり無いプレイヤー諸氏は、まず最初に本書の「歴史的背景」部分を一読し、ゲームの背景について知っておくことが望ましいと思われます。「宗教改革時代の登場人物」部分と、「イベントの説明」部分は、ゲーム開始後、場面場面に応じて呼んでいくと良いでしょう。

その後、全てのプレイヤーがルールブックを通読してください。ルールの 9 章は最初は読み飛ばしてかまいません。というのも、ゲームの流れを把握するために行うプレイでは、第 1 ターンには外交フェイズそのものが存在しないためです。ルールを一読したのち、このシナリオブックのシナリオパートに記載されている 1517 年シナリオのセットアップ情報に従って初期配置を行い、ゲームの構成を理解するために数ターンのプレイを行うことを推奨します。1517 年シナリオの開始後数ターンは、カトリックと新教徒の間の宗教紛争が主軸となって展開するために、「宗教改革の試み」、「反宗教改革の試み」の手順と宗教論争（ルール 18 章）の解決手順を容易に理解することができるでしょう。

ゲームの基本的な構造を理解したならば、プレイ可能な時間に応じて、他の 3 シナリオに進むようにしてください。6 人でプレイする場合の（全てのプレイヤーがルールを理解しているという前提で）標準的なプレイ時間は、以下の通りとなります。

1517 年シナリオ	8 時間
1532 年シナリオ	6 時間
トーナメントシナリオ	4 時間

Here I Stand では、勝利ポイントシステムを採用しているため、シナリオを最後までやり遂げることを行わなくとも、規定のターン数、あるいは、時間を指定してのプレイといった競技方法も可能です。各シナリオとも、時間を指定してプレイする際の指針が規定されています。また、6 人未満でプレイする際のシナリオの修正点についても、各シナリオとも、「3 ~ 5 人でのプレイ」の項にて説明がなされています。

シナリオ

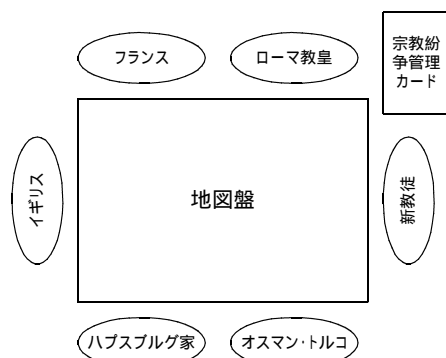
まず最初に、全てのシナリオのセットアップに共通して適用される事項の説明を行います。続いて、Here I Standで提供される 3 シナリオについて、そのプレイ時間の長いものから順に個別説明を行います。

セットアップ概要

3 シナリオとも、同様の配置をまずは行います。シナリオ毎に異なるのはカウンター配置場所、個数と、初期手札の枚数となります。

地図盤と勢力カードの配置

地図盤を机の中央に配置します。勢力カードは、インパルス実施順序に従って地図盤の周囲に配置します。こうすることで、移動等を行う順番を容易に判断することができます。以下に地図盤と勢力カード等の配置例を示します。



初期登場ユニットと勢力カードの配置

初期配置は、1 プレイヤーずつ順に実施していきます。1517 年シナリオ、1532 年シナリオとも、シナリオの初期配置情報に従って初期配置を実施します。初期配置情報には、各勢力毎に、地図盤上に配置するユニットと、勢力カード上に配置するマーカーの配置場所が記載されています。また、ローマ教皇勢力と新教徒勢力については、宗教紛争管理カード上に配置する理論指導者の情報についても記載されています。

動員余地兵力の配置

ゲーム開始時点で地図盤上に配置しなかった陸上へ威力並びに海軍カウンターは、ゲーム中に新たに購入することがかのような動員余地兵力として、勢力カードの近傍にまとめておいておきます。中小勢力並びに独立勢力のユニットについても、1 箇所にまとめておいておきます。

マーカー類の配置



ターンマーカー： 1517 年シナリオの場合、黒色のターンマーカーを、地図盤上のターン記録欄の第 1 ターンのマスに配置します。1517 年シナリオ以外の場合には第 4 ターンのマスに配置します。



勝利ポイントマーカー： 各勢力の勝利ポイントマーカーをシナリオで規定されているとおりに勝利ポイント記録欄に配置します。



新教徒スペースマーカー/イギリス本国マーカー： 両マーカーをシナリオで規定されているとおりに、宗教紛争管理カードの該当するマスに配置します。



外交状況表： 各シナリオとも、既に戦争状態となっている勢力があります。シナリオの規定に従って、「戦争中」(At War) マーカーを外交状況表の該当するマスに配置してください。1532 年シナリオではハプスブルグ家勢力とハンガリー=ボヘミアは同盟関係にあります。1532 年シナリオの初期配置では、「同盟」(Allied) の面を上にして、該当するマスに配置してください。



新世界： 1517 年シナリオの場合、新世界に係るマーカー 9 個（探検によるもの 6 個と征服によるもの 3 個）を地図盤上の「新世界」欄に配置します。

省略表記について

シナリオでは以下の省略表記を使用します。

表記	詳細	例
HCM	6 角形支配マーカー (宗派：カトリック)	
hcm	6 角形支配マーカー (宗派：新教)	
SCM	四角形支配マーカー (宗派：カトリック)	
merc	傭兵部隊	

1517 年シナリオ

概要

1517 年シナリオは最大規模のシナリオとなり、39 年間に渡る宗教改革紛争全体を取り扱います。

ターン数

全 9 ターン；第 1 ターン（1517）～第 9 ターン（1555）

初期配置

オスマントルコ

イスタンブール (Istanbul): シュレイマン (Suleiman)、イブラハム=パシャ (Ibrahim Pasha)、正規兵*7、騎兵*1、海軍戦隊*1、SCM

エディルネ (Edirne): 正規兵*1、SCM
サロニカ (Salonika): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
アテネ (Athens): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM

勢力カード上の SCM: 7

海賊行為による勝利ポイント: 0

ハプスブルグ家

バリャドリッド (Valladolid): カール 5 世 (Charles V)、アルバ公 (Duke of Alba)、正規兵*4、SCM

セビーリャ (Seville): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
バルセロナ (Barcelona): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
ナバラ (Navarre): 正規兵*1、SCM
チュニス (Tunis): 正規兵*1、SCM
ナポリ (Naples): 正規兵*2、海軍戦隊*1、SCM
ブサンコン (Besancon): 正規兵*1
ブラッセル (Brussels): 正規兵*1
ウィーン (Vienna): フェルディナンド (Ferdinand)、正規兵*4、SCM
アントワープ (Antwerp): 正規兵*3、SCM

勢力カード上の SCM: 6

新教徒勢力本国スペース全て: HCM (21 箇所)

大西洋横断中ボックス: ハプスブルグ家の征服航海遂行中 (Conquest Underway) マーカ、探検航海遂行中 (Exploration Underway) マーカを大西洋横断中ボックスに配置します。これらは、ゲーム開始以前に発起されたものです。

イギリス

ロンドン (London): ヘンリー 8 世 (Henry VIII)、チャールズ=ブランドン (Charles Brandon)、正規兵*3、海軍戦隊*1、SCM

ポーツマス (Portsmouth): 海軍戦隊*1
カレー (Calais): 正規兵*2、SCM
ヨーク (York): 正規兵*1、SCM
ブリストル (Bristol): 正規兵*1、SCM

勢力カード上の SCM: 5

ヘンリー 8 世の婚姻状態: アラゴンのキャサリン (Catherine of Aragon) と婚姻状態にあります。6 個の王妃マーカをそれぞれのマスに配置します。アラゴンのキャサリンは、アン=ブーリン (Anne Boleyn) と同じマスに配置しておきます。

フランス

パリ (Paris): フランシス 1 世 (Francis I) モンモランシー (Montmorency)、正規兵*4、SCM

ルーアン (Rouen): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
ボルドー (Bordeaux): 正規兵*2、SCM
リヨン (Lyon): 正規兵*1、SCM
マルセイユ (Marseille): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
トリノ (Turin): HCM
ミラノ (Milan): 正規兵*2、SCM

勢力カード上の SCM: 5

城塞建築による勝利ポイント: 0VP

ローマ教皇

ローマ (Rome): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
ラヴェンナ (Ravenna): 正規兵*1、SCM

勢力カード上の SCM: 5

ローマ教皇勢力の理論指導者: エック (Eck)、カンペジジョ (Campeggio)、アレンダー (Aleander)、テッツェル (Tetzel)、カイエタン (Cajetan)

破門: なし

サン=ピエトロ大聖堂建設: 0CP, 0VP

新教徒

選帝候ボックス: 正規兵*2 (ヴィッテンベルグ

(Wittenberg)、アウグスブルグ (Augsburg))、正規兵*1 (ケルン (Cologne)、トリアー (Trier)、マインツ (Mainz)、ブランデンブルグ (Brandenburg))

理論指導者 (ドイツ語): ルター (Luther)、メランクトン (Melanchthon)、ブッセル (Bucer)、カールシュタット (Carlstadt)

翻訳活動: 全て未着手

ヴェネツィア

ヴェネツィア (Venice): 正規兵*2、海軍戦隊*3
コルフ島 (Corfu): 正規兵*1
カンディア (Candia): 正規兵*1

ジェノバ

ジェノバ (Genoa): アンドレア=ドレア (Andrea Doria)、正規兵*2、海軍戦隊*1

ハンガリー

ベルGRADE (Belgrade): 正規兵*1
ブダ (Buda): 正規兵*5
プラハ (Prague): 正規兵*1

スコットランド

エジンバラ (Edinburgh): 正規兵*3、海軍戦隊*1

独立勢力

ロードス島 (Rhodes): ヨハネ騎士団 (正規兵*1)
メッツ (Metz): 正規兵*1
フィレンツェ (Florence): 正規兵*1

使用するカード

1517 年シナリオでは全てのカードを使用します。カードのうち、37 枚については、右上に、ターン数 (あるいは登場可能性) が明記されています。これらのカードは第 3 ターン以降に山札に加えることになります。ゲーム開始時点で、山札に加えないカードは、#14 ~ #23、#38 ~ #64 番のカードです。

外交状況表

- ・ハプスブルグ家とフランスは戦争状態にあります。
- ・フランスとローマ教皇勢力は戦争状態にあります。
- ・オスマン=トルコ帝国とハンガリー/ポヘミアは戦争状態にあります。

初期配置の時点での勝利ポイント

オスマン=トルコ帝国: 8VP	フランス: 12VP
ハプスブルグ家: 9VP	ローマ教皇: 19VP
イギリス: 9VP	新教徒: 0VP

宗派が新教のスペース: 0 箇所

新教のイギリス本国スペース: 0 箇所

特別ルール

無し

1532 年シナリオ

概要

1532 年シナリオは短縮シナリオで、最初の 3 ターンは実施せず、かつ、6 つの勢力のいずれもが、数ターンのプレイで勝利を得る可能性を有している状況設定となります。

ターン数

全 6 ターン: 第 4 ターン (1532) ~ 第 9 ターン (1555)

初期配置

オスマントルコ

イスタンブール (Istanbul): シュレイマン (Suleiman)、イブラハム=パシャ (Ibrahim Pasha)、正規兵*5、騎兵*1、海軍戦隊*1、SCM

エディルネ (Edirne): 正規兵*1、SCM
サロニカ (Salonika): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
アテネ (Athens): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
アルジェ (Algiers): バルバロッサ (Barbarossa)、海軍戦隊*2、私掠船団*2、SCM

ベルグラード (Belgrade): 正規兵*1、SCM
 モハーチ (Mohacs): HCM
 セゲド (Szegedin): HCM
 ザグレブ (Agram): HCM
 ロードス島 (Rhodes): HCM

勢力カード上の SCM : 4

海賊行為による勝利ポイント : 0

ボーナス勝利ポイント欄 : 戦争勝利 2VP

ハブスブルグ家

バリャドリド (Valladolid): カール 5 世 (Charles V)、アル
 バ公 (Duke of Alva)、正規兵*4、海軍戦隊*1、SCM
 セビーリヤ (Seville): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
 バルセロナ (Barcelona): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
 ナバラ (Navarre): 正規兵*1、SCM
 ナポリ (Naples): 正規兵*2、海軍戦隊*1、SCM
 ブサンコン (Besancon): 正規兵*1
 ブラッセル (Brussels): 正規兵*1
 ウィーン (Vienna): フェルディナンド (Ferdinand)、正
 規兵*4、傭兵部隊*2、SCM
 アントワープ (Antwerp): 正規兵*3、SCM
 プラハ (Prague): SCM
 ブレスラウ (Breslau): hcm
 ペルン (Bruenn): HCM
 プレスブルグ (Pressburg): HCM
 レーゲンスブルグ (Regensburg): HCM
 ザルツブルグ (Salzburg): HCM
 ミュンスター (Muenster): HCM
 ケルン (Cologne): HCM
 トリアー (Trier): HCM

勢力カード上の SCM : 6

ボーナス勝利ポイント : 戦争勝利 1VP、地球周回航海、太平
 洋への海路、アステカ (Aztecs) 文明 (枯渇状態)

新世界欄 : マゼラン (Magellan) を地球周回航海欄に配置。コ
 ルテス (Cortes) をアステカ (Aztecs) 欄に配置。探検家と征服
 者については、マゼランとアステカは、1532 シナリオでは
 使用できない。

植民地 : プエルトリコ (Puerto Rico)、キューバ (Cuba)

使用不可 : コルドバ (Cordova)、レオン (Leon)、ナルバエス
 (Narvaez)

イギリス

ロンドン (London): ヘンリー 8 世 (Henry VIII)、チャールズ=
 ブランドン (Charles Brandon)、正規兵*3、傭兵部隊*2、
 海軍戦隊*1、SCM
 プリマス (Plymouth): 海軍戦隊*1
 ポーツマス (Portsmouth): 海軍戦隊*1
 カレー (Calais): 正規兵*2、SCM
 ヨーク (York): 正規兵*1、SCM
 ブリストル (Bristol): 正規兵*1、SCM

勢力カード上の SCM : 5

ヘンリー 8 世の婚姻状態 : 離婚の誓願中 (Ask for Divorce)。6
 個の王妃マーカをそれぞれのマスに配置します。アラゴンの
 キャサリンは、アン=ブーリン (Anne Boleyn) と同じマスに配
 置しておきます。

イギリスは、第 4 ターン (シナリオ第 1 ターン) のカード補
 充フェイズに、カードを 1 枚余分に獲得することができます。
 これは、ヘンリー 8 世が統治者であることによるボーナスに
 さらに加えて適用されます。

使用不可 : ラット (rut)

フランス

パリ (Paris): フランシス 1 世 (Francis I) モンモランシー
 (Montmorency)、正規兵*4、傭兵部隊*2、SCM
 ルーアン (Rouen): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM
 ボルドー (Bordeaux): 正規兵*2、SCM
 リヨン (Lyon): 正規兵*1、SCM
 マルセイユ (Marseille): 正規兵*1、海軍戦隊*1、SCM

勢力カード上の SCM : 6

大西洋横断中ボックス : フランスの探検航海遂行中マーカ
 をシナリオ開始時点で配置 (シナリオ開始より以前に発起さ
 れたもの)。

城塞建築による勝利ポイント : 2VP

フランスは、第 4 ターン (シナリオ第 1 ターン) のカード補
 充フェイズに、カードを 1 枚余分に獲得することができます。
 これは、フランソワ 1 世が統治者であることによるボーナス
 にさらに加えて適用されます。

使用不可 : ヴェランザノ (Verranzano)

ローマ教皇

ローマ (Rome): 正規兵*1、傭兵部隊*1、海軍戦隊*1、SCM
 ラヴェンナ (Ravenna): 正規兵*1、傭兵部隊*1、SCM

勢力カード上の SCM : 5

ローマ教皇勢力の理論指導者 : エック (Eck)、カンペッジオ
 (Campeggio)、アレンダー (Aleander)、カンタリニ (Cantarini)、
 テッツェル (Tetzell)、カイェタン (Cajetan)
 統治者 : クレメンス 7 世 (カード#10 を勢力カードのレオ 10
 世のマスの上に配置すること)。
 破門 : ルター
 サン=ピエトロ大聖堂建設 : 0CP, 1VP

新教徒

ブランデンブルグ (Brandenburg): 正規兵*1
 ヴィッテンベルグ (Wittenberg): ヨハン=フリードリヒ
 (John Frederick)、ルター (Luther)、正規兵*2
 マインツ (Mainz): ヘッセ公フィリップ (Philip of Hesse)、
 正規兵*1、傭兵部隊*2
 アウグスブルグ (Augsburg): 正規兵*2
 選帝侯ボックス : 正規兵*1 (ケルン (Cologne)、トリアー (Trier))
 理論指導者 (ドイツ語) : ルター (Luther)、メランクトン
 (Melanchthon)、ブッセル (Bucer)、エコランパディス
 (Oekolampadius)、プリングー (Bullinger) カールシュタット
 (Carlstadt)
 理論指導者 (英語) : ティンダル (Tyndale)
 新約聖書 (ドイツ語) : 完了
 新約聖書 (フランス語) : 4CP
 新約聖書 (英語) : 2CP
 聖書の完全翻訳 : 未着手

使用不可 : ツウィングリ (Zwingli); (宗教改革家、理論指導
 者とも)

ヴェネツィア

ヴェネツィア (Venice): 正規兵*2、海軍戦隊*3
 コルフ島 (Corfu): 正規兵*1
 カンディア (Candia): 正規兵*1

ジェノバ

ジェノバ (Genoa): アンドレア=ドレア (Andrea Doria)、正
 規兵*2、海軍戦隊*1

ハンガリー

プラハ (Prague): 正規兵*1

スコットランド

エジンバラ (Edinburgh): 正規兵*3、海軍戦隊*1

独立勢力

マルタ島 (Malta): ヨハネ騎士団 (正規兵*1)、HCM
 メッツ (Metz): 正規兵*1
 フィレンツェ (Florence): 正規兵*1
 ミラノ (Milan): 正規兵*1
 チュニス (Tunis): 正規兵*1
 バーゼル (Basel): hcm
 チューリッヒ (Zuerich): hcm

使用するカード

以下のカードは、1532 年シナリオでは使用しません。識
 別のため、1532 年シナリオで使用しないカードには、カー
 ド右上部分に (1517) と記載されています。

・ 95 箇条の論題 + #8

・バーバリー海岸の海賊†	#9
・信仰の守護者†	#11
・シュマルカルデン同盟†	#13
・ハレー彗星†	#38
・アウグスブルグの宗教告白†	#39
・マールブルグの討論†	#41
・ツウィングリ武装蜂起†	#43
・フリードリヒ賢王†	#78
・ヨハン=ザボリヤ†	#83
・キャサリン=ボーク†	#85
・ドイツ農民戦争†	#88
・ローマの掠奪†	#95
・モルッカ諸島の売却†	#96

上記以外のカードを、1532 年シナリオで利用することができます。以下に示す、第 3 ターンに山札に追加するカードについては、1532 年シナリオの開始時点から山札に加えることを忘れないでください。

・パウロ 3 世	#14
・マキャベリ：君主論	#40
・ロクセラナ：	#42

また、第 4 ターンに登場することが指定されている、理論指導者、宗教改革家、カードについては、第 4 ターン（シナリオ第 1 ターン）のカード補充フェイズの冒頭にゲームに登場させることを忘れないでください。

外交状況表

- ・オスマン=トルコ帝国とハプスブルグ家は戦争状態
- ・ハプスブルグ家と新教徒勢力は戦争状態
- ・ローマ教皇と新教徒勢力は戦争状態
- ・ハプスブルグ家とハンガリー/ボヘミアは同盟状態にあります。

初期配置の時点での勝利ポイント

オスマン=トルコ帝国：16VP	フランス：12VP
ハプスブルグ家：18VP	ローマ教皇：15VP
イギリス：9VP	新教徒：13VP

宗派が新教のスペース：19 箇所(カード補充フェイズ冒頭に、カルヴァンが地図盤上に配置されることにより、20 箇所となる)

新教のイギリス本国スペース：0 箇所

特別ルール

無し

トーナメントシナリオ

概要

トーナメントシナリオは、1532 年シナリオを初期配置を使用し、ゲームが 3 ターンのプレイで終了するように調整されています。

ターン数

全 3 ターン：第 4 ターン（1532）～第 6 ターン（1543）

初期配置

1532 年シナリオと同等とします。加えて、トーナメントシナリオでは、第 4 ターン（シナリオの第 1 ターン）のカード補充フェイズに、各勢力とも追加で 1 枚のカードを獲得することができます。たとえば、イギリスとフランスは、勢力カードの「キースペースの支配」によるカード獲得枚数に加えて、3 枚を追加で獲得することが可能となります。その内訳は、統治者ボーナスによる追加 1 枚、1532 シナリオの初期配置条件により追加 1 枚、そして、トーナメントシナリオの初期配置条件（本項）による 1 枚です。

使用するカード

1532 年シナリオと同じ

外交状況表

1532 年シナリオと同じ

開始時の勝利ポイント

1532 年シナリオと同じ

特別ルール

1. ゲームは第 6 ターンで終了します。このため、第 6 ターンには和平交渉（9.3 項）を実施することはできません。

2. ターン終了時に、他のすべてのプレイヤーよりも +4VP 余分に獲得している場合、決定的勝利となります。

3. ゲーム終了時に 23VP 以上を獲得している場合、その勢力が勝利を収めることができます。

時間制限によるプレイ

Here I Stand では、勝利ポイントシステムを採用しているため、ルール 23 項で規定された勝利条件を満たすことができなくとも、ターン終了時の勝利ポイントと多寡で勝者を決定することが可能です。しかしながら、気をつけなければならないのは、第 4 ターン終了時以降でなければ、つまり、第 1～第 3 ターン終了時においては、勝利ポイントの評価はバランスを欠くものであることに留意しなければなりません（1517 年シナリオの開始時点で、ローマ教皇陣営は 19 勝利ポイント分、新教徒勢力より優位に立っていますし、イギリスにあっては、男系後継統治者が出現するに十分な時間を与える必要があります）。逆に言えば、第 4～第 8 ターンの終了時であれば、その時点でゲームを終了し、獲得した勝利ポイントが最も多いプレイヤーが勝利を収めたことにしてもかまいません。最多勝利ポイントが複数の勢力によって達成されている場合、23.3 項の規定に従って勝者を決定します。23.3 項の規定があるために、各プレイヤーとも、毎ターンの終了時に、獲得している勝利ポイントをメモするようにしてください。

プレイヤー諸氏は、プレイ可能な時間に応じて、Here I Stand の勝利ポイントシステムを有効活用してください。以下に、バランスがとれたゲーム方法をいくつか提示しておきます。

・1517 年シナリオの初期配置に従い、6 時間プレイを行います。ゲームは 6 時間超過後、最初のターン終了時に勝利判定を行います（このゲームに慣れ親しんだプレイヤーでゲームをしている場合、おそらく第 5 ターン終了時に相当すると思われます）。

・1517 年シナリオの初期配置に従い、第 6 ターン終了時までプレイを行います。（このゲームに慣れ親しんだプレイヤーでゲームをしている場合、おそらく 7 時間程度必要と見込まれます）。

・1532 年シナリオの初期配置に従い、6 時間プレイを行います。ゲームは 6 時間超過後、最初のターン終了時に勝利判定を行います（このゲームに慣れ親しんだプレイヤーでゲームをしている場合、おそらく第 7 ターン終了時に相当すると思われます）。

いずれにせよ、プレイ開始に先立って、終了の条件を決めておくことで安心してゲームを行うことができるでしょう。

3～5 人でのプレイ

ルールブックは、このゲームを、1 プレイヤーが 1 勢力を担当する 6 人でのプレイを想定して記述しています。6 人揃わない場合には、以下に示す最低限の変更を施すことで 3～5 人でプレイすることも可能です。

担当勢力

6 人未満でプレイする際の担当勢力は以下のようにすることを推奨します。

3 人プレイ

プレイヤー 1：オスマン=トルコ帝国とフランス
プレイヤー 2：ハプスブルグ家とローマ教皇
プレイヤー 3：イギリスと新教徒

4人プレイ

プレイヤー 1: オスマン=トルコ帝国
 プレイヤー 2: ハプスブルグ家とローマ教皇
 プレイヤー 3: イギリスと新教徒
 プレイヤー 4: フランス

5人プレイ

プレイヤー 1: オスマン=トルコ帝国
 プレイヤー 2: ハプスブルグ家
 プレイヤー 3: イギリスと新教徒
 プレイヤー 4: フランス
 プレイヤー 5: ローマ教皇

2 勢力担当時の注意点

2 勢力を担当するプレイヤーには以下の制約が課せられます。

- ・オスマン=トルコ帝国は、自分自身が担当している他の勢力に対して海賊行為を実施することはできません。
- ・自分自身が担当している勢力間で宣戦布告をおこなうことはできません。
- ・自分自身が担当している勢力間でカードの授受、傭兵部隊貸し借りを行うことはできません。
- ・自分自身が担当している勢力間でスペースの支配権のやりとりを行うことはできません（例外：一方の本国スペースを返納することは可能です）。

単一のプレイヤーが担当している複数勢力は相互に同盟関係にあり、海軍戦隊の貸借を行うことは許されています。

相対的勝利

1 プレイヤーが複数勢力を担当している場合、相対的勝利の判定（23.3 項）の決定手順が一部変更となります。複数勢力を担当している場合、担当勢力が獲得している勝利ポイントの平均値を求め、その値が他のプレイヤーのものより 5 勝利ポイント以上大きい場合、勝利を収めることが可能となります。

E-メールを利用したプレイ

Here I Stand のテストプレイの半数近くは、E-メールを利用して実施しました。Windows での通信対戦補助ツールである Cyberboard を利用してのプレイも行われました。この章では、Cyberboard に限らず、通信対戦を順調に行うための方針を示します。

プレイの中断

E-メールを利用した通信対戦では、プレイヤーがインパルス実施順序に従って、インパルスを実施し、1 通のメールにて、そのインパルスが完了する場合、最もスムーズに進展します。しかしながら、他プレイヤーによる戦闘カード、反応カードの使用がインパルス途中発生する可能性があります。加えて、陸上部隊、海上部隊を問わず、部隊を移動させたならば、他のプレイヤーは迎撃、戦闘回避の有無、要塞への退却の有無、等々を判断しなければなりません。このような事象について、考慮しなければならないのは、ゲームにて割り込みが発生する可能性があるのは、

- ・陸上部隊の移動
- ・海軍部隊の移動
- ・野戦、海戦、要塞への強襲

に限られているということです。

他の勢力を対象としてなされる行為には、海賊行為、宗教改革の試み、反宗教改革の試み、宗教論争等がありますが、これらには対して相手勢力からの割り込みが発生することはありません（例外：ローマ教皇勢力がドイツ語圏で宗教論争を試みる場合に限り、新教徒勢力は、指定された理論指導者の代わりにルターを投入するかどうかを判断しなければなりません）。

陸上部隊の移動ならびに海上部隊の移動にあたっては、活性化プレイヤーは、敵勢力が、迎撃、戦闘回避、要塞への退却が選択可能である状況になるまでは、移動を継続して行うことができます。その後、敵勢力が、迎撃、戦闘回避、要塞への退却が選択可能な状況が発生したならば、敵勢力の判断を待たなければなりません。野戦ならびに要塞への急襲を解

決する場合、攻撃実施側が、戦闘実施を宣言し、使用する戦闘カードを指定した後、防御側がカードの使用を宣言し、防御側プレイヤーによって、戦闘結果を判定すればよいでしょう。

反応カードの使用

通信対戦を行う場合に最も処理が難しいのが反応カードの使用にともなう処理となります。これは、ゲームに参加しているすべてのプレイヤーが、他のプレイヤーのインパルスに反応カードを使用する権限を有するためです。しかしながら、ゲームに含まれる反応カードは 8 枚しか存在しないことに留意すべきです。通信対戦時には以下に記す 5 項目を採択することで、反応カードの使用に係る問題をかなり改善することができます。以下の 5 項目には、ゲーム中の行為をやり直すという過程が含まれますが、反応カード使用に係る要件のために、プレイを細切れにしないためにも、通信対戦時には採用することを強く推奨します。

- ・悪天候（#31）と痛風（#32）：当該カードの使用を希望する、移動、強襲、海賊行為、海上輸送が実施される旨のメールが到着次第、この反応カードの使用を宣言します。
- ・ハレー彗星（#38）：インパルスとインパルスの合間に使用を宣言します。
- ・ランツクネヒト（#33）とスイス人傭兵（#36）：戦闘カードと同等の扱いとします。すなわち、戦闘が宣言された後、戦闘の解決を行う前に使用を宣言します。
- ・攻城砲（#35）と優秀な漕ぎ手（#34）：当該カードの使用を希望する、急襲、海上部隊の移動、海上輸送が実施される旨のメールが到着次第、個の反応カードの使用を宣言します。
- ・ヴァルトブルグ城（#37）：新教徒勢力プレイヤーは、メールにて、特定のイベントカードの使用が通告された後、このカードを使用して、当該イベントの効果を打ち消すことができます。イベントカードの効果が適用された後では、ヴァルトブルグ城カードを使用して当該イベントの効果を打ち消すことはできません。

デザイナーズノート

私の大学の金曜夜のゲーム会ではもっぱらロールプレイングゲームがプレイされていた。SPI 社の Dragonquest--個のゲームは私がプレイテストに参加したゲームでもある--が最もよくプレイされていたと記憶している。とはいえ、時には、古典的なウォーゲームも（マルチプレイヤーズゲームであることが多かったが）、プレイされていた。そんな環境で、ルームメイトのマイクから、SPI の Mighty Fortress のプレイを持ちかけられたときには余り気乗りがしなかった。というのも、私自身は、宗教改革についてほとんど何も知らなかったし、ゲーム自体も、マイク自身が云うには単調で変化に乏しい--高校時代のサークルでは「ドンガメ」と呼ばれていたそう--と説明してくれたからである。さらに悪いことに、私はハプスブルグ家を担当せられることになっていた。ハプスブルグ家といえば、Mighty Fortoress では、孤立した領土を多くの敵が蚕食しようとするのを防ぐという立場なのである。

そんな状況下、われわれは、Mighty Fortress のプレイを始めたわけではあるが、わたしは、すぐにのめり込んでしまいました。ハプスブルグ家をなんとかやりくりしていくのは大変やりがいのあることだったのです。対立する 1 勢力に対しては圧倒的に優勢でありながら、複数の勢力を同時にあしらう力は有していないために、外交交渉をうまくまとめなければならないという状況が大変気に入った訳です。そして、主にロールプレイングゲームを行っている我々にとっても大変魅力的なことでした。ゲームでイタリアカトリック勢力を担当したマイクはそれこそ完璧にローマ教皇を演じましたし、我々の中ではルネッサンス文化に最も造詣が深いトムは、フランソワ 1 世を、遠方から駆けつけてくれるチトーは、その正確通り攻撃的なオスマントルコのスルタンを、リッチはヘンリー 8 世を、デービットはルターを、そして、わたしはカール 5 世を、まさに、演じることができたのです。

とはいえ、大きな問題が無かったわけではありません。そしてその問題はかなり深刻、つまり、ゲームが実際には機能しない、すなわち、プレイ時間が長大過ぎるということでした。実際、ゲームを最初から最後までやり遂げることができなかったのです。また、ヘクスと支配地域ルールは、この時

代の、それぞれ独立した軍勢がカリスマ的な指揮官に率いられているという戦役を再現するには余り適していないものであったと思われます。さらに、宗教面での闘争と、軍事面での闘争が相互に独立しており、この時代の魅力的なキャラクターがほとんど登場しないという点も魅力に欠けるものでありました。A Mighty Fortress は、私が最も気に入っているゲームの一つであり、ゲームサークルで幾度もプレイを試みたにもかかわらず、その真の可能性を突き止める水準には達しませんでした。そして、ゲームサークル内での人気はあまりなく、次第にプレイされなくなりました。

いつか、A Mighty Fortress の欠点を修正したいとは考えていましたが、なかなか実行に移すことはできませんでした。実際、上に上げた問題点の解決方法が全て解決する目処が立つまで、作業を開始するつもりはありませんでした。代わりに、この時代の資料を収集し、地元で開催されているルネッサンス=フェスティバルに定期的に参加し、カードドリブンシステムのゲームが興隆している様子を興味を持って観察していたわけです。ポイント to ポイントの地図盤とカード用いて歴史的フレーバーを再現するという手法が最も適していると判断していました。Mark McLaughlin 氏の Napoleonic Wars をプレイしてみて、カードドリブンシステムが、非対称マルチプレイヤーゲームのデザインに適していることを知りました。初めて A Mighty Fortress をプレイしてから 20 年を経て、ようやく宿願を果たす下地が整ったわけです。

デザインポリシー

宗教改革の流れについての検証から開始したため、対象なる時代が驚くべきほどに様々な事象が詰め込まれた時代であるかについて理解することは容易でした。宗教改革の流れが終焉するまでに、ヨーロッパは、新世界への征服活動、ヘンリー 8 世の再婚問題、マゼランの航海によって、地球が球体であることが証明されたり、コペルニクスの天動説発表によって、地球が宇宙の中心でないことが喧伝された訳です。マキャベリ、ミケランジェロ、絶頂期のオスマン=トルコ帝国、その他、読者のみなさんがご存じの事項が様々に影響を及ぼしていたわけです。この時代のあらゆる事象を 1 冊に手頃にまとめた書籍は残念ながら未だ見たことがありませんが、このゲームにて歴史上の人物、出来事を有機的に相互関連づける文脈で再現したいと考えています。

ゲームで取り扱う 40 年間で、ヨーロッパの勢力分布は、軍事面、政治面、宗教面いずれをとっても大きく変わりました。ゲームデザインの最初の工程として、この期間を時系列で詳しく分析することから着手し、いくつかの大きな出来事を中心としてとりまとめました。ゲームではこれが、強制イベントとして、ゲームの大きな流れを形作ることになっています。しかしながら、ゲームの展開が、毎回同じになることは避ける用にしています。このため、キーとなるイベント(バーバリー海岸の海賊、シュマルカルデン同盟、イエズス会設立等)はその発生が数ターンの幅に収まるように設計されています。

宗教改革について

陸戦、攻囲戦闘、海軍に関わるルールは、他のカードドリブンシステムのゲームから流用させていただきました。この時代に最適な新しいシステムを位置から作ること事実に不可能と判断したためです。しかしながら、宗教改革運動が、ポイント to ポイントの地図盤上で周辺へと波及していく様子を再現するためのシステムについては、新たに作り出す必要があり、それに成功しています。最終形に落ち着くまでに 4 つのパターンを検証しました。史実での宗教改革の影響が、都市から都市へとひろがっていったことをモデル下して、隣接するスペースに対してどの程度の影響力を保持しているかを評価する仕組みで最終的に解決を図っています。補完要因として、新教徒とローマ教皇勢力の陸上部隊の有無を評価したとこと、困難ではありますが、海域(北海)を越えて宗教改革の影響が拡大していくことをルールに盛り込んでいます。

テストプレイでは宗教改革の試みの進捗速度が史実と同等であるかどうかを確認しました。これに対処するため、聖書の翻訳について区切りつた際には、対象となる単一の語圏でしか宗教改革の試みを実施できないことをルールに盛り込みました。また、言語圏の概念と、グーテンベルグの活版印刷術によってもたらされたコミュニケーション技術の革新を重要なイベントとして採択しています。

これまで、宗教改革の試みの伝播について、地政学的な見地からのみコメントしてきましたが、宗教改革家の役割やヴ

オルムス公会議の様な重要な出来事も、宗教改革の流れを大きく加速した要因であることは間違いありません。これを再現するために、相手方にとって地政学的に優勢な地域であっても、宗教改革(あるいは反宗教改革)の試みが成り立つように、宗教論争の仕組みを採用しました。宗教論争のシステムは当初より余り改編を行っていません。サイコロを振って勝敗を決し、敗者側は火刑に処せられるというルールはわかりやすく、説得力のあるものであると信じています。

他の論点

6 勢力間の、しかも、毎ターンその組み合わせが変わる可能性がある、政治的な関係をうまく再現することが困難でした。迎撃、戦闘回避、攻囲戦闘、救援部隊等の処理を順序だてて整理することも、同盟国部隊や同盟国によるエリアの支配等が関与する場合は特に、時間がかかりました。これらを全て秩序だてて処理するために、今のルール記述方法となっているわけです。ルールの各項とも、まず、制約事項を列記し、その後、実際の処理手順を順を追って記述するという体裁になっています。この記述方法を採用することで、同盟国が至近距離で戦闘に参加する場合等の極めて稀なケースであっても論理破綻なくルールを適用することができました。

ゲームバランスを調整することも困難を極めました。6 勢力とも、それぞれ異なった大目標を有しており、勝利を収める方策も自ずと異なっています。このことは、ゲームとして何度も繰り返しプレイを行うという観点からは大きな利点ですが、勝敗について、ゲームをバランスの良いものにまとめるという観点からは大きなハンディとなります。テストプレイの過程で、各勢力毎の勝利ポイントを毎ターン記録をとり、表にまとめ上げることで、バランスの調整を行う際の大きな指標とすることができました。良かった点としては、カードを使用することで、プレイヤーによって、指揮官、統治者がゲームから取り除かれる可能性があるということで、ゲームが広く公開されているならば、どの勢力が相対的にトップであると考えられているかが判明するために非常に興味深い仕組みであると考えています。

謝辞

最後に、プレイテストに協力していただいた 62 名の方々にお礼を差し上げます。ゲーム制作にあたり特段の協力をいただいた 3 名には感謝いたします。息子の Matthew もその一人です。息子との 6 箇月に及ぶテストプレイを経て、原案ベースのゲームが、E-メールでのプレイテストが可能な状態にまで仕上げる事ができたのです。私にとっては、21 世紀に生きる 14 歳の少年が、宗教改革に関するゲームに熱中することが新たな驚きでした。息子が何度もプレイしよう云々云々すること自体が、ゲーム制作がうまく進んでいることの何よりの証だったのです。Ananda Guputa 氏が次に重要な役割を果たしてくれました。ゲームの複雑化を避けるために彼が発してくれた幾多の注意は非常にタイムリーでした。また、彼は、理論指導者の特典に係るシステムを提案してくれたことも大きな功績です。これにより、最小限のルールの追加で、宗教紛争に関する再現性を大いに高めることができました。最後に、Dave Cross の功績について書き記す必要があります。Dave がいなければ、ルールブックやカードの記述内容の矛盾点をなくし、理路整然としたものに仕上げることはできなかったでしょう。また、彼は、異端審問等、カードの効果について多くの改善案を提供してくれました。

最後に、妻サラと娘ナタリーに感謝を捧げます。家族をそっこので映画「ルター」を見たり、地元のルネッサンスフェアー初日から、書籍売り場に通い詰めたり、彼女たちが、私の妄念に耐えた日々は、必ずや、彼女たちが煉獄で過ごす日々を短くしてくれることでしょう。

プレイの実例

この章では、Here I Stand のテストプレイでゲームに慣れ親しんだプレイヤーによってなされたトーナメントシナリオの冒頭部分をリプレイ形式で紹介します。トーナメントシナリオは第 4 ターンから開始、1532 シナリオの初期配置状況を使用し、シナリオ第 1 ターンの難、各プレイヤーともカードを 1 枚余分に獲得できるという情勢です。ゲームの初心者はトーナメントシナリオのセットアップを行い、リプレイに沿ってゲームの流れを把握していくことが有効です。

第 4 ターン

「95 箇条の論題」フェイズ：

1517 年シナリオでは無いためスキップします。

カード配分フェイズ：

理論指導者、宗教改革家、指揮官の追加：ジュネーブ (Geneva) に宗教改革家：カルヴァン (Carvan) を配置します。このスペースは新教徒の支配下となります。独立勢力用の 6 角形の支配マーカをジュネーブに、宗派が新教の面 (灰色の縁取りで中央部が白色) を上にして配置します。これにより、宗派が新教のスペースは 20 箇所となります。新教徒の勝利ポイントが 14VP に上昇し、ローマ教皇勢力の勝利ポイントは 14VP に低下します。また、フランス語圏の理論指導者 4 名全てがゲームに登場します (宗教紛争解決シートに配置)。

カードを山札に追加：カード右上に「4 ターン」と記載された 11 枚のカードを山札に追加し、良くシャッフルします。

新世界の財宝の判定：ハプスブルグ家は、保持している植民地 2 箇所 (プエルトリコとキューバ) についてそれぞれサイコロを 2 個ふり、このターンに獲得できる財宝を判定します。
・プエルトリコ (DR=8；カード無 (ガレオン船団があればカード獲得))
・キューバ (DR=7；効果無)

山札のシャッフルとカード配布：

オスマン=トルコ帝国 (Steve Caler 担当)；カード 7 枚 (内訳：本国カード 1 枚、キースペースで 5 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#1 イエニチェリ (本国カード；5CP)
- ・#33 ランツクネヒト (反応カード；1CP)
- ・#47 コペルニクス (6CP)
- ・#66 騎兵部隊 (3CP)
- ・#92 エジプトの反乱 (3CP)
- ・#98 黄金郷探索 (2CP)
- ・#109 ヴェネツィアからの情報 (1CP)

ハプスブルグ家 (Dave Cross 担当)；カード 7 枚 (内訳：本国カード 1 枚、キースペースで 5 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#2 神聖ローマ帝国 (本国カード；5CP)
- ・#26 傭兵部隊の買収 (戦闘カード；3CP)
- ・#28 坑道を構築 (戦闘カード；1CP)
- ・#37 ヴァルトブルグ城 (反応カード；2CP)
- ・#67 再洗礼派 (3CP)
- ・#79 フッガー家 (3CP)
- ・#90 活版印刷術 (5CP)

イギリス (Paul Nied 担当)；カード 6 枚 (内訳：本国カード 1 枚、キースペースで 2 枚、ヘンリー 8 世のカードボーナス 1 枚、1532 シナリオ初期設定 1 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#3 ヘンリー 8 世の 6 人の妻 (本国カード；5CP)
- ・#40 マキャベリ「君主論」(2CP)
- ・#54 ポトシ銀山 (3CP)
- ・#70 チャールズ=バーボン (4CP)
- ・#101 天然痘 (4CP)
- ・#107 不衛生な野営所 (2CP)

フランス (Ken Richards 担当)；カード 6 枚 (内訳：本国カード 1 枚、キースペースで 2 枚、フランソワ 1 世のカードボーナス 1 枚、1532 シナリオ初期設定 1 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#4 芸術家のパトロン (本国カード；5CP)
- ・#25 野戦砲 (戦闘カード；1CP)
- ・#36 スイス人傭兵 (反応カード；1CP)
- ・#45 カルヴァン追放 (1CP)
- ・#46 カルヴァン：キリスト教綱要 (5CP)
- ・#72 織物相場の変動 (3CP)

ローマ教皇 (Jim Adams 担当)；カード 6 枚 (内訳：本国カード 2 枚、キースペースで 3 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#5 教皇裁判所 (本国カード；4CP)

- ・#6 ライプチヒの宗教論争 (本国カード；3CP)
- ・#31 悪天候 (反応カード；2CP)
- ・#52 ミケランジェロ (4CP)
- ・#80 塩税暴動 (1CP)
- ・#86 聖ヨハネ騎士団 (2CP)

新教徒 (Ed Beach 担当)；カード 7 枚 (内訳：本国カード 1 枚、選帝侯スペースで 5 枚、トーナメントシナリオで 1 枚)。以下のカードを獲得しました。

- ・#7 私は此処に立つ (本国カード；5CP)
- ・#34 優秀な漕ぎ手 (反応カード；2CP)
- ・#42 ロクセラナ (4CP)
- ・#97 スコットランドの海賊 (2CP)
- ・#102 春への備え (3CP)
- ・#106 傭兵部隊への支払停止 (3CP)
- ・#110 ペルシャの反乱 (4CP)

外交フェイズ

交渉セグメント (交渉パート)：ヘンリー 8 世の婚姻状態マーカが「離婚の誓願」マスに配置されています。このターンは、ローマ教皇勢力が、離婚を認める代わりにイギリスから何らかの譲歩を引き出すチャンスです。しかしながら、ハプスブルグ家勢力が先にローマ教皇に接触し、カトリック陣営の結束とオスマン=トルコ帝国に対する海賊行為への共闘を持ちかけました。ローマ教皇勢力は、ハプスブルグ家のこの提案を了承し、同盟を締結、海軍戦隊の貸与を約束しました。

新教徒勢力は手札の中に CP 値の高いカード多いのですが、イベントとして宗教改革の推進に役立つものはありませんでした。しかしながら、フランスが、「カルヴァン：キリスト教綱要」をイベントとして最初にプレイすることを提案してきたので、フランスとの交渉に応じることにしました。

その他の交渉としては、イギリスと新教徒勢力の間で連携を深めることを目的とした同盟締結、フランスとハプスブルグ家の間で、海賊行為に協調して対応するために海軍戦隊の貸与を行うための同盟が締結されそうです。

交渉セグメント (公表パート)：

オスマン=トルコ帝国からの公表事項はありませんでした。ハプスブルグ家からは、フランスならびにローマ教皇勢力との同盟締結が公表されました。マルセイユに停泊しているフランス海軍戦隊の貸与をうけ、バルマへと移動させること、ローマに停泊しているローマ教皇勢力海軍戦隊の貸与をうけ、カリアリに移動させることが宣言されました。

イギリスからは、新教徒勢力と同盟を締結することが発表されました。

フランスからは、ハプスブルグ家との同盟を結び、海軍戦隊を貸与することが発表されました。マルセイユ停泊のフランス海軍戦隊をバルマに動かし、ハプスブルグ家の貸与マーカを配置します。外交表のハプスブルグ家 - フランスの欄に同盟マーカを配置して、同盟締結の旨を表示します。

続いて、フランスが、新教徒勢力からカード 2 枚の提供を受ける見返りに、バリーに駐留している傭兵部隊 2 個を新教徒勢力に譲渡する旨を公表しました (「カルヴァン：キリスト教綱要」をイベントとして使用することも新教徒勢力との間では合意に達していますが、現時点でその旨を宣言する必要はありません)。

ローマ教皇勢力からは、ハプスブルグ家との同盟を結び、海軍戦隊を貸与することが発表されました。ローマに停泊しているローマ教皇勢力海軍戦隊を、カリアリに移動させ、ハプスブルグ家の貸与マーカを配置します。外交表のハプスブルグ家 - ローマ教皇のマスに同盟マーカを配置します。

新教徒勢力はイギリスとの同盟締結を発表しました。外交表のイギリス - 新教徒のマスに同盟マーカを配置します。

また、新教徒は、フランスからの提案に合意する旨を発表しました。傭兵部隊 2 個がマインツに配置されます。フランスは新教徒の手札からランダムに 2 枚を獲得します。フランスが獲得したカードは、

- ・#102 春への備え (3CP)
- ・#106 傭兵部隊への支払停止 (3CP)

でした。

和平セグメント：和平交渉の要件を満たす勢力が存在しないためスキップします。

賠償金セグメント：捕虜となっている指揮官が存在しないためスキップします。

破門セグメント：破門状態の統治者が存在しないためスキップします。

宣戦布告セグメント：各勢力とも、他の主要勢力に対して宣戦布告を実施することができます。しかしながら、いずれの勢力も宣戦布告を実施しませんでした。このため、このターンは、独立キースペースへの攻撃と、新世界への投資が主になされるものと予想されます。

ウォルムス公会議フェイズ：

このフェイズは 1517 年シナリオでのみ実施するため、スキップします。

春期展開フェイズ：

オスマン=トルコ帝国：シュレイマン、正規兵*4、騎兵*1 をブダに移動。イブラハムと正規兵*1 はイスタンブールに残置しました。オスマン=トルコ帝国は、「ベネツィアからの情報」カードを使用して他のプレイヤーの手札を見ることも可能でしたが、行いませんでした。

ハプスブルグ家：バリャドリドのカール 5 世、アルバ公、正規兵*4（全て）をカルタヘナへ移動させました。

イギリス：ヘンリー 8 世と正規兵*5（全て）をロンドンからベルヴィックへと移動させました。チャールズ=ブランドンはロンドンに留め置きました。

フランス：モンモランシーと正規兵*2 をリヨンに移動させました。フランソワ 1 世と正規兵*2 はパリに留め置きました。

ローマ教皇：このターンは春期展開を行いません。

新教徒：新教徒は春期展開を行うことができません。

アクションフェイズ-第 1 ラウンド

オスマントルコ

#92「エジプトの反乱」カードを CP 獲得のために使用し、3CP を得ました。

オスマントルコは最初に移動を行う長所を生かし、まっすぐにウィーンへと進撃する予定です。

CP1：シュレイマン、正規兵*6、騎兵*2 をブダからプレスブルグへと移動させます。ハプスブルグ家は迎撃を実施しませんでした。

CP2：非城塞化スペースであるプレスブルグを支配します。ハプスブルグ家の支配マーカをオスマン=トルコ帝国のものに変更します。宗派はカトリックのままです。

CP3：シュレイマンと 8 個陸上部隊がウィーンへと進撃します。ハプスブルグ家は、戦闘回避を行わず、野戦を行うことにしました。野戦解決の第 1 ステップに移ります。オスマン=トルコ帝国は、手札から反応カード

・#33 ランツクネヒト（反応カード：1CP）

を使用します。この結果、ハプスブルグ家の部隊から傭兵部隊 2 個が除去されます。戦闘解決にあたり、オスマン=トルコ帝国は、サイコロを 10 個（8 個戦闘部隊とシュレイマンの戦闘値による 2 個）を振ることができます。ハプスブルグ家はサイコロ 6 個です（戦闘部隊 4 個とフェルディナンドの戦闘値による 1 個と防御側であることによる 1 個）。

オスマン=トルコ帝国の出目は、3,2,3,4,3,3,6,6,5,5 で 4 ヒットを達成します。対して、ハプスブルグ家の出目は、3,3,4,6,1,6 で 2 ヒットを達成します。ウィーンのハプスブルグ家陸上部隊は全滅し、フェルディナンドは捕虜としてオスマン=トルコ帝国の勢力カード上に移動させます。オスマン=トルコ帝国側は、正規兵 1 個と騎兵 1 個を除去しました。オスマン=トルコ帝国は野戦に勝利しましたが、ウィーンスペースの支配を獲得することはできません。というのも、ウィーンは城塞化スペースであり、支配を確立するためには、続くオスマン=トルコ帝国の

インパルスに攻囲戦闘を行い、勝利を収める必要があるためです。

ハプスブルグ家

#2「神聖ローマ帝国」カード（本国カード；5CP）をイベントとして使用します。イベントの効果として、カール 5 世をリンツ（他のユニット無し）に移動させました。このイベントによる移動を妨害するために「痛風」カード（反応カード）の使用を宣言したプレイヤーはいませんでした。

CP1-5：続いて、ハプスブルグ家は、5CP を使用してリンツに陸上部隊を生産します。傭兵部隊 3 個と正規兵部隊 1 個の生産を行いました。これで、カール 5 世は強力な部隊を編成することができましたが、ウィーンについては、カール 5 世が救援部隊として到達する以前に攻囲戦闘によって陥落しそうです。

イギリス

#54「ボトシ銀山」（3CP）イベントとして使用しました。ボトシ銀山のマーカを地図盤上のイギリス植民地欄（新世界の財宝表の左側）に配置します。

フランス

#46「カルヴァン：キリスト教綱要」カード（5CP）を外交フェイズの約束どおりイベントとして使用し、新教徒勢力を援助します。カルヴァンカウンターは活動済状態となります。イベントの要件としてカルヴァンは活動済状態となりますが、これは、このインパルスに理論指導者特典を使用したことにはなりませんので注意が必要です。このインパルスにジュネーブの周辺 2 距離のスペースでの宗教改革の試みを有利に展開するために、ファレル（Farel）が活動済状態となります。

宗教改革の試み 1 回目（ブザンソン）：新教徒勢力はサイコロを 5 個（隣接する新教徒スペース 3 個、隣接する宗教改革家 1 個、ファレルの特典）を、+1 の修正で振ることができます。サイコロの出目は、6,1,6,1,4 でした。このため、ブザンソンスペースの宗派は新教となります。

宗教改革の試み 2 回目（メッツ）：新教徒勢力はサイコロを 3 個（隣接する新教徒スペース 2 個、ファレルの特典）を、+1 の修正で振ることができます。サイコロの出目は、3,5,4 でした。ファレルの特典により、最終的な出目は 6 となり、同一言語圏では出目が等しい場合にも勝利を収めることができるため、メッツの宗派は新教となります。

宗教改革の試み 3 回目（グルノーブル）：新教徒勢力はサイコロを 3 個（隣接する新教徒スペース 1 個、隣接する宗教改革家 1 個、ファレルの特典）を、+1 の修正で振ることができます。サイコロの出目は、5,5,2 でした。ここでも、メッツの例と同様、宗教改革の試みは成功し、グルノーブルの宗派は新教となります。

宗教改革の試み 4 回目（リヨン）：新教徒勢力はサイコロを 4 個（隣接する新教徒スペース 2 個、隣接する宗教改革家 1 個、ファレルの特典）を、+1 の修正で振ることができます。リヨンでは、カトリック勢力（ローマ教皇勢力）が防御に成功します。ローマ教皇勢力はサイコロを 6 個（隣接するカトリックのスペース 3 個、隣接するカトリック勢力の陸上部隊 3 個）。

新教徒のサイコロの出目は、2,1,3,1 でした。

ローマ教皇のサイコロの出目は、5,1,4,5,3,3 でした。新教徒の修正後の出目は、3+1=4 で、ローマ教皇は 5 なので、リヨンの宗派はカトリックのままとなります。

宗教改革の試み 5 回目（ディジョン）：新教徒勢力はサイコロを 3 個（隣接する新教徒スペース 2 個、ファレルの特典）を、+1 の修正で振ることができます。サイコロの出目は、1,5,4 でした。ファレルの特典を使用し、修正後の出目は 6 となるため、宗教改革の試みは成功し、ディジョンの宗派は新教となります。

新教徒は結果として 5 回の宗教改革の試みのうち、4 回、成功を収めました。宗教紛争管理表で、宗派が新教のスペース数を 24 まで進めます。新教徒の勝利ポイントは 15 ポイントに増加し、逆に、ローマ教皇の勝利ポイントは 13 に減少

します。

ローマ教皇

#80「塩税暴動」カード(1CP)をイベントとして使用します。

政情不安マーカをグルノーブルとディジョンに配置します。これにより、政情不安マーカが取り去られるまで、フランスによるイタリアへの連絡線の設定が不可能となり、同時に、宗派が新教のスペース数を2個減じる効果があります。宗教紛争管理表で宗派が新教のスペース数を22に減じます。これにより、新教徒の勝利ポイントは14ポイント、ローマ教皇勢力の勝利ポイントは14ポイントとなります。

新教徒

#42「ロクセラナ」カード(4CP)をイベントとして使用しました。

担当者(エド)コメント:これにより、ハプスブルグ家に大きな恩を売ることができます。外交フェイズにはこのカードをイベントとして使用することについて合意等はありませんでしたが、オスマン=トルコ帝国の勢力が中欧に余り大きく広がるのも好ましくないのです。願わくば、ハプスブルグ家とオスマン=トルコ帝国との争いが長引き、両国とも国力をすり減らしてくれることが最も望ましいのです。このためにも、スレイマン大帝は、イベントの効果として2CPを消費することでイスタンブールに帰還させ、残った2CPで行動を行うことにします。

CP1:マインツに傭兵部隊1個を配置します。これにより、マインツには、ヘッセ公フィリップと正規兵部隊1個、傭兵部隊4個が存在することになります。

CP2:フィリップと正規兵部隊1個、傭兵部隊4個をケルンへと移動させます。マインツには傭兵部隊1個が残ることになります。ケルンには他の陸上部隊が存在しないため、ケルンは攻囲をうけた状態となります。

続いて、このアクションフェイズの2ラウンド目の行動をオスマン=トルコ帝国から順に行っていきます。6勢力全てがパスをするまでアクションフェイズは続きます。その後、第7フェイズ(冬季フェイズ)、第8フェイズ(新世界フェイズ)、第9フェイズ(勝利判定フェイズ)を行って、1ターンが終了します。

歴史的背景

この章では、ゲーム上の時間の単位であるターン毎に、宗教改革の時代の流れを概観していきます。本文中、太字で記載された登場人物、イベントの詳細については後の章で詳説いたします。

背景

15世紀には、ヨーロッパ世界が中世のまどろみから解き放たれる兆候がいくつも見受けられるようになりました。ヨハネス=グーテンベルグによる活版印刷術の発明によって、文化と技術の伝播に革新的な改革がもたらされることは明白でした。1453年には、オスマン=トルコ帝国が、コンスタンチノーブルを占領し、わずかに残っていたビザンチン帝国を地図上から消し去っています。ギリシア時代の自然科学がイタリアにもたらされた影響で、北イタリアを中心とするルネサンスが大きく花咲くことになりました。イベリア半島に於ける勢力争いも、フェルディナンドとイザベラの軍隊が、最後に残ったアラブ人の拠点であったグラナダを1492に陥落させることに成功しており、同年には、コロンブスが、新世界への航海に成功しています。

宗教面でも、カトリック教会組織は中世を通じて動揺を繰り返していましたが、改革の機運が高まっていました。14世紀のオックスフォードのジョン=ウィクリフによって、聖書の英訳がなされましたし、ボヘミアのフスは、カトリック教会組織に対する反抗を強めていました。ボヘミアのフス派教会が設立され、ローマ教皇から相対的に独立した地位を獲得、チェコ語での説教を行い、独自に聖餐式まで執り行っていました。

国王権力についても変化が起こっていました。イギリステ

ューダー朝の創始者ヘンリー7世が1509年に、幼い同名の息子に王国を託して死去しました。幼い、後のヘンリー8世は、1502年に兄のアーサーが伝染病で死亡した後、後継者に指定されていました。ヘンリー8世は、スペインとの同盟関係を維持するために、兄アーサーの未亡人であるアラゴンのキャサリンと婚約、イギリス王に即位してすぐの1509年に結婚しました。

新しいローマ教皇もこの時期に即位しています。1475年、フィレンツェに、ジョバニ=ロレンツォ=メディチとして生まれたレオ10世です。生まれたときから聖職者となることが義務づけられていた彼は、14歳という驚くべき若さで枢機卿に就任、1513年に教皇に就任すると、兄弟に、「神が我が一族に教皇位を与えたもうた。さあ。その立場をたのしもうてはないか」と語ったと云われています。そしてその言葉の通り、就任の祭典とパレードを壮大に執り行い、ローマにサン=ピエトロ大聖堂を建立するという壮大な建築計画を推し進めていきます。

フランスでは、1515年元旦に国王ルイ12世が逝去し、いどこにあたるフランシスが王位を継ぎました。21歳のフランシス1世は、イタリアの絵画と建築に大きな興味を有しておりました。そして、欧州の大国の君主として、先王が始めたイタリア戦争に没頭していくことになります。マリグナーノの激戦の末、フランシス1世はスイスを制圧、ミラノの支配権を再度獲得して、イタリアへの足場を確実にしていました。

ゲームに登場する国王で最後の紹介となります。1516年にアラゴンのフェルディナンド2世が逝去すると、アラゴン=カスティリヤ両王国は、フェルディナンド2世の孫のカルが継ぐことになりました。ベルギーのヘントに1500年に生まれたカルはユトレヒトのエイドリアン卿の庇護の元、オランダで成長しました。カルは、1506年に、その父より、オランダとフレンチ=コンテを相続し、スペインの版図は、ナポリ、シシリー、サルディニア、北アフリカ沿岸の諸都市、さらには、新世界の植民地を加えることになります。カル5世16歳の時点で広大であったその版図は、その後2度に渡って、さらなる拡大を続けることになります。

このような背景のもと、宗教改革の動きがまさに始まらんとしていたのです。

ターン1(1517-1523)

教皇レオ10世のサン=ピエトロ大聖堂建立を目指す情熱的な計画は非常に金のかかるものでした。このため、レオ10世は、アルブレヒト=ブランデンブルグに、教皇庁にさらなる資金を集めるために、新たな免罪符を発行することを命じました。アルブレヒトの部課のヨハン=テツェル(Johann Tetzel)がドイツに派遣され、市民や農民に免罪符を購入する様に活動を行いました。

一方の主役であるルターは、自営農民出身で、33歳のアウグスティノ修道会の修道士でしたが、6年にわたり、ヴィッテンベルグの神学校にて教鞭をとっていました。ルターは免罪符に関する学術的な議論を行おうと決心し、当時のやり方に従って、彼の理論を箇条書きに取り纏め、1517年10月31日、教会のドアに投げ入れられました。ルターの95箇条の論題は、すぐさま、ラテン語とドイツ語で印刷され、ドイツ中に知れ渡るようになり、テツェルが免罪符を販売するのに悪い影響を与えるようになりました。レオ10世は、直ちに、配下の優れた神学者であるトマソ=ディ=ヴィオ=カヤタン(Tommaso de Vio Cajetan)をドイツに派遣し、ルターに、その主張を取り下げさせようとした。ルターはアウグスブルグにてカヤタンと会談しましたが、自説を曲げることはしませんでした。身柄を拘束されることをおそれたルターは夜間にアウグスブルグを抜け出し、自宅へもどりしました。1年後、今度は、ルターと同僚の神学者アンドレアス=カールシュタット(Andreas Carlstadt)は、ライプチヒにてヨハン=エック(Johann Eck)と2週間に及び討論を行いました。ルターは、カールシュタットが、エックの激しい論調の前にやりこめられてしまう前に、変わって、エックとの討論を取り仕切りました。

こうして、宗教改革運動の初期のやりとりがなされている頃、神聖ローマ皇帝マクシミリアンが逝去しました。フランソワ1世とカル5世はともに後継者の地位を争いましたが、最終的には、フッガー家から借金をして攻勢にでたカル5世がフランソワ1世を押さえて、ドイツの王の地位につくことになりました。マクシミリアンが死去したことにより、カル5世は、オーストリアのハプスブルグ家領も相続して

おり、文字通り、キリスト教文化圏の最大の版図を有する国王となったのです。

神聖ローマ帝国皇帝位をめぐって、フランスとハプスブルグ家の間の緊張が高まると、英国の動向に注目が集まり出しました。1520年の5月～7月の3箇月の間に、ヘンリー8世とその重臣であるトマス＝ウォールゼイは、ロンドンにてカール5世と、カレ＝郊外の「黄金布の館」にてフランソワ1世と、さらに、オランダのグレーブラインにて再度カール5世と会談を行いました。「黄金布の館」で受けた歓待の宴は、それはきらびやかなものでしたが、最終的に、ヘンリー8世はカール5世の側に与することになり、ヘンリー8世の娘であるメアリ王女とフランス皇太子との婚約は破棄され、さらに、イギリスはフランスとは今後2年間は同盟関係を締結しない旨の約束をカール5世と交わすことになりました。これをうけて、3年後には、ヘンリー8世は、**チャールズ＝ブランドン**(Charles Brandon)をフランス侵攻のために大陸派遣しています。

イギリスとの同盟関係を確固たるものとしたカール5世は、イタリアに出向き、ローマ教皇から神聖ローマ帝国皇帝として戴冠をうけました。しかしながら、神聖ローマ帝国皇帝着任後の日々は困難の連続でした。まず最初に、スペインで**コムネロスの反乱**(Revolt of the Comuneros)が発生し、続いて、ドイツで広まっている、異端とも言えるルター派の宗教改革運動にも対処する必要がありました。このような情勢を受けて、教皇レオ10世は、ルターを破門としますが、ドイツの都市部の市民はヴィッテンベルグの修道僧(すなわちルター)の教えに共感するようになっていたのです。エックと**ジェローム＝アレンダー**(Jerome Aleander)は苦勞しながらルターに対する破門状をドイツ中に配布してまわり、ケルンとマインツでは、ルターの著作を焚書することにも成功しましたが、対抗して、ルターの支持者がヴィッテンベルグにて教皇の勅書が焼かれるという事態も発生しました。高名な学者である**デシデリウス＝エラスムス**(Desiderius Erasmus)はルターを支持したとの理由で告発され、その後、宗教改革運動からは一線を引くようになりましたが、彼がおそれていたとおり、ルター一派とローマ教皇庁は既に和解が不可能な状況となっていたのです。

このような状況のもと、カール5世は、ルターと直接交渉することが必要と判断し、ルターに対し、ドイツの指導者層が一同に会するヴォルムス公会議に出頭する旨命じました。ルターの到着に先立って、ルターに自説の取消を求めるローマ教皇側の高官達によって、ルターの理論は徹底的に攻撃されました。公会議の2日目、ルターがついに反論する瞬間が来しました。ルターは、はっきりと、そして力強く、

私は、今も、そして今後も、自説を取り下げることはできない。聖書に書かれていないことを認めるわけにはいかない。私は此処に立つ。それ以上のことはできない。神よ、助けたまえ

と答えました。

ルターは会議場を出て、そして皇帝が彼に対する処分を決める前にヴォルムスの街を離れました。ルターが自宅への道を急ぐ途中、選帝侯の**フリードリヒ賢王**(Frederick the Wise)がルターの身柄を拘束、皇帝の官吏の目から途絶されたヴァルトブルグ城にルターをかくまいました。ヴァルトブルグ城に滞在していた10箇月の間に、ルターはその生涯で最も生産的な活動、すなわち、新約聖書の大部分をドイツ語に翻訳するという事業を成し遂げました。ルターは1522年、過激化したカールシュタットの説教によって巻き起こされた政情不安を収めるために、フリードリヒ賢王に請われて再び人前に姿を現すまで、ヴァルトブルグ城に留まりました。

フランソワ1世は、カール5世に対抗し、カール5世を失地に陥れる策略をねっていました。公式に宣戦布告を行うことなく、軍隊をルクセンブルグならびにナバラに侵攻させたりしました。しかしながら、ハプスブルグ家側は、フランスの軍勢を押し返した上、教皇軍を動かしてミラノからフランス軍を駆逐しました。レオ10世が急死したため、教皇軍の指揮系統に乱れがでましたが、フランス軍はラ＝ピコラの戦いでも大敗を喫しました。レオ10世の後継は、当初、ユトレヒトのアドリアン(カール5世の後見者)が継ぎましたが、彼も年内に死亡し、クレメンス7世が教皇位につきました。クレメンス7世はレオ10世のいとこでフィレンツェのメデ

イチ家の出身です。クレメンス7世は、着位早々にして、ローマ教会始まって以来とも言える困難な職務に直面しました。

カール5世にとっても、また大きな障害に直面しています。1520年にオスマン＝トルコ帝国のセリム1世が逝去し、26歳の息子であるシュレイマンがスルタン位につきました。新しいスルタンは野心的で着位から2年で、ベルグラードとロードス島の攻略を完了させました。ロードス島では、シュレイマンの大軍勢を舞えに、ヨハネ騎士団7000名が6箇月間の防衛戦を繰り広げました。シュレイマンはヨハネ騎士団の奮闘に感心し、騎士団は名誉とともに島から撤退することを許可されました。ヨハネ騎士団は後にマルタ島に本拠地を移し、そこで、オスマン＝トルコ帝国船舶の航海を脅かしました。シュレイマンは障害、ロードス島でヨハネ騎士団に対して慈悲を与えたことを後悔したと云います。

新世界関係では、カール5世が1518年にスペイン王位を継ぐとすぐに、大西洋を西に進んで、南アメリカ大陸を迂回、香料諸島へたどり着くという計画をもった、野心的なポルトガル人探検家**フェルディナンド＝マゼラン**(Ferdinand Magellan)の接触を受けています。同年、キューバに派遣していた野心的なスペイン人総督の**ヘルナンド＝コルテス**(Hernando Cortes)は配下の兵士をユカタン半島からメキシコ中央部へと進撃させました。3年以内に、スペインは、アステカ帝国を滅ぼし、地球周回航海に成功するという、大航海時代の大きな出来事のうちの2つを達成しています。この時期、**ポンセ＝デ＝レオン**(Ponce de Leon)による不老の泉の探索のみが失敗に終わっているに過ぎません。

第2ターン(1524-1527)

宗教改革の試みが広まっています。チューリッヒでは、人文科学者で礼拝堂牧師を務めていた40歳のウルリッヒ＝ツウィングリ(Ulrich Zwingli)が、スイスでは初めての新教徒の街を作り上げています。ルターの教えをうけた**マルティン＝ブセール**(Martin Bucer)は結婚と、それに続く、ローマ教会からの破門をうけた後、ツウィングリと同様に、新教徒の街をストラスブルグにて立ち上げます。ルターは**キャサリン＝ボラ**(Katherine Bora)と結婚しました。ルターとこの元修道女との結婚生活は、その後20年にわたって聖職者の結婚のあり方の方向性を示すものとなりました。ルターの教えは、遠く、イギリスの**ウィリアム＝ティンダル**(William Tyndale)にも影響を及ぼしました。ティンダルはヘンリー8世が依然としてカトリックの教義を信奉しているために、イギリスを離れ、ドイツにて、新約聖書の英語訳を行うことにしました。

このような流れの中で、宗教改革の動きは制御が困難になってきています。1524年には**ドイツ農民戦争**(Peasants' War)が勃発し、2年にわたりドイツ本土が反乱に巻き込まれます。この時期の宗教改革の動きは最高潮に達し、1527年にマルブルグに最初の新教の大学が設立され、また、同年、ドイツでの宗教改革賛歌である「堅き守り」(A Mighty Fortress)をふくむ、ドイツ語の聖歌集がルターによって発行されるなどの成果がもたらされています。

イタリア情勢も過熱しています。フランスの将校である**チャールズ＝パーボン**(Charles Bourbon)はフランソワ1世に反旗を翻し、配下の部隊とともにマルセイユへと進撃を行いました。その後、イタリアへと反転し、ハプスブルグ家の部隊と協同してパピアを陥落させています。一連の戦いでは、野戦砲や火縄銃といった火器の効果によって、大部隊が崩壊、フランソワ1世は捕虜となってしまいました。1年後、フランソワ1世は、人質として、息子2名を差し出すことで、ようやく釈放されています。パーボンはその後、彼の傭兵部隊への支配力を失い、結果として、**ローマの掠奪**(Sack of Rome)が発生しています。(クレメンス7世が神聖ローマ帝国軍の捕虜になっているという)この時期に、ヘンリー8世は、アラゴンのキャサリンとの離婚の申請を初めて行っています。

オスマン＝トルコ帝国領内では、エジプトで反乱が発生しています。シュレイマンの有能な副官である**イブラハム＝パシャ**(Ibrahim Pasha)は、このマムルークの反乱を鎮圧後、シュレイマンと合流、ドナウ渓谷に沿って1526年の遠征を開始しました。この遠征では、モハーチの戦いでヨハン＝ザボリャ率いるハンガリー軍主力に対して大勝を収め、若きハンガリー王を討ち取るという大戦果を挙げました。ハンガリー王位が空位となったのをうけて、カール5世の弟である**フェルディナンド**(Ferdinand)公が、ハンガリー＝ボヘミアの王位につき、これによって、ハプスブルグ家の版図はまた大きく

なりました。とはいっても、歴史的にキリスト教世界の防人の位置にあったとはいえ、ハンガリーは、オスマン=トルコ帝国との間に緩衝地帯を有さない最前線の地勢となっていました。

新世界関連では、マゼランとコルテスの活躍の後、スペインは新世界へ向けて多くの冒険者を派遣しています。**フランシスコ=ヘルナンデス=コルドバ**(Francisco Hernandez de Cordova)はニカラグアを征服しましたが、その地にて、ライバルであるペドラリアス=ダビラによって殺害されています。マゼランの地球周回航海を生き延びたバスク地方出身の船長であるジョアン=セバスチアン=エルカノは、2度目の航海でモルッカ諸島目指して太平洋を横断中に壊血病で死亡しています。この時期、スペインが派遣した冒険者の中で、最も惨めな最後を遂げたのは、**パンフィロ=ド=ナルバエス**(Panfilo de Narvaez)で、フロリダへ向けて航海を行っている最中でした。

反して、イギリスが派遣した**ジョン=ラット**(John Rut)とイタリアからフランスへ向けて航海を行っていた、**ジョバンニ=ベラツァーノ**(Giovanni da Verrazano)は幸運に恵まれ、北アメリカ大陸の主要部に到達しています。

第3ターン(1528-1531)

マキャベリ(Niccolo Machiavelli)の死後、フランスは、マキャベリ主義者である**ジェノバ**の海軍提督**アンドレア=ドレア**(Andrea Doria)に翻弄されました。フランス王1世が、ジェノバの海軍戦力の助けを借りて、ハプスブルグ家支配下のナポリを攻囲中に、アンドレア=ドレアは反旗を翻し、ハプスブルグ家側に立つという行動に出たのです。これは、**バルバロッサ**(Barbarossa)がアルジェを占領し、そこを拠点として海賊行為を行っているという時勢を考えると非常に興味深い行動でした。

シュレイマン大帝のオスマン=トルコ帝国軍がハプスブルグ家の首都であるウィーンを脅かしています。オスマン=トルコ帝国軍は、ウィーンを包囲しましたが、冬の訪れまでに攻めざる見込みが立たないため、数週間ののち撤退しました。ハプスブルグ家は、次にオスマン=トルコ帝国が来襲するまでの時間を使って、ウィーンの城壁の近代化工事に着手しました。

1529年に、ドイツ帝国議会がシュパイアーにて開催されました。この時点では、カトリック勢力が優勢で、ドイツ諸侯に、その領内の宗教をカトリックとするか、あるいは、新教とするかの決定権があるものとされました。このときから、新教徒を指す言葉として、「プロテスタント」という語が用いられるようになりました。**フリッパ=ヘッセ**(Phillip of Hesse)はルター派とツウィングリ派を統合する好機ととらえ、**マールブルグの討論**(Marburg Colloquy)の開催を提唱しました。これに応じて、ルター、**フィリップ=メラクトン**(Philip Melancthon)、ツウィングリ、**ヨハネス=エコランパディウス**(Johannes Oekolampadius)、**ブセール**らが参集し討議を行いました。マールブルグの討論自体は特段の成果を得ることができませんでしたが、翌年、カール5世の元で行われた**アウグスブルグの宗教告白**(Augsburg Confession)の礎となりました。ルター派の宗教改革家ならびに、ルター派諸侯は、カール5世が、機会があれば、新教徒を撲滅しようと考えていることを理解していたため、1531年、新教を受け入れた都市、領邦を守るために、シュマルカルデン同盟を結成しました。そして、**フリッパ=ヘッセ**と**ザクセン公ヨハン=フリードリヒ**(John Frederick)が、シュマルカルデン同盟の軍事司令官に選出されました。

教皇クレメンス7世はハプスブルグ家によってなされていた軟禁状態から開放され、公式に、カール5世に対し、神聖ローマ帝国皇帝を叙任しました。また、**ロレンツォ=カンペジオ**(Lorenzo Campeggio)をイギリスに派遣し、ヘンリー8世の離婚の申請について公式に聴聞しましたが、この件については、早急な結論を避け、回答を引き延ばしています。このターンの最後の年である1531年にはハレー彗星が地球に大接近しています。新教徒にとって悪い兆候といえば、スイスの布教の拠点をカトリックの軍勢から守るために武装蜂起したツウィングリが戦没していますが、幸運にも、**ハインリッヒ=プリンガー**(Heinrich Bullinger)が即座に後を継ぎ、宗教改革運動を継続しています。

新大陸に関連しては、この時期は小康状態にありました。北米での欧州人による最初の植民都市であるニューファウンドランドは、イギリス、フランス、バスク、ポルトガル、スペイン等々のタラ漁師の拠点として繁栄していました。マゼランに匹敵する功績を立てようとする試みも細々とではあるもののなされており、カール5世は、**セバスチアン=カボット**(Sebastian Cabot)をモルッカ諸島へ向けて出発させましたが、結局のところ、ラプラタ川の河口を発見したに過ぎませんでした。コルテスが実施したメキシコ西海岸からの探検(これにより、マゼラン海峡を経ることの無い航路開発が意図されていました)も失敗に終わり、香料諸島へ到達できるのはポルトガル船に限られてしまいました。資金が不足したこともあり、カール5世は、香料諸島の支配権はポルトガルに優先権を認めるものとし、領土問題の解決を図りました(Sale of Moluccas)。

ターン4(1532-1535)

1532年4月に、オスマン=トルコ帝国がまず、大きな動きを見せています。今回は、モハーチから、ドナウ渓谷に沿ってブダへ向かうのではなく、まっすぐ西方へと向かいました。**ガンズ**(Here I Stand)の地図盤では**グラーズ**(Graz)のハプスブルグ家守備隊は奮戦し、オスマン=トルコ帝国軍の進撃を3週間遅延させました。シュレイマン大帝率いる軍勢は、オーストリア辺境の土地を破壊しつくしてまわりましたが、ウィーンを攻囲することはありませんでした。

オスマン=トルコ帝国は地中海沿岸でも猛威を振るっています。バルパロッサは84隻からなる艦隊をもって、美貌をもって知られる**ジュリア=ゴンツァガ**(Julia Gonzaga)を捕縛、シュレイマン大帝の後宮へ送り込もうとしますが、これに失敗すると、チュニスへと移動、チュニスの総督が、バルパロッサ接近の報を聞いて逃げ出した隙に、街を無血占領します。このような情勢のもと、教皇クレメンス7世が逝去します。後継者には**アレッサンドロ=ファネッセ**がパウロ3世として即位します。パウロ3世は、これに先立つ200年の間では、初めてのローマ生まれの教皇となりました。パウロ3世は即位してすぐ、カール5世に、海賊バルパロッサ対策を命じました。1535年、カール5世とアンドレア=ドレアは、400隻の艦艇と30,000人を擁した艦隊を編成、1箇月に及び戦役の後、チュニスを再占領しました。

宗教改革の動きはドイツ国外へと広がっています。パウロ3世は**ガスパロ=コンタリニ**(Gasparo Contarini)を枢機卿に任命しました。同じ頃、ヘンリー8世は、37歳のトマス=克蘭マーをカンタベリー大司教に任じています。克蘭マーは、最終的に、ヘンリー8世とキャサリンとの婚姻を無効とし、**アン=ブーリン**(Anne Boleyn)が英国王妃の地位につくことを可能としました。また、克蘭マーは国会とも協力し、首長令を可決させ、宗教問題についても英国がローマ教会から独立している旨を宣言しました。**ニコラス=コップ**(Nicholas Cop)はパリ大学での講演で新教の教えを紹介、フランスにも新教が広まっています。コップとカルヴァン(25歳、コップの講演準備を行った)は国を追われることとなりますが、新教そのものはパリでも信徒をあつめ、後年の**ブラカード事件**(Affair of the Placards)の布石となります。イギリス(タンダールと**マイルス=カバードール**(Miles Coverdale)による)、ドイツ(ルターとメラクトンによる)と同様、フランスでも、フランス語訳の聖書(**ビエル=ロベール=オリベッタ**(Pierre Robert Olivetan)監修)が発刊されています。

新世界に関しては、スペインが再度、突然勢力を盛り返します。1532年に**フランシスコ=ピサロ**(Francisco Pizarro)が200名を下回る部下とともにインカ帝国の内戦に干渉、コルテスの評伝に記載された内容によれば、インカ帝国の皇帝アタフアパを捕縛し、法外な身代金を獲得した上で、殺害するという行為にでました。これにより、インカ帝国は崩壊しました。北方では、**ヤキス=カルティエ**(Jacques Cartier)が北アメリカ大陸での太平洋への航路を求めてセントローレンス川を1600キロ以上遡上し、モントリオールに到達しています。この後、フランスはこの、新たに発見された土地(ヒューロン=イロコイ語で村を意味するカナダと名付けられました)に進出していきます。

ターン 5 (1536-1539)

1536 年はこのターンの中では最も危機的な情勢でした。イブラハム=パシャは、ペルシア方面に遠征中に、おそらくは、シュレイマンの新しい妻である**ロクセラナ** (Roxelana) の密命を帯びた者によって暗殺されてしまいます。ウィリアム=ティンダルは破門され、ブラッセル近郊にて火刑に処せられました。イギリスでは、アラゴンのキャサリンが癌で死亡、続いて、流産をしたアン=ブーリンは寵愛を失い、絞首刑となっています。この後、ヘンリー 8 世は**ジェーン=セイモア** (Jane Seymour) と再婚します (このため、1536 年は 3 王妃の年と呼ばれることもあります)。ジェーンは 1 年後、待ちに待った王子、すなわちエドワード 6 世を産んで直ぐに亡くなってしまいます。

ヘンリー 8 世とトマス=クロムウェルは、教会財産の収奪を目的として**修道院の解散** (Dissolution of the Monasteries) を命じます。イギリスのカトリック教会は、対抗して、**恩寵巡礼の乱** (Pilgrimage of Grace) と呼ばれる反乱を起こし、クロムウェル、克蘭マー、**ヒュー=ラティマー** (Hugh Latimer) を逮捕することを要求しました。ヘンリー 8 世は、これに対して、謀略を用いて首謀者を逮捕、反乱を鎮圧しています。

カルヴァンの**キリスト教綱要**は、1500 頁にも及ぶ大著で、この著作により、新教が理論的に確立されたと云うことができる書物ですが、これが、この時期に刊行されています。カルヴァン自身はジュネーブに留まる予定ではなく、**ウィリアム=ファレル** (William Farel) によって引き留められたに過ぎませんが、後、ジュネーブを新教徒の都市とするために腐心した様です。カルヴァンとファレルは、ジュネーブの高官の不興を買って 3 年間追放されることとなりますが、ジュネーブはすぐに、フランス語圏の宗教改革運動の拠点となっていきます。

新大陸では、面白い展開がありました。フロリダへの航海が悲惨な結末となったナルバエス隊の一員だった**アルザール=ニューエンツ=カベザ=デバッカ** (Alzar Nunez Cabeza De Vaca) が数千マイルの旅を経て、北西メキシコで 8 年ぶりに歴史上に名前を表します。彼は、原住民との遭遇やシボラの黄金郷伝説など、アメリカ大陸に関する最も古い旅行記を書き残しました。同じ頃、南フランス出身のユグノーが主な構成員となっているフランス船団が新大陸から帰還するスペイン船団を襲撃するようになりました。これらは、当初はごく小規模なものでしたが、次第に大規模かつ執拗になり、1538 年までに、ハバナが灰燼にきすまになりました。

最後に、**ゲラルダス=メルカトル** (Gerardus Mercator) によって探検行為に新たな科学的な進展が見られました。カール 5 世は、1537 年にオランダの地図制作者に世界地図の作成を依頼しました。メルカトルはこれをうけて、これまでの地図とは比較にならない正確さで新世界の地図を作成したのです。

ターン 6 (1540-1543)

短い期間でしたが、フランスとハプスブルグ家との外交関係が改善されました。フランソワ 1 世の 3 男とカール 5 世の娘とを結婚させ、フランスは持参金としてミラノを獲得するという計画が進みつつあったのです。フランス=ハプスブルグ連合軍によるイギリス侵攻をおそれたヘンリー 8 世は、新教徒勢力と同盟を結び、その証として**クレープスのアン** (Anne of Cleves) と再婚しました。とはいえ、この婚姻は早期に解消され、ヘンリー 8 世は続いて、**キャサリン=ハワード** (Kathryn Howard)、**キャサリン=パール** (Katherine Parr) 立て続けに再婚していきます。

対して、カール 5 世は先の婚約を破棄します。**アン=モンモランシー** (Anne de Montmorency) がこの責任を取って捕縛されました。以後、フランスはハプスブルグ家とイギリスを敵国として振る舞うことになりました。この状況に対処するため、フランソワ 1 世は、オスマン=トルコ帝国と接触を行うようになり、バルバロッサの私掠船団が南フランス沿岸で越冬することを許可するようになりました。この時期、オスマン=トルコ帝国は、カール 5 世に対して、ブダの再占領とアルジェリアの防衛に成功しています。

1540 年の教皇勅書によるイエズス会の設立 (**イグナチウス=ロヨラ** (Ignatius Loyola) による) から反宗教改革の動きが

活発化します。また、1542 年からは、**ジョバンニ=ピエトロ=カラファ** (Giovanni Pietro Caraffa) 主導の教皇異端審問が始まっています。ドイツでも、**ペター=ファバー** (Peter Faber) によって、主要な聖職者がカトリック側に再改宗しています。**ニコラス=コペルニクス** (Nicolaus Copernicus) が新理論である地動説の公表をためらったのもっともなことだったのです。

新大陸関連では、カルティエが**ジャン=フランシス=ロベール=パール** (Jean Francois de Roberval) を引き連れて再度新大陸を訪れ、現在のケベックシティの近郊に、カールスバーグロイヤル植民地を開墾しています。また、デバッカが書き記した黄金郷の探求がスペインではブームとなり、**フランシスコ=コロナド** (Francisco Coronado) と**ヘルナンド=デソト** (Hernando De Soto) が同じ時期に、財宝探求のために北アメリカへと派遣されています。もちろん、両者とも黄金郷を発見することはありませんでしたが、グランドキャニオンとミシシッピ川を発見しています。南アメリカ大陸では新たな大河が発見され、アマゾン川と命名されています。**フランシスコ=デ=オレラナ** (Francisco de Orellana) は、シナモンの木を探してアマゾン川をなんと、4500km 以上も流れ下り、大西洋に至ったのです。

ターン 7 (1544-1547)

英仏間の戦争は拡大していきます。ヘンリー 8 世は大陸にてイギリス軍を直卒、ブルゴーニュ地方の確保に努めます。これが、彼の治世での軍事的成功の最後の事例となります。同時期、フランスはイングランド南部への強襲上陸を試みますが、**ジョン=ダドリー** (John Dudley) 率いるイギリス艦隊にソレントの海戦で敗れ、押し返されています。

反宗教改革の動きも急速に進展していきます。**トレントの公会議** (Council of Trent) が開かれ、**レジナルド=ポール** (Reginald Pole) が大きな役割を果たすこととなります。ミケランジェロが、聖ピエトロ大聖堂の主任建築家に任じられ、**ジョージ=ウィスハルト** (George Wishart) がスコットランドで捕らえられ、火刑に処せられています。また、ウィスハルトの弟子である**ジョン=ノックス** (John Knox) も逮捕され、ガレ一船の漕手にされてしまいました。

この時期、これまで活躍してきた主要な指導者が世を去っています。ルターは 1546 年に、バルバロッサも同年に亡くなっています。**ドラグート** (Dragut) がバルバロッサの後を継いで地中海を荒らし回るようになりました。ヘンリー 8 世とフランソワ 1 世も逝去、翌年には、彼らの息子であるエドワード 6 世、アンリ 2 世も相次いで世を去りました。

カール 5 世はトルコと和睦し、ようやく、新教徒の根拠地に対して軍事作戦を行う余裕ができました。**ザクセン公マウリッツ** (Maurice of Saxony) の裏切りや、アルバ公の天才的な部隊指揮もあいまって、ムールブルグの戦いで大勝利をおさめ、新教徒勢力の指揮官両名を包囲することに成功しています。

新大陸では、スペインは新大陸で黄金郷を発見することには失敗しましたが、1545 年に、ポトシ (現在のボリビア) にて銀鉱脈を発見、セロ=リコ (スペイン語で豊穡の丘) と名付けました。ポトシはこの時代の最大もブームタウンとなり、南アフリカ大陸の内奥、標高 4000 メートルという悪条件にもかかわらず、16 世紀の終盤にはポトシの人口は 15 万人に達し、新大陸最大、あるいはヨーロッパの主要都市に比肩する規模の都市となりました。ポトシからスペインに持ち込まれた銀はヨーロッパ経済の発展に大きく寄与しただけでなく、次の世紀まで続くインフレをもたらしました。また、スペインは、マヤ文明の征服にも成功しています。**フランシスコ=モンテジョ** (Francisco de Montejo) がユカタン半島にあるマヤ文明の本拠地を占拠、彼の父が 2 度に渡って試み、結局成功しなかった事業を完遂しました。

ターン 8 (1548-1551)

エドワード 6 世の統治下のイギリスでは宗教改革の試みが着実に進捗しました。ブセルが招かれ、大司教の克蘭マーは共通祈禱書を作成、これにより、英国国教会の祭礼式典の細則が規定されました。

フランスでは、新しい税金制度に対して**塩税暴動** (Gabelle

Revolt)が発生しています。アンリ 2 世は、復権したモンモランシーを暴動鎮圧に派遣しています。スレイマン大帝は 2 度目となるベルシア遠征を開始、ドラグートはトリポリを占領して、海賊行為の根拠地を確立しました。

最後に、ファバーの弟子であるペーター=カニシス (Peter Canisius) は、イエズス会士としてバイエルンで布教活動を行っていましたが、1550 年にパウロ 3 世が逝去すると、新教公ユリウス 3 世として即位しました。ローマ生まれのユリウス 3 世は、第 1 回トレント公会議を招集し、教皇在位 5 年間の間に、イエズス会への特許状を更新し、第 2 回トレント公会議への道を開くことになるでしょう。

ターン 9 (1552-1555)

カール 5 世の治世の終盤は余り幸運なものではありませんでした。ハプスブルグ家の軍勢は、ザクセン公マウリッツの奇襲をうけ、大損害をうけた後インスブルグまで後退しました。アンリ 2 世は新教徒側に立って、メッツをフランス軍にて占領させました。カール 5 世とアルバ公はアンリ 2 世の部隊に対して攻勢をとり、メッツの解放には成功しましたが、フランス軍を降伏させることはできませんでした。

ミカエル=セルベトス (Michael Servetus) は急進的な神学者であり、科学者でもありましたが、ジョン=カルビン (John Calvin) によって、異端者として火刑に処せられています。

ジェーン=グレイ (Lady Jane Grey) の反乱を鎮圧したのち、メアリ 1 世がイギリス王位についています。彼女はステファン=ガーディナー (Stephen Gardiner) を大法官に任命し、英国内で異端狩りを行いました。メアリはカール 5 世の息子フィリップと 1554 年に結婚しましたが後継者は生まれず、イギリスがハプスブルグ家の所領となることはありませんでした。

カール 5 世はフェルディナンドにドイツに関わる事項の全権を委譲しました。フェルディナンドはアウグスブルグの宗教和議を締結、ドイツ諸侯は自領邦内の宗教をルター派か、カトリックかの選択を行うことが可能となりました。ドイツにおいては、新教徒はローマカトリック教会からの独立を勝ち得たのです。その後、カール 5 世は退位し、スペインとオランダの領土は息子のフェリペが相続しました。

新世界では、ゲームで取り扱う時代の最後の新世界への進出が、エドワード 6 世とメアリ 1 世統治下のイギリスで試みられています。エドワードはまず最初に、セバスチアン=ガボットをスペインから引き抜きました。ガボットは、北アメリカ大陸の北端をまわって中国へたどり着く航路の開発を提案し、ヒュー=ウィラビー (Hugh Willoughby) に航海を命じました。ウィラビー隊は北極海で凍死してしましますが、船団の 3 隻の中の 1 隻を指揮していたリチャード=チャンセラ (Richard Chancellor) は幸運にも白海を発見、上陸後、陸路をモスクワに到達しています。彼らは、イワン 4 世の宮廷に迎えられ、ロシアとイギリスの新たな交易路を確立するに至りました。

宗教改革時代の登場人物

この章では、理論指導者、軍司令官、海軍提督、探検家、征服家、その他、カードに登場する人物について略歴を記載していきます。各区分内では、歴史的背景の章で登場したのと同じ順序に並んでいます。統治者ならびに宗教改革家の略歴についてはここではふれません。というのも、歴史的背景の章で概要を記載済であるからです。

理論指導者



ヨハン=テツェル (Johann Tetzel) 1465?-1519

17 歳の時に、ヨハン=テツェルはドミニク派修道院に入るためにライプチヒへと旅立ちました。1503 年、免罪符販売人としてマゲデブルグ、ブレーメン、リガなどのチュートン派修道会で活躍しています。その後 7 年にわたりドイツ各地で、「愛しい人が煉獄で過ごす時間を短くすることができる」と説法しながら、免罪符を売り歩きました。

その後 1516 年には、教皇レオ 10 世がローマに聖ピエトロ

大聖堂を建立するための財源として発行した免罪符販売人として再びドイツに姿を現しています。彼は免罪符販売にあたって、「革袋の底にコインが落ちる音が魂を煉獄から救済する」というセールストークを用いていました。彼が免罪符販売に精を出したことは結果としてルターの 95 箇条の論題を生む原因となりました。ルターの論題はすぐさま人々の話題となりましたが、テツェルはすぐさま 106 箇条の反論を発表しましたが、人々の心情はテツェルよりもルター同意するものが多数を占めました。ローマ教皇の不興を被った後、テツェルはドミニカ派修道院に戻りました。テツェルは、教皇が、ルターによるローマ教会攻撃の初期対応を誤ったことのスケープゴートにされたわけです。その後、失意のままこの世を去りました。



トマソ=ディ=ヴィオ=カヤタン (Tommaso de Vio Cajetan) 1469-1534

幼名をヤコボ=ヴィオといい、15 歳でドミニカ派修道院に入り、トマス=アクィナス (洗礼名であるトマソの命名者) の元で学びました。異名のカヤタンは彼が生まれたナポリ郊外のガエタからつけられています。30 歳までに、パウダ大学で神学で博士号を取得しています。1517 年にレオ 10 世は彼を枢機卿に任命、パレルノ大司教としています。

1518 年にはアウグスブルグの帝国議会に、教皇の特使として派遣され、反旗を翻した修道僧であるマルティン=ルターの教義について諮問することになっていました。多くの関係者が見守るなか、ルターは自説の撤回を拒否、逆に、カヤタンに対して聖書についての議論をふっかけ、そして、ルターが圧勝しました。これまでの経緯で不快感を募らせていたカヤタンは「獣とこれ以上話をするつもりは無い。頭のなかで空想で満ちていて、目ばかりぎらぎらとさせあって」と捨て台詞を吐いたと云います。

その後、カヤタンはルターに対する破門の宣告書と、ヘンリー 8 世の離婚の誓願を拒否する決定を下しました。ローマで 1534 年に没しています。



アンドレアス=カールシュタット (Andreas Carlstadt) 1480-1541

アンドレアス=カールシュタットは 24 歳でヴィッテンベルグ大学の教員となり、ルターやフィリップ=メランクトンの同僚として教鞭を取っていました。ルターと同様の考えを有していたと思われます。実際、1517 年 4 月には、ルターが城門にその 95 箇条の論題を掲示するのに 6 箇月も先だて、152 箇条の論題を発表しています (ルターは街が祝祭日となる直前のちょうど良い時期に発表したと云えます)。

カールシュタットは、主に、初期のエックによる攻撃に対して、ルターの擁護を行いました。紛争に決着をつけるため 1519 年にエックはライプチヒにてカールシュタットを公開討論の場に立たせようと試みました。6 月 27 日、カールシュタットとエックが対峙しました。ライプチヒ大学ならびにヴィッテンベルグ大学から学生、教員が大挙して押し寄せました。7 日間に及ぶ討論ののち、議論は、人間の墮落と教皇の首位権に及びました。エックはカールシュタットを論破しつつありましたが、7 月 4 日、ルターがカールシュタットに取ってかわり、その後 5 日間に渡って討論がなされました。討論全般をみると、カトリック側が優勢でした。エックは、ルターの信念がその多くをボヘミアのフス派 (前世紀に異端とされています) によっていることを解き明かしました。

ヴィッテンベルグの宗教改革家として最も急進的であったカールシュタットは、ルターがヴァルトブルグ城に匿われている間も精力的に活動を行いました。ヴィッテンベルグにて職務を果たす間も、カールシュタットは変化の種をまき続けていたのです。それは、貴族の婚姻を執り行ったり、絵画や彫像を偶像であると非難したり、規定の法衣の変わりに、学究の徒の黒色マントを着用したり等々です。一月も立たないうちに、ヴィッテンベルグは混乱の渦に巻き込まれてしまいました。これを見て、フリードリヒ賢王はルターをヴァルトブルグ城から呼び戻し、事態の収拾にあたらせました。ルターに強く説得され、カールシュタットはその活動の場をバーゼルに移し、その地で 1541 年に亡くなりました。


ヨハン=エック (Johann Eck) 1846-1543

ヨハン=エックは、24歳で神学の博士号を取得した、宗教改革初期のルターの好敵手です。ルターの95箇条の論題に対して、エックは独自の反論を公表、ルターを異端を広め混乱を助長していると非難しました。ライプチヒの宗教討論ではその弁証法的論証技術を駆使しカルシュタットを論破しています。ルターに対しても、エック自身が、ルターを評して、彼の眼識と学識を高く評価していましたが、論争で打ち負かされることはありませんでした。ライプチヒに集まった宗教学者達は、エックを論争の勝者とみとめ、賞賛したのです。

翌年、教皇レオ10世は、エックとアレンダーをドイツに派遣し、街々にルターに対する破門状を公示するよう支持しました。しかしながら、彼らは激しい抵抗に遭遇します。ライプチヒに置いてさえ、高揚した群衆に拉致されることを避けるため、エックは修道院に身を隠す必要があるほどでした。このような状況にも関わらず、その後も、新教徒に対する攻撃をやめることはありませんでした。エックは、ルター、ツウィングリ、メランクトン、ブッセル等と論争を行い、アウグスブルグ(1530)、ヴォルムス(1540)、レーゲンスブルグ(1541)で開催されたドイツ帝国議会にて、カトリック側の主たる論客として活躍しました。


ジェローム=アレンダー (Jerome Aleander) 1480-1542

ヴェネツィア郊外で生まれ、幼名をジオラモ=アレンダーといいました。当時最も教養を積んだ人物の一人で、1508年にはパリ大学の学長となっていました。後、ローマに旅し、1519年に、教皇レオ10世に請われてバチカンの資料管理者に着任しています。

宗教改革の流れの中で初めて登場するのは、ヴォルムス公会議で、そこに教皇の代理人として出席しています。そこで、彼はルターを激しく攻撃し、ルターの思想を偏向主義であるかの様に議論を導きました。最後には、ヴォルムス勅令を作成、ルターを追放者と規定、ルターの著作を読むことを禁止しました。

アレンダーは続いて、オランダへと向かい、アントワープにて修道僧2名を異端として1523年に火刑に処しています。これが、宗教改革運動の最初の殉教者となりました。パピアの戦いの折にはフランソワ1世の官吏を務めており、捕虜となった末、多額の身代金を支払って保釈されています。その後、1536年には教皇パウロ3世のもとで枢機卿となり、6年後に没するまでローマに留まりました。


マルティン=ブセール (Martin Bucer) 1491-1551

アルザス地方に生まれたブセールはドミニカ派修道院にて神学の博士号を取得、人文科学者であるエラスムスの熱心な信奉者でもあります。1518年、ハイデルベルグの公開討論にてルターの教説に触れ、直ぐにその熱心な信奉者となりました。1522年に彼は結婚し、新教の教義の最初の実践者となります。後にローマ教会から破門されますが、新教に寛容であったストラズブルに移りその地を、宗教改革運動の重要な拠点に育て上げます。

ブセールはルター派の熱心な信奉者で、ルター派、ツウィングリ派両派が受け入れることができる共通の教典を編纂しようと幾度も試みました。しかしながら、その様な宥和は実現しませんでした。カルヴァンがジュネーブから追放された間も、教会にて、カルヴァンの教えを説き続け、カルヴァン派の維持に努めています。その生涯を通じて、96本もの多数の学術論文を著作しました。

1549年、クランマーからの招致をうけてエドワード6世統治下の新教徒よりのイギリスへと渡りました。1552年版の共通祈禱書の作成に尽力しています。彼自身は1551年にイギリスで死亡し、オックスフォード大学の教会に手厚く葬られました。しかしながら、イギリスに於ける宗教改革の流れは安定せず、1557年にはメアリー女王の指示で彼の遺体が掘り出され、その舌が抜かれた後、火炙りにされました。彼の名誉は、エリザベス女王の時代に回復され、イギリスの聖人に叙されています。


ウィリアム=ティンダル (William Tyndale) 1495-1536

ウィリアム=ティンダルはイングランドのグロスターシャーで1495年に生まれました。言語に多大な能力を発揮し、10歳にてラテン語を読むことができるようになりました。2年後オックスフォード大学に入学、1515年には修士号を得ています。大学に残る記録に

よれば、ティンダルは8カ国語--ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、スペイン語、フランス語、イタリア語、英語、ドイツ語--に通じており、いずれの言語も母国語であるかのように話すことができるとされています。

ティンダルはその言語能力を聖典の研究に費やし、ルターやツウィングリと同様、宗教改革家として重要な働きをします。その後、1521年には牧師に任命され、併せて、コスタワルド地方の領主の個人教師にも務めました。彼は、領主の館を訪れた客人に対して、聖典を正確に引用し、神学論争を行うという手法でその宗教理念を説きました。

ティンダルの目標は、聖書を、現地共通語である英語に翻訳し出版することにあります。彼は最初に新約聖書を原典のギリシャ語から英語に翻訳しました。彼は、地元のカトリック教会の司祭に対して以下のように述べたと伝えられています。曰く、「私は教皇、そして教皇が定めた種々の決まりを否定する。もし、神が私の余命を幾ばくか残してくれるのであれば、わたしは誰よりも多くの聖典を紹介することができるであろう」。

その後、ティンダルはロンドンに移り、ロンドン司教であるクスベルト=タンスタールに見いだされます。タンスタールはティンダルの聖書翻訳プロジェクトの後援者となりうる人物でしたが、不幸なことに、国王ヘンリー8世は当時、ルターの教えに対して強く反対する立場を取っていました。このため、1521年にはティンダルはトマス=モア卿のもとで、ルター派に反対する小冊子「マルティン=ルターに対する7つの聖なる宣言」を作成しました。これを受けて、教皇レオ10世は、ヘンリー8世に「真実の守護者」の称号を贈っています。当然ながら、ヘンリー8世統治のこの時期には聖書の英訳活動については支援を得ることができませんでした。

このため、1524年にはティンダルはハンプブルグに移住、二度とイギリスに戻ることはありませんでした。ティンダルは、ヴィッテンベルグに向かい、ルターとその支持者であるフィリップ=メランクトンと直接対話しました。彼は、年内に新約聖書の英訳を完了し、ヴォルムスにて出版しました。1526年までに、英訳された新約聖書は3000部出版され、乾物に紛れ込ませる形で密かにイギリスへと送られました。

ヘンリー8世はこのような形で密輸入されることを嫌い、全ての港で物品の検査を厳格化させました。ロンドン司教のタンスタールは教区令を発しています。その一部を引用します。「多くの子供達を邪悪へと導く。ルター派の一味は暗闇の中でもがき真実とカトリックの真理を目にすることができない。新約聖書を注意深く我々の英語に訳して... <省略>... (我々)はあなた方に課す... 斯様な本を...」

密輸された英訳聖書はロンドンのセントポール大聖堂の前で焚書にされました。しかしながら、この焚書を逃れたティンダルの英訳聖書はイギリス国内に広く行き渡ることになります。手を焼いたタンスタールは、オランダのハブスブルグ家官吏に、英訳聖書の出版と輸出を停止する依頼まで行っています。また、タンスタールは、ティンダルと親しい布商人を見つけ出し、英訳聖書をイギリスから排除するためであれば、言い値で買い取る約束までしています。この仲買人のおかげで、当時借金まみれであったティンダルは在庫を一斉に処分することができ、借金を完済、改訂版の作成に取りかかることが、皮肉にも、イギリスのカトリック教会からの資金で可能となったのです。

もちろん、良いことばかり続く訳ではありません。1529年までに、ティンダルは5書(旧約聖書の最初の5巻)の英訳を完了させ、ハンプブルグから出版社のまつアントワープへと出航しますが、その船が難破し、完了した英訳原稿と参考資料一式を失ってしまいます。これらは、マイルス=カバーダールとの共同作業によって翌年には再度、英訳が完了しますが、英訳された5書は1530年の夏にはイギリスに届きますが、同時に、ティンダルはイギリスならびにハブスブルグ家の官憲から追われる身となります。以後数年にわたってティンダルは大陸の都市から都市へと逃亡生活を余儀なくされてしまいます。最終的には、1535年、アントワープにて、晩餐会への招待を装った罠に引っかかりとらわれの身となってしまう、ブラッセル北方の壘に幽閉されます。1536年10月には、異端の罪で有罪とされ、火刑に処せられました。

カバーダールがティンダルの後を継いで、ティンダルの残したノートをもとに、聖書の完全英訳を完遂しました。カバーダールが最後をまとめたものの、そのほとんどは、ティンダルの流暢な散文と正確な訳語から成り立っています。そして、そのほとんどがジェームス王版に引き継がれ、今日に至っています。現在、1526年に印刷された最初の3000部新約

聖書は2部が現存しており、うち1部は、大英博物館が1994年に100万ポンドを超える金額で入手しています。



フィリップ=メランクトン (Philip Melancthon)
1497-1560

フィリップは、その苗字を、彼が人文科学を学び始める際に、旧姓のシュバルツエルド(黒い大地)から、同じ意味のギリシア語表記に変更しています。1518年に、ヴィッテンベルグ大学のギリシア語教授に就任、以後28年間に渡って、ルターを擁護する立場で、外交面で、そして補佐役として活躍しました。ルター自身が語るところによれば、「私は道を切り開いただけ、フィリップ教授がその直後から優しく、そして丁寧に種をまき、たっぷり水をやり、その結果、神がフィリップに祝福を与えてくれたのです」。

1530年のアウグスブルグの帝国会議に、ルターは出席することが叶いませんでした。というのも、ルターは以前として指名手配をうけていたからです。ルター不在のなか、メランクトンはアウグスブルグの宗教告白の原案を作成、推敲を行っています。ルターが亡くなった後、メランクトンはルター派教会の精神的指導者となり、その役目を生涯果たしました。



ヨハネス=エコランパディス (Johannes Oekolampadius)
1482-1531

16世紀の他の人文科学者と同様、ギリシア風の名前に変名しているヨハネス=エコランパディス(馬の尻という意味)は、ファルツに生まれ、ボローニヤ大学で学びました。1515年にはパーゼルの教会牧師となっています。彼は、1519年前後に18箇月に渡ってアウグスブルグで説法を行っていましたが、この時期にルターならびにメランクトンと関わりを持つようになりました。その後、1522年にパーゼルに戻り、ツウイングリ右腕としてスイスの宗教改革運動に尽力するとともに、マールブルグの討論にツウイングリ派の立場で参画しています。1528年に結婚、彼の妻(ヴィランデス=ローゼンバラット)は14年後、マルティン=ブセールと再婚しています。ツウイングリが戦闘に巻き込まれているという知らせが届いたとき、彼はかなり重い病に伏しており、その後、失意の後に亡くなっています。



ロレンツォ=カンベジオ (Lorenzo Campeggio) 1474?-1539

ボローニヤの法律家の息子であるロレンツォ=カンベジオは彼自身も5人の子供の父親でもありました。彼は、妻が1509年に死去した後、僧門に入りました。8年後に枢機卿となっており、宗教改革初期のさまざまな出来事に立ち会っています。1518年にはイギリスに渡り、ヘンリー8世の信をうけ、ソールズベリーの司祭に任命されています。ローマの掠奪が発生した折にはクレメンス7世の傍にあり、カール5世が神聖ローマ皇帝として戴冠をうけるのに立ち会っています。また、1530年のアウグスブルグ帝国会議ではメランクトンと交渉を取り纏め、パウロ3世選出のコンクラーベにも参加しています。

カンベジオはヘンリー8世がアラゴンのキャサリンとの離婚を申請した際に、教皇の特使としてイギリスに赴いたことで有名であり、クレメンス7世の命を帯びて、イギリスではヘンリー8世の要望を聞くにとどめ、何らかの決断を下すことはしませんでした。イギリスでの最終日に、皆が何らかの結論を期待する中、カンベジオは審理の延期を宣言し、イギリスを去ります。彼が再度イギリスに赴いたのは、1535年、ヘンリー8世がアン=ブーリンと再婚したことを原因とする破門状をヘンリー8世に届けるためでした。



ハインリッヒ=プリンガー (Heinrich Bullinger)
1504-1575

スイスの宗教改革家であるハインリッヒ=プリンガーが生まれたのは、ツウイングリ次の世代に相当します。プリンガーはツウイングリの説教を1527年にチューリッヒで聞き、翌年、ツウイングリとの議論するためにベルリンに赴きました。カッペルの戦いでツウイングリが死亡すると、プリンガーとその家族はチューリッヒへと移住します。チューリッヒへ到着後、最初の日曜日に、説教台から「多くの者がツウイングリの死を信じていない!彼は不死鳥のごとく復活するであろう!!」と熱弁を振りました。その後、44年後に亡くなるまで、プリンガーはこの教会の責任者を務めました。

プリンガーは驚異的な文筆家でその能力ゆえ、宗教改革に

関して、ヨーロッパ全域にその影響力を発揮しました。特に影響が大きかったのがイギリスで、彼とマーティン=ブッセール両名の協力で英国国教会の基礎を築きあげたともいえます。今日、驚くことに、彼の手による書簡が12,000通以上も残っています。彼は、ルター派、カルヴァン派、英国国教会と連絡を取り続け、また、フィリップ=ヘッセ、ヘンリー8世、エドワード6世、エリザベス女王、レディ=ジェーン等の貴族との人脈も有していました。



ガスパロ=コンタリニ (Gasparo Contarini) 1483-1542

ヴェネツィアの貴族の家に生まれたガスパロ=コンタリニはパドバ大学で自然科学、哲学、神学を学びました。1520年の暮れに、ヴェネツィアの外交官としてカール5世の宮廷に派遣され、1525年までその職にありました。また、1528年から1530年にかけて、教皇クレメンス7世に仕え、カール5世の戴冠にも立ち会っています。彼は、レジナルド=ポールやジョバンニ=ピエトロ=カラファ等とともに、カトリック教会内部の改革派として活躍しました。

1535年に教皇パウロ3世はコンタリニを枢機卿に任命しています。彼は、カトリック教会内部の不満分子を抑制する職務につき、イエズス会設立の協力者となっています。カール5世からの要望で、1541年、レーゲンスブルグの議会にも出席しています。そこでは、カトリックと新教徒との調停を成立させることはできず、翌年、死亡しています。

ニコラス=コップ (Nicholas Cop)

1533年にパリ大学の学長を短期間務めていたことを除いて、コップについては余り知られていません。学長にある間、コップは学期始めの説教を行いました。彼の説教は、新教徒よりのもので、「世俗の行いではなく、信仰心によってのみ魂の救済がもたらされる」というものでした。

コップはこの演説の真意を説明するよう要求されましたが、説明を行う代わりにパリを去りました。フランソワ1世はコップを逮捕する旨指示しましたが、彼はパーゼルへと逃亡することに成功しています。カルヴァンとコップは友人同士で、カルヴァンを頼ってパーゼルへと逃亡したものとされます。一説では、コップの演説の原稿を書いたのがカルヴァンだとする説もありますが、確証はありません。コップの説教の後、フランスの新教徒達は活気づき、翌年、ブラカード事件を引き起こすこととなります。



ピエル=ロベール=オリベッタ (Pierre Robert Olivetan) 1506?-1538

ピカルディ生まれのピエル=路ベールは、彼が夜中まで仕事を続ける悪癖からオリベッタ(夜中の油)というあだ名をつけられています。パリ大学ならびにオルレアン大学に学び、その間に新教徒の教えに感化されたものと思われます。ジョン=カルヴァンはいくど、カルヴァンをたきつけたのはオリベッタであると多くの人々によって主張されています。1528年には背教の疑いをかけられ、ストラスブルグへ亡命しています。

5年後、彼はアルプスを登り、ワルド派信者達と共同生活を始めます。そこで彼は、この地の宗教的にも社会から放置された社会であるワルド派信者の子供達に教育を施しました。ワルド派信者の大人達は、フランス語訳された新約聖書に興味を示し、オリベッタに金貨500枚を贈って、翻訳活動を支援しました。オリベッタは、ヤコス=ルフェーヴル=デタポルの手によるフランス語訳新約聖書を参考に、ヘブライ語の旧約聖書とギリシア語の新約聖書のフランス語訳を完了させます。これらは1535年に刊行され、以後350年の長きにわたり、フランス語聖書の決定版として利用されました。オリベッタはイタリアにて32歳の若さで客死しますが、その貴重な蔵書をいとこのカルヴァンに寄贈しています。



マイルス=カバードール (Miles Coverdale) 1488?-1568?

ヨークシャーに生まれたマイルス=カバードールは、ケンブリッジ大学で哲学と神学を学び、1514年に司祭に除せられています。宗教改革の動きがイギリスにも及んだ折に、カバードールは新教側につく集団と接触、そこで、トマス=クロムウェルと出会い、彼の影響もあって聖書の翻訳活動に着手します。しかしながら、1528年までに、その活動は非常に危険なものとなったため、カバードールは大陸へ亡命、そこでティンダルの5書の翻訳に協力するようになります。

ティンダルが捕縛、処刑された後、カバードールは、ティンダルが残したノートに元を聖書の完全英訳を完遂します。カバードールはラテン語の知識を有していましたが、ヘブライ語、ギリシア語の知識はありませんでした。彼の業績は、他者のとの共訳を職人技で編集、まとめ上げたことにあります。完成した完全英訳聖書は、友人のクロムウェルに進呈されました。クロムウェルはこれを出版すべきと判断、1537年に初版が刊行され、その後、「大聖書」として1539年に改訂出版されています。

カバードールは短期間、イギリスに戻りましたが、クロムウェルが1540年に失脚すると再度ドイツへと戻っています。その後、ファルツにてルター派の牧師、学校長として8年間を過ごしました。その後、1548年にイギリスに戻り、王妃キャサリン=パールの専属牧師を務め、後にはエクセターの司教となっています。メアリーが女王の地位につくと、彼は3度目の亡命を余儀なくされ、今度はデンマークへ移住しています。エリザベス女王の時代になると、再びイギリスへと戻っていますが、司教の地位に復帰することはありませんでした。



ヒュー=ラティマー (Hugh Latimer) 1485?-1555

ヒュー=ラティマーはレスターシャーの農家に生まれました。14歳でケンブリッジ大学クライストカレッジに入学、1522年には大学の牧師となっています。当初は反ルター派の立場でしたが、トマス=ビルネイに出会ってすぐに、宗教改革側に立つようになりました。

ラティマーは活動的かつ熱心な牧師で、常に貧困層を擁護していました。彼は少しばかり配慮不足のところがあり、説法の過程で、聖母マリアを罪人と云ったり、煉獄の存在を否定したり、多くの司教、修道院長等を盗人呼ばわりする等、無用の混乱を招くことがありました。ヘンリー8世の治世に、2度ロンドン塔に収監されていますが、いずれも短期で釈放されています。これは、おそらく、ヘンリー8世がアン=ブーリンと再婚することに尽力したためであろうと推測されます。エドワード6世の治世には、ラティマーはついに自由に発言が可能となりました。彼は、毎週日曜日に2回の説教を定期的に行いましたが、あまりに熱狂的になるため、信者達は、「ラティマー牧師の説教の際には、壊れた信者席の修理が必要だ」と語ったといひます。

メアリー女王が即位すると、ラティマーは自分の余命が短いことを悟ったと云われます。1555年10月、ラティマーと司教のニコラス=リッドレイがオックスフォードでその他多くの新教徒の聖職者と同様に、火刑に処せられました。火がつけられる直前、彼は次のように語ったと伝えられています「リッドレイ司教さま、なんと晴れ晴れしい心地でしょう。神の祝福が決して無くなるように、我々も、イギリスの灯火として光り続けることでしょう」。



ウィリアム=ファレル (William Farel) 1489-1565

20歳の時に、ウィリアム=ファレルはパリで学ぶために南フランスの生家をあとにしました。ヤキス=レフェヴル=デテブルの影響を受けてファレルは新教の教えに接し、1523年にフランスを去る決意を固めます。最初にバーゼルへと向かい、そこで、エコランパディスと接しました。その後、バーゼルを追われ、スイス各地で情熱的な説教をしてまわりました。最後に、1533年にはジュネーブに定住するようになりました。

1536年、ストラスブールへ向かう途中のカルヴァンと出会い、カルヴァンのキリスト教綱要を目にしたファレルは、カルヴァンの様な組織力を有する人物が必要であると判断しました。彼は、カルヴァンに対して、この地に留まるよう誓願し、二人で協同で布教活動に取り組みました。しかしながら、1538年には市の幹部の不興を買い、ともに追放処分を受けることになります。二人はストラスブールへと向かい、そこで、ブッセルによって築かれた、教会を中心とした都市の姿を目にします。ファレルは1540年にカルヴァンの婚姻を執り行います。カルヴァンは1541年に再度ジュネーブへと招かれますが、ファレルはノイシャターに戻ります。ファレルはカルヴァンのことを常に友人であると認識していましたが、後、69歳のファレルが若い女性と結婚すると、短期間ですが仲違いをしてしまいました。



イグナチウス=ロヨラ (Ignatius Loyola) 1491-1556

イニゴ=ロペス=ロヨラはスペインのバスク地方で生まれました。1521年にはナバレに侵攻してきたフランス軍と戦い、重傷を負っています。傷を癒す間に、彼は宗教書を読み、人間の心と勘定を分析する神秘的な能力を身につけました。彼は自身の精神的経験をメモにまとめ、後にそれを「霊操」という名で出版しています。

彼は名前を、1528年にパリ大学に入学を許可された際の誤記を起源としてイグナチウスに変更しています。パリ大学では、ベター=ファバーやフランシスコ=ザビエル等、同じ宗教的信条を有する友人と結社を設立しています。この結社が1534年にイエズス会へと発展していきます。彼らは、イエズス会を修道会として認めてもらうためにローマに赴くことにし、1538年にはローマに出向き、その2年後には教皇からイエズス会修道会として正式に認められました。そして、イグナチウスがイエズス会の最初の総長に選出されています。

ロヨラは、イエズス会士に大学設立と教鞭活動の特許状を持たせた上で、ヨーロッパ各地ならびに新世界へと派遣しました。ロヨラ、ファバー、カニシス等イエズス会士が登場することで、ようやく、新教徒に対して反宗教改革の試みを実施する準備が整ったと言えます。



ジョバンニ=ピエトロ=カラファ (Giovanni Pietro Caraffa) 1476-1559

ナポリの名家の出身で、教皇レオ10世のもと、イギリス及びスペインに外交官として派遣されていました。そんな中で、彼は、生地であるナポリを支配していたスペインに対しては嫌悪の情を有していたと云います。1524年には彼自身の教会職を放棄し、北イタリアを中心に禁欲的な活動を行っている男性修道会である清貧修道会の活動に参画していくことになります。この修道会の会員達は、自らを禁欲的な生活に追い込みながら、カトリックの礼拝堂を建設し、伝道活動、病院の運営等を行っていました。

教皇パウロ3世は1536年にカラファを枢機卿に任命、その後直ぐに、ナポリ司教に叙しています。彼のスペイン嫌いは依然として継続しており、ロヨラのイエズス会ならびにカール5世も嫌っていたとされています。1542年、レーゲンスブルグでの協議が失敗に終わると、教皇パウロ3世は教皇異端審問の勅令を発します。カラファは教皇側の尋問主任に命じられています。暴力的な思考の人物や異端信仰に強い信仰心を持つ人物は容赦なく処分されました。カラファはこの機会を利用して、宗教心の薄い人々を恐怖によって支配使用としたのです。新教ならびにユダヤ教の書籍の多くが焚書とされました。カラファは次のように語ったとされています「もし、私の父が異端者であるとなれば、私はさらに多くの薪を、彼を火刑に処すために集めるであろう」。

1555年にはカール5世の意に反して、カラファが教皇パウロ4世に選出されます。カラファが教皇位にあった4年間は、あたかも、教皇庁と、カール5世の息子のフェリペが戦争状態にあるかのようなものでした。1559年、死亡の直前、カラファは禁書目録を作成、公表しています。



ベター=ファバー (Peter Faber) 1506-1546

サボイの羊飼いの息子であるベター=ファバーは聖職者になる勉強をすべく、1525年にパリへと旅立ちました。彼の大学でのルームメイトがフランシスコ=ザビエルで、二人は直ぐに、イグナチウス=ロヨラと知り合い、イエズス会の母体を形成します。

イエズス会結成後、ファバーはドイツに於ける反宗教改革の先鋒となります。マインツ、ケルン、レーゲンスブルグ、ヴォルムス等々で、ロヨラの「霊操」を用いて布教に努め、カトリック教会、中でもカトリック聖職者達の強化を計りました。彼は、新教徒達と直接対峙することはありませんでしたが、以下のように語っています「今、異端者を救うとすれば、彼らを愛を持って見守り、心から彼らを愛し、彼らに対する敬愛を減じる可能性がある考えを捨て去らねばならない。牧師によるいたわり、会話、慈悲心、自らへの自身がその助けとなる。討論は不信感を植え付けるのみで役には立たないのだ」。

何年もかけて、徒歩で、ドイツ、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガルと活動してまわった後、1546年、ローマにて、ロヨラのもとで亡くなりました。


レジナルド=ポール (Reginald Pole) 1500-1558

クレランス公ジョージの孫であるポールはヨーク家のイギリス王位継承者でもあります。オックスフォード大学とイタリアで神学を学びました。ヘンリー 8 世は彼に、ヨーク大司教の地位を提示しましたが固辞しています。その後、パドバとパリで学ぶため、再度大陸へと渡っています。

1536 年に教皇パウロ 3 世はポールを枢機卿に任命しています。ポールはトレント公会議の議長を 2 回務めました。パウロ 3 世逝去の後、教皇位に 1 票差で落選しています。保守的なパウロ 4 世の統治がローマで始めると、ポールは、パウロ 4 世に仕えることをよしとせず、メアリ女王が即位した後イギリスに戻っています。メアリ女王はポールをカンタベリー大司教に任命、1558 年にメアリが逝去した直後までその地位に留まりました。


ジョージ=ウィスハルト (George Wishart) 1513?-1546

スコットランドの東海岸に生まれたジョージ=ウィスハルトは、アバディーンのキングスカレッジとルーバン大学で学びました。後、スコットランドに戻り、ギリシャ語で新約聖書を教えていましたが、1538 年に異端の疑いがかけられ、亡命、最初は大陸へ、続いてイングランドへと逃亡しました。1544 年までに、スコットランドに戻り、弟子のジョン=ノックスとともに活動を行っています。ほぼ 2 年間に渡り、カトリック教会の追跡を逃れてスコットランド中で説教を行いました。1545 年の終盤に彼はカトリック教会に捕縛され、火刑に処せられることになりました。処刑当日、火薬が爆発してもなお、ウィスハルトは死亡せず、長時間に渡って死の苦しみを味わうことになりました。彼の処刑の際に不手際が会ったことがスコットランドの新教徒達を奮い立たせる結果となりました。


ジョン=ノックス (John Knox) 1505?-1572

エジンバラの東方、ロージアンに、1513 年のフロッデンの戦いでイギリスと戦ったスコットランド人の息子として生まれました。1536 年に牧師となり、ジョージ=ウィスハルトに弟子として仕えました。ウィスハルトが捕縛された際に、ノックスは逃亡しましたが、結局、セントアンドリュース城にて捕らえられ、3 年間、フランスのガレー船で漕手として奴隷労働を課せられました。奴隷労働から解放された後、エドワード 6 世統治下のイギリス(新教)に渡り、ビューリックとロンドンで説教を行いました。エドワード 6 世が逝去すると、ノックスは大陸へと逃れ、ジュネーブのカルヴァンの元で学識を深め、そこで得た知識をもとに、1559 年に祖国のスコットランドに戻った後、長老派教会を設立するに至りました。


ペーター=カニシス (Peter Canisius) 1521-1597

カニシウスはナイメーヘンで生まれ、ケルン大学で学びました。そこで彼は師匠と仰ぐファバーと出会っています。1543 年にドイツ人として初めてイエズス会に入信しています。彼はドイツで多くのイエズス会大学を設立し、ドイツ語で教理問答集を作成しています。彼は、ドイツに留まり 59 歳で没するまでカトリック教会の発展に尽力しました。


ステファン=ガーディナー (Stephen Gardiner) 1493?-1555

サフォーク州ベリーセントエドマンズの布商人の息子として生まれたガーディナーは 1521 年に世俗法と教会法で博士号を取得しています。トマス=ウォルゼイ枢機卿の秘書官となり、ヘンリー 8 世の離婚問題の相談のために教皇クレメンス 7 世の元に派遣されました。1531 年にウォルゼイをウィンチェスター司教にすることに成功しました。彼は 1535 年に「真理への服従」(De vera obedientia) という論文を発表しますが、これは、現在に至るまでイギリス国王と国教会首長との関係について最も整理された理論であるとされています。

1539 年以降、彼は新教徒に対して厳しく批判を行うようになります。克蘭マーに対しては異端であるとし、ラティマーに対しては自説の取り下げを強要しています。しかしながら、ヘンリー 8 世が逝去すると立場は逆転し、エドワード 6 世の統治の 5 年間を通じて、ロンドン塔に幽閉されます。しかしながらその立場を変えることなく、ロンドン塔の中から宗教論争を挑み、偽名を使って海外にて出版活動を継続して

いました。

メアリ女王が即位すると、ガーディナーの立身出世は最終段階を迎えます。メアリはガーディナーをイングランド大法官に任命しました。ガーディナーは異端者に対する古ぼけた条文を持ち出してきて、血なまぐさい迫害の幕を開けました。メアリ女王統治の最初の 2 年間(つまり、ガーディナーが死亡する 1555 年まで)を通じて、異端審問の責任者を勤め上げましたが、有名な、ラティマー、リドレイ、克蘭マーの火刑を行う前に亡くなっています。

軍司令官

チャールズ=ブランドン (Charles Brandon) 1484-1544

チャールズ=ブランドンは、ボズワースフルドの戦い当時のヘンリー 7 世の忠臣であったウィリアム=ブランドンの息子です。父のウィリアム=ブランドンはボズワースフルドの戦いで、ヨーク家の王であるリチャード 3 世の手によって殺害されました。チャールズ=ブランドンは、ヘンリー 8 世の宮廷で育ち、王の終生の友人であったと云います。1513 年のヘンリー 8 世によるフランス遠征時には、イギリスの馬事総監を務めていました。また、1523 年、1544 年の 2 回に渡って、フランス遠征軍の指揮をとっています。

ブランドンは、1514 年に初代サフォーク公に叙せられています。その直後、フランスのルイ 12 世が逝去し、その妻で、ヘンリー 8 世の美貌の妹であったメアリ=チューダーが未亡人となります。かつて、ブランドンとメアリ=チューダーは恋仲であり、1515 年に、二人はヘンリー 8 世の反対を押し切って再婚します。ブランドンはヘンリー 8 世の治世を通じて重要な役割を果たします。それは、王妃であったアラゴンのキャサリンに、ヘンリー 8 世がアン=ブーリンと再婚することを伝える役目であったり、アン=ブーリンが王妃に即位する際の付添人であったり、「修道院の解散」によって多大な富をもたらす等であります。


チャールズ=バーボン (Charles Bourbon) 1490-1527

正式な名前は、第 8 代バーボン公バーボンモンパンシェのチャールズ 3 世と云い、フランスのオーヴェルニュ地方の大貴族です。1505 年にバーボン女公爵と結婚し、所領を拡大、リヨン西方のフランス中央部一帯を所有するようになりました。

イタリア戦争に従軍した後、1515 年にはフランスの城代に任命、マリニャーノの戦いの功績からミラノの長官に任じられています。しかしながら、フランス王 1 世との関係は直ぐに悪化してしまいます。国王フランス王 1 世とバーボンとの仲は、バーボンの妻のスザンヌが死亡した折に、彼女の所領をバーボンとフランス王 1 世の母であるサヴォイのルイーズと分割相続する旨の横やりが入ったことで決定的となりました。バーボンは、皇太后と争っても勝ちが無いことを悟り、ハプスブルグ家のカール 5 世の元に転職しようとしています。この試みが発覚し、彼はイタリアへと逃れることとなります。

イタリアではバーボンは神聖ローマ帝国の部隊を付与され、その部隊を率いてフランスへと進撃、短期間ではありますが、マルセイユを攻囲します。この動きは最終的にパヴィア戦役に発展、パヴィアの戦いで勝利を収めた後、バーボンは北イタリアで神聖ローマ帝国軍を指揮し続けますが、2 年を経ないうちに、部隊への支払い資金が払底します。このことが、「ローマの掠奪」を引き起こしてしまいます。バーボン自身は、ローマの城壁を攻撃中に戦死しています。


イブラハム=パシャ (Ibrahim Pasha) 1493-1536

イブラハム=パシャはギリシアの漁師の息子として 1493 年に生まれました。当時、地中海沿岸は非常に危険で、イブラハムも、少年の頃に、トルコの私掠船団に拉致されました。イブラハムは幸運にも、マグネシア地方(エーゲ海東北沿岸、テッサロニキの一部)の未亡人に奴隷として売却されましたが、その地の、地元ギリシア人キリスト教徒コミュニティで教育を受けることができました。彼は、すぐに、トルコ語、ペルシア語、ギリシア語、イタリア語を操ることができるようになりました。

ちょうどその頃、スレイマンがマグネシア地方の王権を握り、統治者となりました。イブラハムを見いだしたスレイマンは、同年代であったこともあり、彼を小姓として採用しま

した。シュレイマンが、1520年にオスマン=トルコ帝国の皇帝位を継承すると、イブラハムは、イスタンブールの宮廷の鷹匠頭に抜擢されています。その後、徐々に出世を果たしますが、その間ずっと、スレイマンの傍にありました。イブラハムには二人の友人がいて、一人はスレイマン大帝その人、もう一人は、スレイマンの以前からの奴隷で、この3人は定期的に会合を開き、帝国運営の諸問題について話し合ったと云います。イブラハムの外交的で陽気な気性は、スレイマンの引っ込みがちな、時として神経質な性分と良く合致した様です。

1524年、エジプトで反乱が起きると、スレイマンはイブラハムを事態収拾のために派遣しました。イブラハムは、反乱を起こしたマムルーク達を登用し、新しい租税制度を導入することで、エジプトの地に、オスマン=トルコ帝国の支配を再確立することに成功、これにより、エジプトでは世紀を超えて平和がもたらされます。イスタンブールに帰還後、イブラハムはスレイマンの妹と結婚し、同時に、オスマン=トルコ帝国軍の総司令官に就任します。彼の出世ははなばなしのものでした。彼は、「スレイマンに対して、『権力におぼれてしまい身を滅ぼしてしまうので、余り重用しないで欲しい』と懇願した」という評判を取るまでになりました。実際、オスマン=トルコ帝国でスレイマンに次ぐ地位に上り詰めていたのです。

1526年には、スレイマンとイブラハムは協同でハンガリーに対する第1回目の侵攻を開始しました。軍勢は、激しい雨と雹混じりの嵐のせいで、夏になるまでドナウ渓谷に進出することができませんでした。ドラヴァ川が進撃の障害となっており、専門家は、架橋作業には3箇月を要するであろうと予測していました。しかしながら、イブラハムの創意工夫により、3日間で架橋に成功したのです。軍勢が渡河した後、シュレイマンは、せっかく架けた橋を破壊し、兵に対して、「迎撃をうける心配は無くなった。兵士達が野戦において決して怯まないことを確信している」と語ったと伝えられています。その後50キロほど北方へ進軍した後、モハーチにて、若きハンガリー王ルードヴィッヒの軍勢と遭遇、完勝を収めています。その後、イブラハムはシュレイマンとともに幾度かハンガリーに侵攻しています。1529年にはイブラハムは単独でウィーン包囲準備の指揮を執りますが、オーストリアの首都は、このときも、また、1532年の攻囲の際にもオスマントルコによる攻囲をはねのけています。

他方、外交面で、イブラハムが関与した西欧のキリスト教国との交渉は成功を収めています。西欧諸国に、オスマン=トルコ帝国の隠された実力をほのめかすことで、西欧諸国から多くの有利な条件を引き出しています。ヴェネツィアの外官達は、スルタンに宛てる敬称と同様に、「莊嚴なるイブラハム」と呼んでいました。1533年には、カール5世に対して、ハンガリーをオスマン=トルコ帝国の属領と認めさせました。1535年にはフランソワ1世の間で、ハプスブルグ家に対して協同して攻撃にあたる代償として、フランスが、オスマン=トルコ帝国に対して最恵国待遇を与えることに同意させました。この同意により、1543年の冬にオスマントルコ帝国の全艦隊が南フランスで越冬することも含め、仏土両艦隊の協同行動まで実現しています。

イブラハムの権力は強化されつづけ、シュレイマンさえも脅かすようになりました。このため、シュレイマン最愛の妻であるロクセラナは、イブラハム排斥を画策するようになります。こうして、本当の理由あるいは計画は闇の中ではありませんが、イブラハムはペルシア遠征中に暗殺されてしまいます。



フェルディナンド (Ferdinand) 1503-1564

フェルディナンドはマドリッドで、カール5世の弟として生まれました。1521年に、ラディスラス王の娘、ボヘミアのアンナとリンツにて結婚しています。カール5世は代々の領土であるオーストリアとスロベニアの統治をフェルディナンドに任せていました。1526年のモハーチの戦いでハンガリーがオスマン=トルコ帝国に降伏した後、同様に推挙されていたヨハン=ザボリヤとの直接対決の後、ハンガリー王に就任しています。

フェルディナンドにとっての真の試練は、1529年のウィーン防衛戦でした。街の防衛には成功しますが、それはフェルディナンドの力によるものではありませんでした。というのも、ウィーンが包囲される以前に、フェルディナンド自身はボヘミアへと逃れていたためです。4年後、彼は、ハンガリーを3分割し、部分割譲するという条約をオスマン=トル

コ帝国との間で交わしています。

後年、フェルディナンドは、反宗教改革運動を強固に支援するようになり、イエズス会をウィーン(1551年)、ブラハ(1555年)に誘致しています。カール5世が退位の後、フェルディナンドは神聖ローマ帝国皇帝に就任しています。



フリッパ=ヘッセ (Phillip of Hesse) 1504-1567

フリッパ=ヘッセ方伯は宗教改革期のドイツにおける在俗司祭で、軍事指導者の一人です。最初の新教の大学であるマゲブルグ大学の創設者であり、マールブルグ討論の主催者、シュマルカルデン同盟設立の祖、そして、シュバイヤー帝国会議ならびに、1530年のアウグスブルグの宗教告白に署名を行ったことでも知られています。

彼の履歴における汚点の一つは妻に対する不貞にあります。1540年、彼は、ブッセルならびにメランクトンに対し、彼の(実際には重婚となる)2番目の妻との婚姻を是認するように求めました。ブッセルとメランクトンは極秘でフリッパ=ヘッセの重婚の立会を行いました。メランクトンは直ぐにその重大さに気づいたと云われています。重婚の事実が公になると、そのことは、新教に対する信頼を大きく損なうスキャンダルへと発展してしまいました。

おそらく、謀略にはまった結果、ムールベルグの戦いの後、フリッパ=ヘッセは、カール5世率いる神聖ローマ帝国軍に投降します。1552年にパッサウの講和が成立するまでの5年間、彼は神聖ローマ帝国軍の捕虜として過ごすことになりました。



ザクセン公ヨハン=フリードリヒ (John Frederick) 1503-1554

ヨハン=フリードリヒは、フリードリヒ賢王の甥で、ザクセン公マウリッツの従兄弟にあたります。1524年から亡くなるまで、ザクセン選帝侯の地位にありました。彼はルターとは個人的に知古があり、文通をする中で、ルターの著作を出版することに協力しています。フリッパ=ヘッセと同様、シュマルカルデン同盟設立に尽力し、アウグスブルグの宗教告白に署名も行っています。ヨハン=フリードリヒの宗教改革に於ける役割は、フリッパ=ヘッセと同様であると認識されることが多いのですが、フリッパ=ヘッセが、ツヴィングリ派に近かったことに比べて、ヨハン=フリードリヒは敬虔なルター派信者であることが相違点となります。

シュマルカルデン戦争が始まると、彼は軍勢を率いて南進し、カール5世の軍勢との対決を試みますが、意に反して、不忠の従兄弟であるマウリッツと対峙することになります。ヨハン=フリードリヒはマウリッツの軍勢を退けることには成功しますが、カール5世の軍勢に派手、捕虜となってしまいます。フリッパ=ヘッセと同様に、5年後にパッサウの講和が成立して保釈されました。



アン=モンモランシー (Anne de Montmorency) 1493-1567

フランソワ1世の幼少期からの友人(王よりも1歳年上)で、この時代のほとんど全ての戦役、外交交渉に、フランソワ1世とともに活動していました。初陣は1515年のマリニエールの戦いで、その折に、パーボン卿の謀反から、プロバンス地方を守り抜いたことで、防御戦闘の天才という名声を得ることになりました。防御戦闘に於ける彼の才能は、1537年にカール5世が南フランスに侵攻してきたときに、プロバンス地方の街々で焦土作戦を遂行、カール5世の部隊の補給を途絶えさせた作戦でさらに有名となっています。1538年にフランスとハプスブルグ家との講和が成立すると、フランソワ1世はモンモランシーをフランス城代(この職位はパーボンの謀反の後空位となっていました)に任命しています。

モンモランシーは平和を主張し、ハプスブルグ家との連携を説きましたが、フランソワ1世の息子と、カール5世の娘との婚約(これにより、フランスはミラノを獲得する予定であった)が破棄されると、モンモランシーは非難を受け、失意のうちに蟄居します。その後、1547年にアンリ2世が即位するまで、公職に復帰することはありませんでした。

アンリ2世の元で、塩税暴動の鎮圧や、メッツの占領(1552年)等に活躍しますが、1557年、包囲されたサン=クエンティンへの救援活動中に捕虜となってしまいます。その後、講和によって釈放され、1562年のユグノー戦争でも部隊指揮をとっています。1567年のサン=ドニの戦いで戦死しました。

**ジョン=ダドリー (John Dudley) 1501-1553**

ヘンリー 7 世の財務大臣の息子であるダドリーは、1523 年のフランス侵攻作戦に従軍しています。その際の戦功により、チャールズ=ブランドンによってナイト爵位が授けられています。1542 年までに、海軍卿に就任、ブルゴーニュ地方への侵攻作戦を成功裏に指揮し、エジンバラ掠奪の準備を行ったり、ソレントの海戦にてフランス艦隊を撃退することに成功する等の功績を挙げています。

彼は、エドワード 6 世治世に、16 人の摂政の一人となりましたが、実権を握っているのはサマセット公爵でした。しかしながら、サマセット公爵には人望がなく、他の摂政達が、ダドリーをたきつけて、サマセット公爵を排除させようとなりました。ダドリーは 1549 年にサマセット公爵を排斥して実権を握り、ノーザンバーランド公を名乗るようになります。その後、エドワード 6 世が逝去するまで、イギリスの統治に功績をあげました。彼は、エドワード 6 世の後継者としてジェーン=グレイを担ぎ上げましたが、その試みが仇となって死刑に処せられています。

**ザクセン公マウリッツ (Maurice of Saxony) 1521-1553**

ザクセン公ハインリッヒの長兄マウリッツは 19 歳でフィリップ=ヘッセ方伯の娘アグネスと結婚しました。同年に父が亡くなったためザクセン公国を継承しています。当初はシュマルカルデン同盟に属していましたが、カール 5 世と同盟することが政治的に好ましいと判断しました。1546 年に、カール 5 世との間で、公国領以外のザクセンの領有を認めさせる旨の密約を交わしています。その後、彼は、ヨハン=フリードリヒに対して宣戦布告しています。翌年、カール 5 世に率いられた神聖ローマ帝国軍が到着、ムールベルグの戦いでヨハン=フリードリヒを打ち破っています。ヴィッテンベルグで交わされた降伏文書によって、ヨハン=フリードリヒは、ザクセン選帝候領をマウリッツに譲渡しています。

しかしながら、マウリッツは神聖ローマ帝国陣営に長く留まることはしませんでした。義父のフィリップ=ヘッセ方伯が長期にわたって捕虜となっていることにいらだったマウリッツは、新教徒勢力ならびにフランスのアンリ 2 世と密かに交渉を行いました。その結果、1552 年 3 月に、アウグスブルグにてカール 5 世の部隊に対して奇襲を実施、カール 5 世をインスブルグまで敗走させます。マウリッツは義父の安全を確保しかつ、皇帝カール 5 世に対して、パッサウの講和条約を締結することを認めさせました。その後、1553 年、ドイツの他の政敵との戦闘中に死亡しています。

**アルバ公 (Duke of Alba) 1508-1583**

第 3 代アルバ公であるフェルナンド=アレバレッツ=ド=トレドは、カスティリヤの武将で、その軍歴は 1525 年のパビアの戦いから始まっています。その後 30 年にわたりカール 5 世の元に仕え、シュマルカルデン戦争では輝かしい功績を挙げました。1547 年のムールベルグの戦いでカール 5 世が勝利を収めることに多大な貢献を果たしましたし、同年のヴィッテンベルグの陥落にも活躍しています。しかしながら、1552 年のメッツ攻略には失敗しています。

カール 5 世の引退後は、フェリペ 2 世に仕え、その軍隊を率いて、ローマへと進撃、教皇パウロ 4 世の部隊(カラファ)と戦闘しました。彼は、フェリペ 2 世の治世にオランダの新教徒を徹底弾圧したため、「鉄の公爵」として知られるようになりました。

海軍提督

**アンドレア=ドレア (Andrea Doria) 1508-1583**

アンドレア=ドレアは、当初、教皇護衛隊に入隊しました。すぐに、生地であるジェノバに戻り、その地で、ジェノバ艦隊の司令官となっています。その後は、ジェノバ艦隊司令として、契約金額の多寡、あるいは、ジェノバの独立を保証することを基準として、ハプスブルグ家、あるいはフランスの側に立って活躍しました。1524 年には、フランスが、チャールズ=パーボンによって攻囲されたマルセイユを救出する作戦に協力を行っています。しかしながら、4 年後には、フランソワ 1 世の支払い遅延を理由として、フランスによるナポリの海上封鎖への

協力を途中で中断しています。

カール 5 世の側に立っては、ギリシアのコロン近傍の海岸への強襲上陸に協力したり、チュニス攻略作戦の支援、アルジェリアにて窮地に陥ったカール 5 世の救援活動等に従事しました。彼は 84 歳でこの世を去るまで、ジェノバの独立と、大敵であるバーバリー海岸の海賊に対して絶え間なく戦いを繰り広げました。

**バルバロッサ (Barbarossa) 1475?-1546**

バルバロッサは、本名を、カヤル=アッディンといい、ロードス島生まれの 4 人兄弟の一人です。彼の父はおそらくイェニチェリカシファヒ(奴隷騎兵)で、母は、キリスト教徒の未亡人であったと云われています。四人兄弟はいずれも、エーゲ海で聖ヨハネ騎士団に対する海賊になっています。

兄のアルジュが西地中海の最初はジャルバ(トリポリ付近)に、後にアルジェリアに海賊の根拠地を建設しています。アルジュが 1518 年に殺された後、カヤルがそのアルジェリアの根拠地を継承、兄のあだ名であったバルバロッサ(赤ひげ)を名乗るようになりました。1531 年、バルバロッサはチュニスを占領、その 2 年後にはシュレイマンが彼をオスマン=トルコ帝国の海軍提督に任命しています。

バルバロッサは、亡くなるまでの 15 年間、地中海沿岸で非常におそれられ、カール 5 世陣営にとって仇敵でありました。その戦績は、ハプスブルグ家によるアルジェリア侵攻を 2 度に渡って撃退、1538 年のブレベサの海戦では、アンドレア=ドレア率いる大規模な、ハプスブルグ=ベネツィア連合艦隊を撃破、西地中海沿岸に対する絶え間ない海賊行為、ジュリア=ゴンツァガを拉致し、スルタンのハーレムへと送り込む誘拐作戦でイタリアおびえさせたこと等があげられます。

**ドラグート (Dragut) 1514-1565**

アナトリアに生まれたドラグート=レイスは 1538 年に、砲手として初めて海に出ています。その後、バルバロッサの配下となり、ジャルバ(ゲームではトリポリのベース)を根拠地とする戦隊の司令官となっています。1540 年にはアンドレア=ドレアの艦隊の追跡をうけ、最終的には捕虜となっています。その後、バルバロッサによって保釈金が支払われるまで、アンドレア=ドレアの船団の奴隷漕手として働かされています。

バルバロッサの死後、自然とその後継者となりました。その後、シシリーならびにイタリア沿岸に対し容赦なく海賊行為を働き、「抜き身刀のイスラム」と呼ばれておそれられました。フランス海軍の提督は彼を評して、「地中海の生きた海図、彼が通過したことのない海峡部は存在しない。最悪と思われる状況から、予想もしえないような方策で抜け出す能力を有している」と語っています。

ドラグートの最後の作戦は、マルタ島の海上封鎖作戦で、この折に、聖ヨハネ騎士団が放った砲弾を受けて、致命傷を負っています。

探検家

**フェルディナンド=マゼラン (Ferdinand Magellan) 1480-1521**

フェルディナンド=マゼランは、1480 年、北ポルトガルで生まれ、若い頃にポルトガルのインド探検隊に参加しています。その後、ポルトガルのマヌエル王との関係が悪化したため、他の国家への再就職を要望、受け入れられています。最初にスペインに対して自らを売り込んだのは正解でした。というのも、当時、スペインは、ポルトガルが独占していた香料貿易に食い込もうと画策していたからです。事態は、マゼランがセビルに到着して直ぐに動き出しました。セビルに移住して 1 年以内に、彼は結婚し、子供を授かり、同時に、カール 5 世からの契約も勝ち取ることができたのです。カール 5 世からの契約によれば、5 隻の船にてモルッカ船団を編成することが約定されていました。船団の名称は、インドネシアの香料諸島の現地名から取られています。こうして、1519 年 8 月 10 日に小さな船団が、セビルから出航しました。

マゼランの最初の障害は、船団の組織内部にありました。多くのカスティリヤ人船員にとって、見知らぬポルトガル人仕官に命令を下されることが潜在的な不満であったのです。アフリカ沿岸を離れ、大西洋横断に移る前に船団の中の 1 隻

の船長で探検航海の監察官をかねていた人物が反乱を起こしました。マゼランは即座に反逆者を投獄しましたが、不満の種は残ったままでした。当初の予定であった 3 月（南半球での冬の到来）までに、太平洋への航路を見いだすことに失敗したのち、マゼランは越冬を行うこと、そのために食料割り当てを半分に切りつめることを決めました。腹を空かし、また、太平洋への航路の存在など信じられていなかったため、5 隻中、3 隻が、スペインへ引き返すことを要求し謀反を起こしました。マゼランは反乱に対し強硬策をとり、ポートで、自分に従う部下に、反乱を起こした船を一隻づつ強襲させていきました。こうして、マゼランは船団全体の統率を取り戻し、反乱首謀者を死刑あるいは孤島へ置き去りにする措置をとりました。

冬の嵐が残る中、海峡探索は継続して行われました。1520 年 5 月には、嵐のために 1 隻の船を失っています。10 月になって、マゼランが、探索を打ち切ろうとしたまさにその時に、目的の海峡の発見に成功しました。この海峡は彼の名をとって、マゼラン海峡と命名されています。500 キロに及ぶ海峡を通過するのに 5 週間を費やしました。海峡の西岸には島嶼群が存在し、航海は困難を極めた上、見通しが悪い地形を利用して、マゼランに不満をいだいていたカスティリヤ人船長 1 名が、船団中最大の船で、スペインへと引き返してしまいました。しかしながら、困難の末、マゼランは大西洋への西回り航路を発見し、難所続きの海峡を難破することなく通過することに成功しました。これは、掛け値無しに、海運史上で最も偉大な功績の一つと云うことができます。

マゼランは太平洋へ抜けた後、残された 3 隻の船で、モルッカ諸島へ東回りよりも短期に到達可能であることを期待して航海を続けました。しかしながら、現実には、船員達に、無寄港航海期間の記録を打ち立てる結果を強いることになってしまいました。98 日間、風に任せて西へと航路を取りましたが、その間に、1 万 1 千キロ以上を、人が住むことが可能で、寄港することができる陸地を見つけることもできずに航海したのです。その間、数十名の船員が、当時は、悪い空気が原因で発症すると考えられていた壊血病で死亡しました。マゼラン及びその部下の士官達は、私物で持ち込んでいるマルメロ麻薬が、壊血病予防に有効であるということをはほとんど知らなかったのです。

マゼラン隊は、ガムで補給を行い、その後、フィリピンに比較的長期間滞留しました。フィリピンのセブ島で、マゼランは原住民をキリスト教に改宗させることに注力しました。3 週間の滞留中に、現地の部族酋長 2 名の面倒をみて、現地住民 2 千人以上に洗礼を施しました。しかしながら、マゼランの布教活動が成功するかどうかは、彼に対する信頼の有無にかかっていました。マゼランは新たにキリスト教徒となった友好部族に対して、周辺の対立する部族を掃討できると確約し、60 名の部下を率いて 1500 人規模の部族の掃討作戦に出ました。しかしながら、海岸付近でマゼラン達は待ち伏せ攻撃をうけ、マゼラン自身は毒矢をうけました。マゼランは、部下が安全に伝馬船に撤退するまで戦闘を続けましたが、最終的には敵部族にその体を切り刻まれてしまいました。

マゼランの死後、残された隊員達はモルッカ諸島への航路を見つけるために航海を再開する準備に取りかかりました。しかしながら、フィリピンを去るまでにさらなる不幸が彼らを襲いました。キリスト教に改宗したはずの現地住民達は、既に、改宗そのものに不満を有していましたが、マゼラン隊に対して、お別れの祭典を行うと約束し、士官達を海岸に招きました。そして、その祭典の場で、30 名が殺害されてしまったのです。セビルを出帆した際には 260 名を数えた隊員は、115 名までその数を減じていました。人員不足から、残る 3 隻中、1 隻を放棄しなければならないほどでした。

マゼランの死から 6 箇月の後、2 隻の船団はついにモルッカ諸島に到達します。そこで、船に残されたありとあらゆる装飾品を現地にてチョウジと交換しました。しかし、まさに出航しようとした際に、旗艦トリニダード号が浸水してしまったのです。トリニダード号の修理には数ヶ月が必要と見積もられました。これをうけて、隊員達は、隊を分割し、トリニダード号は修理の後東回りにこれまで辿った航路を戻り、他方の 1 隻は、バスクリン水先案内人であるジュアン=セバスチアン=エルカノの指揮のもと、地球周回航海完遂を目指して西へと航海を続けることにしました。

トリニダード号は北東へと進路をとり、北太平洋のしけの多い海域へ進入していききました。悪天候にもまれ、食糧不足と、アメリカ大陸からはほど遠い海域をさまよった後、5 箇月後にボロボロになってモルッカ諸島へと戻ってききましたが、

その際に、マゼラン隊を探索していたポルトガルの艦隊に拿捕されています。

結果として、エルカノが指揮する 1 隻（ビクトリア号）のみが、航海を成功裏に終わらせ、カール 5 世にチョウジ 381 包みの荷を持ち帰ることに成功しています。ビクトリア号は、喜望峰を回るとスペイン目指して北上しました。ポルトガルの船団に拿捕されることをおそれたエルカノは、補給あるいは修理のために長期間の寄港を避けたため、壊血病による死者が続出しました。モルッカ諸島を出た際には 60 名であった隊員は、地球周回航海を完遂し、スペインに到着した時には 18 名にまでその数を減らしていました。



ボンセ=デ=レオン (Juan Ponce de Leon) 1460?-1521

ジュアン=ボンセ=デ=レオンは、バリャドリッドの北方に当たる、スペインのパレンシア地方でうまれました。フェルディナンドとイザベラによるムーア人に対する国土回復運動の最終フェーズに参画した後、コロンプスによる 2 回目のカリブ海への航海にも参加しています。1508 年に、イスパニョーラ島（西インド諸島の島）にて、現地住民の反乱を撃退したことで名声を高めました。翌年にはプエルトリコの征服に成功、島全域をほぼ制圧し、1509 年には初代総督となっています。おそらく、プエルトリコの現地住民から、近くにあるピミニという島に「不老の泉」があり、その水を飲んだ者はいづれも、若さと活力を取り戻すという伝説を耳にしたものと思われる。

1512 年に、ボンセ=デ=レオンは、ピミニ島発見と入植に係る特許状を取得しました。翌春には船団を編成し、バハマ諸島のいくつかの島を経て、フロリダに到達、スペイン領への編入を宣言しています。フロリダの現地住民の頑強な抵抗を受けたため、かれはスペインに引き戻し、植民地化のための船団編成を申請しています。その後、ようやく 1521 年に船団を編成、航海を開始します。このときは、フロリダの西海岸に上陸、現地住民の激しい抵抗に遭遇します。その戦闘で、重傷をおったレオンは、キューバへと引き返し、その地で客死します。ボンセ=デ=レオンは、若さを取り戻す泉を発見することなく、プエルトリコのサンファンに埋葬されました。



パンフィロ=ド=ナルバエス (Panfilo de Narvaez)

1470-1528

パンフィロ=ド=ナルバエスは、バリャドリッド生まれ、1498 年にイスパニョーラ島に移住しています。ディエゴ=ベラスケスがキューバ征服を実施している際に、ベラスケスの主席副官として活躍しました。6 年後、コルテスが担当戦域を越境し、アステカ文明撲滅のためにメキシコへ偵察隊を差し向けると、ベラスケスは、コルテスの暴走を止めるために、ナルバエスを派遣しました。その際、コルテスとの間で戦闘が発生し、ナルバエスは片眼を失った上、捕虜となってしまいます。また、ナルバエスの部隊はコルテスの部隊の補充要因にされてしまいました。1 年後、ナルバエスはコルテスから解放され、スペインに帰還しています。

1526 年、カール 5 世はナルバエスに対して、リオグランデ川とフロリダにはさまれた地域について、征服ならびに統治を行う特許状を与えます。ナルバエスは、スペイン人貴族のアルザール=ヌエンツ=カベザ=デ=バッカを協力者として、翌年、新大陸に戻ります。激しいハリケーンに遭遇したため、ナルバエス隊が上陸したのは、タンパベイ付近でした。現地住民は、スペイン人達に、内陸部には膨大な富が埋まっている旨を告げました。ナルバエスは、財宝発見を夢見て内陸部へと進みますが、その際に、パートナーのデ=バッカの反対を無視して船団を放置してしまいます。財宝は見つからず、ナルバエス一行はガルフ海岸（フロリダ北西部）に戻らざるを得なくなります。さらに、ナルバエス一行の振るまいが粗暴であったため、現地住民達の間に不満が高まります。現地住民との紛争で部隊の勢力をすり減らしたナルバエスは、フロリダでの征服活動をあきらめ、数日以内にメキシコへと到達することを希望して、木製の小舟を作成、西方へと出航します。この小舟での航海は実際には 30 日間も海上にあり、実のところ、テキサスへ向けて航海を行っていましたが、嵐で転覆、ナルバエスは溺死しました。

ジョン=ラット (John Rut)

ヘンリー 8 世の治世には、イギリスからは若干名の探検家が新世界を目指したのみですが、その中で概ね成功を収めた

一人がジョン=ラットです。1527年にプリマスから出航し、北西へと進んで、ラブラドル沿岸地方へ到達、流水で1隻を失いますが、ニューファウンドランドの聖ジョン漁業植民地に立ち寄り、その地で、フランスとポルトガルの漁船が操業していることを確認しています。航路を南に向けて北米大陸沿岸の探索を継続するに先立って、ジョン=ラットはイギリス向けの手紙を聖ジョンで操業していた漁船に託しています。これが、新世界から旧世界へ向けて発信された初めての手紙となります。その後、ラットはカリブ海まで航海を続け、西インド諸島にてスペイン艦隊と遭遇しています。その後、イギリスに生還したと伝えられていますが、帰国後の彼の足跡は記録に残っていません。



ジョバンニ=ベラツァーノ (Giovanni da Verrazano) 1485?-1528

ジョバンニ=ベラツァーノはトスカナ地方、フィレンツェ郊外に生まれました。生誕の年は1470年～1485年まで諸説あります。成人して、フランス宮廷に仕え、大西洋岸のディエップから航海に出ています。

ベラツァーノはおそらく、新世界で初めての海賊で、その経歴のごく初期(1522年)に、アステカ帝国の財宝を積んでスペインへの帰路にあったコルテスの船団のなかの1隻を拿捕しています。1524年にはベラツァーノは再び新世界へと航海を実施、この時の航海には、弟のジロラモが同行し、航海の過程を地図に記録しています。ベラツァーノはノースカロライナのケープフィア付近に上陸し、北方へと探検を行い、現在のメイン州へ到達しています。彼は、ニューヨーク湾からハドソン川地峡部の探検を行った最初のヨーロッパ人となりました。

その後の彼の業績はよく知られていません。その後2回の航海を実施、1回はブラジルまで、他方はカリブ海にまで到達しています。その後については諸説あり、1527年に捕縛され、カール5世の命でカディスにて処刑されたとする文献や、小アンティル諸島で現地住民に殺されたとする説などがあります。



セバスチアン=カボット (Sebastian Cabot) 1476?-1557

若い頃のセバスチアン=カボットについてはよく分かっていません。これは、彼自身が様々な事由から自分自身の過去を隠そうとしていたことが理由です。イギリス人に対しては、プリストル生まれで4歳の時にベネツィアに移住したと語っていましたし、ヴェネツィア人のガスパロ=コンタリニに対しては、ヴェネツィア生まれでイギリスで教育を受けたと語っていました。歴史家のJ.A.ウィリアムソン氏はカボットについて「虚栄心が強いエゴイストで、自己擁護ばかりで事実無根の言説をする人物」と評しています。

探検家としてのカボットの経歴は、彼の父で、1497年と1498年にニューファウンドランドに到達した、英国人としては初めて新世界に足を踏み入れた人物であるジョン=カボットとともに航海を行ったことから始まります。ジョン=カボットにとって不幸なことに、これら2回の航海の詳細な記録がなされていなかったため、セバスチアン=カボットが、これらの航海の成果を自分のものであると吹聴してしまっただけです。実際、ジョン=カボットの存在は、19世紀に歴史家によって詳細調査されるまで、歴史に埋もれたままとなっていました。1508年までに、セバスチアン=カボットはヘンリー7世に地図制作者として召し上げられました。彼は、1508年のラブラドル地方への航海を指揮し、西方への海路(おそらくハドソン川地峡部)を発見したと評されましたが、後に、分厚い氷と水兵の反乱のために本国に引き返したただけであることがばれてしまいました。

その後、カール5世の父であるフェルディナンド王より、スペイン側に与える様要請を受け、1521年にセビルへと移住しています。その後35年間に渡りスペイン王室に仕えることになりました。その間、彼が指揮したことが確実な航海といえば、1526年にカール5世によって編成された船団で、モルッカ諸島へと向かったものがありましたが、カボット自身は、リオ=デ=ラプラタまでしか同行していません。というのも、彼は、現地にて黄金郷の噂を聞きつけ、中国への航海を切り上げ、黄金郷探索を行おうとしましたが、士官達の反対に遭い、士官達は、トラブルの現況であるカボットを現地に置き去りにするという処置をとったためです。カボットはリオ=デ=ラプラタで、小屋をたて、川を遡上して黄金の探検を続け、結果として部下と資金を浪費するという無益な3年

間を過ごしました。最終的に、1529年に、カボットと哀れな部下達は、現地の居留地を撤退しスペインへと戻っています。スペインへ戻った後、カボットは、家臣と債権者達から訴えられ、オーランへと流刑にされた上、多額の賠償金支払いを命じられています。

驚くべきことに、この探検行の後カボットの名声はひどく傷つけられることはありませんでした。エドワード6世がイギリス王位を継承すると、エドワード6世はカボットをカール5世から譲り受け、新たに設立した冒険商人会社をカボットに託しました。カボットはそこで、ウィラビーならびにチャンセラーの探検航海の準備作業をこなします。その後、1557年にカボットは亡くなっています。



ヤクス=カルティエ (Jacques Cartier) 1491-1557

ヤクス=カルティエは1491年にフランスのサンマロで生まれました。最初の航海をヴェラツァーノの元で1524年に果たしていることが知られています。10年後、カルティエはようやく2隻からなる自分の船団を編成します。カルティエ船団は3週間かけて大西洋を横断、ニューファウンドランドの西部、特に、ガスパー半島周辺を探検します。カルティエは現地でヒュー族の酋長であるドナコナと出会い、ドナコナの2名の息子をカルティエの航海に同行させるほどの信頼を勝ち得ます。カルティエは西方への航路となる可能性を秘めた海峡を発見しますが、冬の訪れが間近であったため、その海峡の探索をあきらめ、フランスへと引き返しました。

1535年になって、カルティエはドナコナの息子を通訳に従え、3隻の船団を編成して前年に発見した海峡(実際にはセントローレンス川の河口だったのですが)の探索に取りかかりました。彼の船隊は西へと航海を続け、ヒュー族の生地であるボツェラガに到達、そこで、現地住民数千人の歓待を受けます。現地住民達は近くの高地にカルティエを案内し、西方を指して、金銀財宝にあふれているサゲニー王国があるという言い伝えがある旨を告げました。カルティエはその高地の頂上に十字架を立て、その地をマウントリアルと命名しました。カルティエは今日のケベック近傍の停泊地に冬の間留まることにしました。冬には極寒の地であることを知らず、豪雪と壊血病に悩まされましたが、現地住民の助けもあって越冬に成功し、翌春には、現地住民の大規模代表団(ドナコナ自身もメンバーでした)とともにフランスへ帰還しています。

カルティエは、彼がヒュー族の言葉で村を表す語から、カナタと命名した土地に植民地を建設する事業の援助をフランス王1世に請願しました。フランスはこの事業への支援を行いました。カルティエは、現地の長官としてフランス人貴族が必要であったことから、友人のジャン=フランソワ=ロベールをその地位にあてることにしました。

カルティエは1541年5月に、2年間分に相当する物資を積載してセントローレンス川へ向けて出航しました。そして、当初予定していた場所より幾分か上流に根拠地を建設、カールスバーク=ロイヤルと命名しました。当初、植民地は大変うまくいっていましたが、野菜は順調に成長し、近傍では砂金とダイヤモンドが発見されたりしました。これを見て、カルティエはサゲニー王国探索に取りかかろうとします。かれは植民地を後にして西方への探検に取りかかりました。しかしながら、オタワ川は航行に適さないものであることが分かったに過ぎませんでした。カルティエがカールスバーク=ロイヤルに戻ると、現地住民との関係が悪化しており、植民地は日常的に現地住民からの攻撃に晒されていました。

冬になって、その気候条件の厳しさに再度晒されましたが、カルティエの植民地は、春に補給物資とともに到着する予定のロベール隊を待ちつつ越冬しました。カルティエ隊は1542年5月まで現地にロベール隊を待ちましたが、ついに、植民地を放棄し帰国することになりました。カルティエ隊にとって幸運だったのは、6月8日にニューファウンドランド沿岸でロベール隊と会合することができました。しかしながら、カルティエはこの地点から植民地へと戻ることを拒絶します。その後、カルティエが新世界に戻ってくることはありませんでした。彼が見つけた砂金とダイヤモンドも、実は、黄鉄鉱と水晶に過ぎないことが判明しました。カルティエは1557年にフランスで、セントローレンス川は中国への航路であると信じたまま死亡しています。



アルザール=ニューエンツ=カベザ=デバッカ (Alzar Nunez Cabeza De Vaca) 1490?-1559?

アルザール=ニューエンツ=カベザ=デバッカはスペインのアンダルシア地方の出身です。彼の珍しい苗字（牛の頭という意味）の由来は、彼の先祖が、ムーア人との戦争であげた功績に由来しています。彼の先祖は、重要な峠道を部隊に指し示すために、牛の頭蓋骨を使用したとされているのです。デバッカはナルバエスのフロリダへの探検隊の出納官を務めており、メキシコ湾からテキサスまでの1箇月に及ぶ小舟での航海を何とか生きながらえた幸運な一人でした。

食料の補充もままならないなか厳しい冬を経て、ナルバエスの探検隊はわずか15名が残るのみとなっていました。デバッカと他の生存者達はアメリカ南西部を縦断する放浪の旅に出る以前の数年間をテキサスの海岸地帯で過ごしました。彼らはその地で出会った原住民達に治療を施すことで、医療専門家として名声を集める様になりました。その後、放浪の旅に出てから9年を経て、ようやく1536年にメキシコシティに到達しています。デバッカの旅行記録は1542年に出版されましたが、この書物は、今日でも、現地住民の文化とヨーロッパ人との接触に対する反応について記述された貴重な歴史史料として通用しています。

デバッカは最終的にアルゼンチン総督（1541年から1543年）に就任します。しかしながら、部下が彼の支配に対して反乱を起こし、スペインへ帰還することを余儀なくされます。スペインに帰国後、彼は、王権を篡奪した旨で裁判にかけられます。裁判で彼は有罪とされ、8年間収監されました。その後、デバッカが新世界に戻ることはありませんでした。



ジャン=フランシス=ロベールバル (Jean Francois de Roberval) 1500?-1566

ロベールバルは1500年前後に、彼の父が統治していたカルカソンヌで生まれました。彼は貴族としてフランソワ1世の宮廷で育ちました。1535年にロベールバルが新教徒であることが発覚するとフランソワ1世の庇護は失われ、詩人のクレメント=マロ等とともに、宮廷から放逐されます。この時期の彼の財政状況は劣悪で、彼は、新世界で一旗掲げることを決意します。しかしながら、新世界での活動のための資金を集めることは困難で、ロベールバルはイギリス船に対する海賊行為に手を染めることになりました。

その後、ロベールバルは植民地建設と現地住民のカトリックへの教化（彼自身は新教徒でしたが）を果たすために出航します。3隻の船と200名の隊員（中には、重労働刑が科せられた囚人の一団も含まれていました）からなる船団を編成しましたが、かれは、先導役となるカルティエが出航して1年後となる1542年まで実際には出航しませんでした。1542年6月8日に、ニューファウンドランド沿岸でフランスへの帰路についたカルティエの船団と会合し、カルティエに、植民地へ戻ることを命令しますが。しかしながら、カルティエは夜陰に紛れて逃亡します。このため、ロベールバルはセントローレンス地域に詳しい先遣隊無しで堪え忍ぶ必要がありました。

ロベールバル隊もカールスバーグ=ロイヤルに停泊し、植民地の名前を「フランス=ロイ」と名付けました。ロベールバル隊はその地に駐屯地を2箇所建設しましたが、冬の厳しい気候のために隊員の半数を失っています。1543年には、ロベールバルは70名を率いて西方に、サゲニー王国探索に出ますが、オタワ川より西方に進出することはありませんでした。秋になって、フランソワ1世は、ロベールバルをフランスに呼び戻すために船団を派遣しました。後になって、当地で産出される地下鉱物が黄鉄鉱であることが判明すると、フランソワ1世はこの地域に対する植民事業全体を中止しています。

新世界での財宝獲得に失敗したため、ロベールバルの財務状況は好転しませんでした。1555年にカルティエから支払われた賠償金を使い果たすと、彼の居城は競売にかけられています。彼の運勢は依然として改善の兆しを見せず、1560年にはバリエでカルヴァン派の集会に参加しています。その集會が行われた建物を出たところで、彼を含む一団は襲撃を受け、ロベールバルは殺害されてしまいます。かれは、フランスの宗教戦争における最初の犠牲者の一人となったのです。



ヘルナンド=デソト (Hernando De Soto) 1499-1542

ヘルナンド=デソトは、15世紀終盤に、ポルトガルとの国境に近いスペイン西部で生まれました。ペドロリアス=ダヴィラの配下として新世界を訪れ、ダヴィラがニカラグアにてコルドバと対立した際にダヴィラを支援しました。

1532年にはデソトはインカ帝国を目指すピサロ隊に加わり、ピサロの副司令官として活躍しています。彼は先遣隊の指揮を任せられ、首都クスコへと続くインカの主要道路を発見しています。彼はインカ皇帝アタウルパと最初に会話した西洋人としても知られており、アタウルパが収監されている8箇月の間にアタウルパとの間に友情をはぐくんでいます。ピサロがアタウルパを処刑すると、デソトはピサロと決別し、彼が個人的に得たインカ帝国の財宝（10万黄金ペソ相当）をもってスペインに戻りました。

デソトはセビルに定住し、放蕩三昧の暮らしをします。彼が持ち帰った財宝は、カール5世に資金の融通をする余裕であったのです。しかしながら、彼は隠居生活をするほど心の余裕がありませんでした。デバッカが書き記したシボラの7都市の記録を読んで、コルテスやピサロの様に偉業を遂げたいという欲望に再び火がついたのです。彼は、1000名の隊員、24名の司教、200頭の馬からなる探検隊を編成し、9隻の船で新世界へと出航、1539年5月にフロリダ西海岸に上陸しました。

デソト隊が今日の合衆国東半分を踏破するのに3年の年月を要しました。デソトはコロナドによるメキシコ探索が同年になされていることから、どちらが先にシボラを発見するかを賭して、探索を急ぎました。デソトの部隊は、10年前にナルバエス隊が行った蛮行を記憶している現地住民から、頻繁に攻撃を受けました。デソト隊が進った正確な旅程は特定されていませんが、現在の合衆国の14の州を通過しているものと思われます。デソトは、ミシシッピ川を最初に発見した西欧人として知られていますが、1541年にはミシシッピ川を渡河して現在のアーカンザス州にも進入しています。その後、6月に彼はミシシッピ川流域に引き戻されていますが、その地で熱病に冒され死亡しました。彼の遺体はミシシッピ川に留め置かれ、残された隊員たちは、ミシシッピ川を下り、その後メキシコへと航海しています。



フランシスコ=デ=オレラナ (Francisco de Orellana) 1500?-1546

1541年に、インカ帝国の征服者でペルー総督のピサロはアンデス山脈東部の熱帯雨林帯に対して、シナモンの木と黄金を探索するための探検隊を編成しました。ピサロは義弟のゴンザロをその探検隊の隊長に任命しました。フランシスコ=デ=オレラナは、探検隊の副官に任命されています。探検隊を載せた舟はナボ川（アマゾン川源流）で座礁、部隊は飢えに苦しみます。オレラナは食料を得るためにナボ川を下る様、分遣されますが、川の流が速く、本隊との合流は不可能となってしまいます。これをうけて、オレラナは手に入る材料でよりよいボートを造り、川を下る決心をします。はたして、河口まではいかにどの距離があるのでしょうか？

1箇月に渡りオレラナ分遣隊は河岸からの絶え間ない攻撃と戦いながら川を下りました。6月24日には、最も有名な敵である、残忍な白人女性戦士（アマゾンとして以後有名になります）に率いられた原住民の一団とも遭遇しています。8月に入り、オレラナ隊の仮設ボートは大河（アマゾン川）の河口に到達します。その後、毛布を帆代わりに用いて南アメリカ大陸沿岸を航海し、9月には遂に、今日のベネズエラにあるスペイン支配下の港湾に到達しました。オレラナとその部下達は、英雄として歓迎され、ポルトガルならびにスペインの宮廷双方から、アマゾン川流域探検の特許状のオファーをうけます。オレラナは、カール5世の特許状を受け入れ、1545年には再びアマゾン川河口へと戻ってゆきました。しかしながら、2度目の航海は、原住民の攻撃、食糧不足、船舶の損傷等に見舞われました。オレラナは病死し、300名の隊員のうち、生存してパナマに帰還できたのは44名に過ぎませんでした。



ヒュー=ウィラビー (Hugh Willoughby) ~ 1554

ヒュー=ウィラビーが生まれた日については知られていません。彼の父、ヘンリー=ウィラビーはバラ戦争当時、ランカシャー家側にたって戦った騎士でした。ヒューも1544年のリースの戦いでスコットランド

人相手に武勲をたて、ナイト爵位を授けられています。1548年から1549年にかけて、スコットランドとの国境で警備隊隊長を務めています。彼が、どのような理由で、新たに設立された冒険商人会社に参画し、海へ出るようになったかはよく分かっていません。

ウィラビーは参画した冒険商人会社の最初の航海でその隊長に任命されています。これは、彼の軍事指揮官としての経験が評価されたものと推察されます。ウィラビー隊は1553年5月にロンドンを3隻の船で出航しました。彼らの目標は、スカンジナビア半島を東へと航海し、北東まわりの中国への航路を発見することに置かれました。

3箇月の航海の後、船団は激しい嵐に見舞われ、リチャード=チャンセラー船長の船が他の2隻からはぐれてしまいます。チャンセラーは、船をノルウェイ東端の集結地点へと進ませますが、ウィラビー本隊の2隻の船は現在位置の把握に失敗し、遙か東方、おそらく、ノバヤ=ゼムリヤ諸島にまで到達してしまいます。ウィラビー本隊は、年内にノルウェーに戻ろうとしますが、船が流氷に囲まれてしまい身動きが取れなくなります。そして、翌年春に、ロシアの漁師達によって、凍死した姿で発見されました。

リチャード=チャンセラー (Richard Chancellor) ~ 1557

ウィラビー隊の船長の一人として航海に参加する以前のリチャード=チャンセラーの経歴はほとんど知られていません。しかしながら、ウィラビーよりは海上航海の経験は豊富に有しており、クレタ島のカンディアまでの航海に参加したこともあります。また、エリザベス時代には有名な数学者として活躍することになるジョン=ディーとともに、イギリスの航海用計器類の改善を行ったことでも有名です。

嵐によって、ウィラビーの本隊とはぐれたのち、当初予定していた集結地点で1週間の間、他の2隻と合流するのを待ちました。しかしながら、ウィラビー本隊は現れなかったため、チャンセラーは独自で航海を続け、白海に進入、当時、塩の生産で有名であったネノカサの集落に停泊します。これによりロシアに到達したことを知ったチャンセラーは、陸路をモスクワに進み、当時の皇帝イワン4世に謁見しようと試みます。陸路、険しい旅を続け遂にモスクワに到達、チャンセラーはイワン4世から厚遇を受け、イギリスとの自由無制限の交易を約束します。チャンセラーは急いでイギリスに帰国し、ロシア宮廷で交わした交易条約について公示をしました。

イギリスではメアリ女王統治の時代となりましたが、メアリ女王は、幼い弟とともに、中国への航路開拓に熱意を持っていました。これをうけて、冒険商人会社は「モスクワ会社」と改名し、1555年にはチャンセラーがモスクワへと派遣されます。チャンセラーは再度、イワン4世のあついてもなしをうけ、イギリスに特使を派遣することを約束します。ロシアの特使とともに帰路についたチャンセラーですが、スコットランド沖で難破してしまいます。チャンセラーは岸へ向けて泳ぐ途中で溺死してしまいますが、ロシア特使は何とかロンドンにたどり着き、モスクワ会社はチャンセラー亡き後も興隆を極め、1917年にいたるまで営業活動を続けます。

征服家



ヘルナンド=コルテス (Hernando Cortes) 1485-1547

ヘルナンド=コルテスは1485年にスペインのメデジンに生まれました。又従兄弟にフランシスコ=ピサロがいますが、両名とも新世界で似たような功績を挙げています。コルテスは法学を少し学んだ後、職を転々としたのち、1506年に新世界に渡っています。彼はキューバ征服活動に参加し、キューバ総督ディエゴ=ベラスケスの幹部職員として活躍しました。

ユカタン半島に財宝がある旨の報告を受けて、ベラスケスは11隻からなる船団を編成、500名の部隊とともに、コルテスに指揮をとらせてメキシコへと派遣することにしました。ベラスケスがコルテスに下した命令は、探検と交易に限定されており、植民地化を意図したものではありませんでした。しかしながら、ベラスケスはすぐに、コルテスが命令を拡大解釈して行動するのではないかと心配になりました。ベラスケスはコルテスを派遣部隊の指揮官から解任しようとしたが、残念なことに、既に、船団は出航してしまっていたのでした。

コルテスは短期間、ユカタン半島に逗留しましたが、その際に、現地女性(ドナ=マリナ)と一緒にいます。彼

女は、コルテスの通訳兼助言者になり、コルテスに対して、アステカ帝国の辺境地域が政情不安であること、また、アステカに伝わる「ケツァルコアトル伝説」について語りました。この伝説によれば、白い肌をした神が東海岸から、アステカの地を再び統治するために戻ってくることになっているそうです。

コルテスは、現在おかれている状況をまさに好機と捉えました。彼は、言い伝えられているケツァルコアトルと同様に黒色の衣装を纏って、ケツァルコアトルが戻ってくる日と伝承されているアステカ暦の正月にメキシコに上陸しました。上陸後直ちに、アステカ帝国打倒を目論む彼に同調する部族を集めることに成功しています。続いて、ベラクルズの街を建設し、同調者たちを街の統治者に据えました。こうすることで、自分自身はベラクルズの利害関係の外にたち続けるといふ巧妙な戦術をとったのです。最後に、500名の部下から、絶対的な忠誠心を得るために、船舶を解体し逃げ道を閉ざしました。こうして、アステカ帝国の首都ティノチタランへ進撃する準備が整いました。

ティノチタランへの進撃には3ヶ月を要しました。途中、トラスカラ王国の3万名からなる部隊の攻撃を撃退し、ドナ=マリナの交渉力を活かして、同国との同盟締結に成功しています。ティノチタランに到達したスペイン部隊は、カルデラ湖に作られたその都市の華麗さに驚きます。湖の中央部に都市があり、細い舗装された道路で外部とつながれており、新世界のヴェネツィアといった様相だったのです。

ティノチタランでは当初はすべてがうまくゆきました。アステカ皇帝モンテスマは、伝説のケツァルコアトルそっくりの出で立ちをしたコルテスを直接攻撃することを恐れたのです。その上で、皇帝モンテスマは、街の中心部にスペイン部隊が逗留すること、ならびに、主要な寺院に神殿とともに祀られているアステカの神々の代わりに、聖母マリア像を設置するというコルテスの要望を受け入れました。要望が通ると、コルテスは暴力的になり、皇帝モンテスマを捕縛、アステカ帝国全体の統治機構を麻痺させます。しかしながら、皇帝モンテスマ捕縛の知らせが広まると同時に、コルテスは、ベラスケスがパンプフィロ=デ=ナルバエスを、自身の逮捕のために派遣したということを伝え聞きます。コルテスは部下400名を2隊に分け、4倍の勢力を有するナルバエスに対抗するため出陣します。急襲をかけることでナルバエス隊を粉砕したコルテスは、ナルバエスを捕縛、彼の部下をメキシコ征服を目指す自分の部隊に加えます。

しかしながら、ティノチタランへ戻ると、コルテスは困難に直面します。アステカ人たちは、皇帝モンテスマの弟のクイトラワクの元に反乱を起こしていたのです。皇帝モンテスマはアステカ帝国の終焉を宣言しましたが、人々はそれを糾弾しモンテスマに対して投石、モンテスマはその後すぐに死亡してしまいます。コルテスはこのような事態を見て、ティノチタランから撤退することを決心しますが、街にかけられた道路を通して撤退する過程でかなりの損害を出してしまいます。しかしながら、街から離れ、当面の危険が去ると、コルテスは直ちに再編成を行いました。コルテスは小規模な艦隊を編成、湖からティノチタランの街を急襲します。ちょうどその頃、スペイン人が持ち込んだ天然痘がアステカの人々に対して猛威を振るっていましたが、同時に、コルテスは街の占領のために熾烈な市街戦を展開していました。最終的に、コルテスは1521年8月13日に皇帝クアウモテックを捕縛、これをうけて、アステカ人たちは降伏します。

コルテスは数年間にわたってメキシコを支配し、安定をもたらします。しかしながら、ベラスケスの命令に背いたことを理由として、カール5世の信頼を完全に回復することはできず、その職を追われます。1541年にはカール5世が企画したアルジェリア探検に参画しますが、これは成功を収めることができませんでした。コルテスは1547年にセビル近郊の所領で死亡します。裕福な人生を過ごしましたが、メキシコでの功績は否定的な評価のままでした。



フランシスコ=ヘルナンデス=コルドバ (Francisco Hernandez de Cordoba) 1475?-1526

フランシスコ=ヘルナンデス=コルドバは、パナマ総督ペドラリアス=ダヴィラの副官を務めていました。1522年、ニカラグア征服のために北方に派遣されています。その過程で、1524年にレオンとグラナダの都市を発見しています。その後、さらに北方へと進軍し、今日のホンジュラスに到達、その地に彼自身が統治する植民地建設を試みました。ダビラはこれを聞きつけてコルドバを追ってき

ますが、逆にコルドバに捕縛されます。コルドバはダビラを絞首刑にしてしまいます。今日のニカラグアの通貨はコルドバの名譽をたたえて「コルドバ」という単位となっています。

彼は、マヤ文明に最初接触し、その地で 1517 年に殺された、同名のスペイン人探検家と混同されやすいので注意が必要です。



フランシスコ=ピサロ (Francisco Pizarro) 1471-1541

スペイン陸軍歩兵大佐の非嫡出子として生まれたため、フランシスコ=ピサロは適切な教育を受けることなく成長しました。1502 年にイスマニョラ島征服のために派遣された船団の一員として新世界に渡っています。また、バルボアの探検隊にも参加、1513 年には太平洋を発見しています。パナマにて牛飼農夫をしている間に、ピサロは、南方に黄金郷がある旨の噂を耳にします。

黄金郷の噂をうけて、ピサロは、ディエゴ=デ=アルマジロとともに 1524 年と 1526 年の 2 度に渡って、パナマ南方、南アメリカ大陸沿岸の探検航海を実施します。2 回目の航海では今日のエクアドルまでたどり着きますが、疫病と飢えに苦しめられます。ピサロは、増援を得るためにアルマジロをパナマへと帰還させますが、新たに着任したパナマ総督はピサロ隊の完全撤収を指示します。ピサロは撤退することを拒絶し、部下に対して以下のように述べました「ペルーには財宝が埋まっている。パナマで待っているのは貧困だ。勇敢なカスティリヤ人はどちらを選ぶべきだろうか！さあ諸君」。隊員のうち 13 名は探検を継続することを選択しました。すぐに、彼らの労苦は報いられることになりました。ペルーのタンベスに上陸した際、その地は、彼らが探し求めていたインカ帝国の、辺境の居留地でしたが、その地の寺院は黄金葺きの壁を有しており、それを見て、探しもめていた黄金郷にたどり着いたと確信したのでした。

パナマへ帰還したピサロは、総督が、再度の探検航海の実施に消極的であることに不満を募らせていました。そのため、スペインに帰国し、カール 5 世に探検隊編成を直訴しました。1529 年、カール 5 世は、ピサロにペルー征服を許可する旨の「トレード勅書」に署名をしました。ピサロは再びエクアドル沿岸に、3 人の兄弟と 250 名の部下を引き連れて戻ってきました。1532 年 5 月までに、スペインの歩哨基地を設立、ヘルナンド=デソトの増援を得、同時に、インカ帝国が内戦のさなかにあることを知りました。アンデス山脈を越え、インカ帝国の首都を急襲するチャンスが到来したのでした。若干の守備隊を歩哨基地にのこし、ピサロは、歩兵 106 名、騎兵 62 名、4 門の砲を従え、内陸部へと進んでいきました。

同年 11 月までに、ピサロ隊はインカ帝国政府の所在するカハマルカに到着し、インカ帝国陸軍の精兵 4 万と対峙します。ここで、ピサロは、コルテスが用いたのと同じようなトリックを用いて、インカ皇帝アタクルパを軍隊から引き離し、待ち伏せ攻撃を行って皇帝の護衛を殺害したのち、皇帝を捕虜とすることに成功します。アタクルパはピサロに対して、信じられないような膨大な身代金（部屋一杯の黄金）の支払いを約束します。アタクルパは、とらわれの身のまま統治を行うことを許され、インカの人民に対して、スペイン人が黄金を探索するのを手伝うように下命します。

1533 年までに、約束の部屋は黄金でほぼ満杯となり、全力で、溶解、金塊に加工されていきます。インカ帝国陸軍が接近という噂を聞きつけたピサロは、アタクルパに死刑を宣告、8 月にデ=ソトを含む部下たちの反対を押し切って、アタクルパを鉄環絞首刑に処します。アタクルパの死後、インカ帝国や急速に崩壊し、スペインの支配に組み込まれていきます。ピサロとアルマジロは財宝の分配を巡って公に対立していきます。1538 年には、ピサロがアルマジロを捕縛、殺害します。その 3 年後、アルマジロの部下によって、今度はピサロが、ペルーの新たな首都であるリマにあるピサロの宮殿で殺害されてしまいます。



フランシスコ=コロナド (Francisco Coronado) 1510-1554

ヘルナンド=コロナドは、1510 年にサラマンカ地方の貴族の家に生まれました。25 歳のとき、ニュースペインの新たな総督であるアントニオ=メンドーサの部下として大西洋を渡りました。1538 年までに、彼は、結婚し、メキシコ北西部の 1 領邦の長官となっています。この 2 年前に、デバッカが放浪の末、シボラの 7 都市の伝説をひっさげて、この地域で保護されています。メンドーサとコロナドはともに、この伝説の財宝探索にとりつかれてしまいます。

コロナドは手始めに、修道士のマルコス=デ=ニザとエステバニコ、そして、デバッカと同じように生還したナルバエス探検隊の生き残りから編成される索敵探検隊を派遣しました。マルコスは、帰還後、遠目ではあるが、黄金に輝く都市を目にした旨の報告をしたため、メンドーサとコロナドはともに、黄金郷探索にさらに傾倒していくことになります。

コロナドは、300 名のスペイン兵と現地徴用したメキシコ人 1000 名以上からなる探検隊を 1540 年 2 月に編成しました。探検隊は、先に、マルコスが黄金都市を発見したという地点（今日のメキシコシティー）に到達しましたが、そこにはズーニ族の煉瓦造りの集落があるのみでした。コロナドは、北方へ向けて探検を継続し、今日のサンタフェ周辺で越冬します。翌年にはコロナドは、あらゆる方角に探索隊を分遣し、今日のカンザスやカリフォルニアにまで到達しています。その結果、1 隊は、西欧人として初めてグランドキャニオンを発見しています。しかしながら、探し求めていた財宝は見つけることができませんでした。コロナド隊は 1542 年にメキシコシティーに帰還しますが、総督のメンドーサは、探検失敗を理由にコロナドを叱責します。コロナドは、その後、収賄ならびに現地住民虐待の罪で起訴されるまでの 2 年間は長官職に留まります。長官職を解任後、10 年間下級官吏としてメキシコシティーで過ごした後、この世を去っています。



フランシスコ=モンテジョ (Francisco de Montejo) 1479?-1459

フランシスコ=モンテジョは 1479 年前後にスペインのモンテジョ地方で生まれました。彼は、コルテスのアステカ帝国征服隊に参加し、メキシコに初めて上陸したスペイン人となります。コルテスの部下として、ペラクルーズの守備隊長をつとめ、後、アステカの財宝を積載してスペインへと帰還する船団の指揮をとりしました。

1526 年にスペインに帰還ののち、モンテジョはカール 5 世からユカタン半島を征服し、マヤ帝国を支配する旨の指令を受けます。これをうけて、1528 年にユカタン半島東部に上陸、コルテスの作戦をまねて、海岸に上陸後、脱走を防ぐために船舶を破壊しました。しかしながら、マヤ帝国軍は頑強に抵抗し、モンテジョはメキシコへ撤退を余儀なくされます。モンテジョは 1531 年から 1535 年にかけて、今度はユカタン半島西岸からマヤ帝国への侵攻を実施しますが、期待していた財宝が存在しなかったため、彼の部隊が反乱を起こしてしまいます。マヤ帝国の主要部分の占領には成功しますが、完全な征服には至りませんでした。彼は、貧窮のまま、メキシコの行政職へと退き、マヤ帝国征服については、彼の同名の息子にゆだねられます。息子によるマヤ帝国征服は 1546 年によりやく完遂します。

ヘンリー 8 世の妻



アラゴンのキャサリン (Catherine of Aragon) 1485-1536

アラゴンのフェルディナンド 2 世とキャストイルのイザベラの間に生まれた末娘のキャサリンが 3 歳の時に、イギリスのヘンリー 7 世の長男であるアーサーの間で婚約が成立します。この婚約により、メディナ=コンプの条約が締結され、花嫁の持参金として 200,000 クラウンがスペインからイギリスへ支払われる旨規定されていました。1501 年、15 歳となったイザベルはイギリスへと旅立ち、生まれ故郷のスペインを後にします。しかしながら、アーサーとの新婚生活は長続きしませんでした。というのも、アーサーが結婚後 5 箇月を経ずして、伝染病で死んでしまったからです。

フェルディナンド 2 世とヘンリー 7 世はともに、スペイン=イギリス間の同盟を有意義なものとしていたため、直ぐに、キャサリンとイギリスの新たな皇太子であるヘンリーとを結婚させるという計画に同意しました。しかしながら、ヘンリーはキャサリンよりも 5 歳年下であったため、結婚そのものは数年先に延期されることになりました。また、兄の未亡人と結婚するというのが一般的な慣習ではないと考えられたため、教皇庁の特許状まで獲得しています。

1509 年に正式に結婚したのち、キャサリンは男子を出産しますが、残念なことに、この子は生後 2 箇月で死亡します。1516 年までに、5 回以上、妊娠と流産、死産を繰り返したのち、ようやく、健康な子供を出産、これが、メアリー王女となります。しかしながら、跡継ぎとなる男子を出産することはありませんでした。ヘンリーは、バラ戦争の惨禍が記憶に新しいなか、チューダー朝の後継者となる王子誕生を切望し

ていましたが、キャサリンが王子を出産する可能性はほぼ無いと考えるようになりました。ヘンリーは何人かの愛人を囲うとともに、教皇クレメンス 7 世にキャサリンとの離婚を認める様請願しました。

教皇クレメンス 7 世は、ヘンリー 8 世からの離婚の申請に対して、これといった行動を取ることなく、案件を 6 年間に渡り放置します。しびれを切らしたヘンリー 8 世は、1533 年、カンタベリー大司教のクランマーに離婚の手続きを執行させ、愛人のアン=ブーリンと再婚します。キャサリンは宮廷から追放され、娘のメアリとも離別させられます。ローマ教皇庁に対しては、イギリス国内の教会については、ローマ教皇ではなく、国王がその長である旨の首長令を議会で承認させています。幾たびも、ヘンリー 8 世から要請されたにもかかわらず、キャサリンは離婚そのものを許さず、1536 年に死亡するまで、英国王妃を名乗り続けました。



アン=ブーリン (Anne Boleyn) 1501?-1536

アンブーリンは 1501 ~ 1507 年頃に、外交官のウィルトシャー伯爵トマス=ブーリンの 13 人の子供のうち一人として生まれています。トマス=ブーリンの妻エリザベスは、ノーフォーク公爵の娘でした。1513 年から 1514 年にかけて、アン=ブーリンは、カール 5 世の叔母の一人で、オランダの摂政を務めていた、オーストリアのマargarete 大公妃の家庭で過ごし、その後、フランス王フランソワ 1 世の王妃クロードの侍女になっています。ここで、フランス語を流暢に話す様になり、国王自身をふくめフランス宮廷の全ての男性を魅了するようになります。また、フランスの最新ファッションに夢中になったと云われています。また、このフランス滞在時代に、新教を信奉するようになったと云われています。

1522 年にイギリスに戻り、アラゴンのキャサリンの侍女となりますが、同時に、ヘンリー 8 世から色目を使われるようになります。ヘンリー 8 世は既に、アンの放蕩な妹とも関係を持っていた。しかし、ヘンリー 8 世がアンに夢中になると、アンは、彼の情婦になることをかたくなに拒絶します。このため、ヘンリー 8 世はアンとより親密な関係を気づくためには、彼女と結婚し王妃にせざるを得なくなったのです。

キャサリンへの愛情が冷え、アンへの情熱が高まったため、ヘンリー 8 世は教皇クレメンス 7 世にキャサリンとの離婚を許諾するよう、1527 年の春に申請します。上述したとおり、大司教のクランマーがヘンリーとキャサリンの離婚を許諾するまでに、6 年近くの年月がたってしまう。ちなみに、クランマーはブーリン家の専属牧師をかつて務めていた人物です。遂に、ヘンリーとアンは結婚し、アンはすぐに妊娠します。1533 年 9 月にアンは最初の子供を産みますが、誠に残念なことに、その子は赤毛の女の子でエリザベスと名付けられました。

王妃として、アンは、新教、特に聖書英訳活動を支援します。1534 年および 1536 年の 2 度妊娠しますが、いずれも流産してしまいます。特に、2 度目の流産は、夫のヘンリー 8 世が自分の侍女であるジェーン=セイモアに情熱を燃やしていること、そして、ヘンリーが落馬して瀕死の重傷を負ったことによるショックが原因とされています。このときまでに、ヘンリー 8 世とアンとの仲は冷え切っており、ヘンリーが直ぐにジェーン=セイモアに手を出すであろうことを彼女は予見していました。アンは 1536 年 5 月 2 日に姦通、近親相姦、反逆、魔術利用の罪で収監されます。17 日後、ロンドン塔で絞首刑に処せられています。



ジェーン=セイモア (Jane Seymour) 1508?-1537

ウィルトシャーのジョン=セイモア卿の娘であるジェーンは、アラゴンのキャサリンとアン=ブーリン両王妃の侍女を務めています。ヘンリー 8 世は、1535 年 9 月にセイモア家に短期間逗留し、その直後から、ジェーンに興味を持つようになりました。騒々しい王妃アンとの日々に疲れていたヘンリーは、控えめで上品なジェーンの立ち振る舞いに惹かれていきます。1536 年 5 月にアン=ブーリンが絞首刑となると、その 11 日後にはジェーン=セイモアが王妃となっています。アンが、結婚に先立ち 7 年間もの交際期間があったことと比べ、ジェーンは王座につくまでに 7 箇月しか要していません。

ジェーンは信仰面では保守的で全ての面で、カトリックより、神聖ローマ帝国よりの姿勢でした。恩寵巡礼の乱が起ると、彼女は反乱者達に同情的であったとされています。彼

女はメアリ王女が宮廷に戻ってくることを擁護、王妃になって直ぐにそれは実現しています。

1537 年 10 月 12 日、ジェーンは王子を出産、エドワードと名付けられます。しかしながら、ジェーン自身は、衛生管理が不十分であった当時としては一般的なことではあったのですが、分娩中に産褥熱をだし、12 日後に死亡しています。



クレプスのアン (Anne of Cleves) 1515-1557

アンは、クレフェ公爵ヨハン 3 世の娘として、デュッセルドルフで生まれました。彼女の姉のシビルは、ザクセン選帝侯でシュマルカルデン同盟の盟主であったヨハン=フリードリヒに嫁いでいます。

ジェーン=セイモアの死後、トマス=クロムウェルはヘンリー 8 世の新たな妃を捜すためにヨーロッパを歴訪していました。当時、フランスとハプスブルグ家は友好関係にあり、クロムウェルは仏壇に対抗し、イギリスの立場を強化するために、新教徒勢力との同盟を画策していました。画家のハンス=ホルペインがアンの元へ使わされ、ヘンリー 8 世が気に入るように肖像絵を描くことになりました。アンは新教徒であったため、上述した外交情勢に適合したのです。ホルペインは彼女の天然痘の傷跡を省略して、ヘンリー好みの姿に肖像画を仕上げました。

結婚式が執り行われることになり、アンはカレー経由でイギリスへと渡ります。ヘンリー 8 世とアンは 1540 年 1 月に結婚しますが、ヘンリー 8 世がアンに心惹かれることはありませんでした。ヘンリー 8 世とアンは結婚はしたものの、寝室をともにすることはなく、同年暮れには、離婚しています。アンは、離婚後も 1557 年に死亡するまでイギリスにとどまります。尚、ヘンリー 8 世の 6 人の妻のなかで最末年まで生きながらえたのはアンです。彼女は、王女メアリと交遊を深め、その結果カトリックに改宗しています。



キャサリン=ハワード (Kathryn Howard) 1525?-1542

ノーフォーク公爵の姪で、アン=ブーリンの従姉妹にあたるキャサリン=ハワードはノーフォーク侯爵婦人の家庭で育ちました。彼女は 11 歳にして、ノーフォーク侯爵婦人家の家臣と肉体関係を持っています。また、自分の音楽教師と浮き名を流したり、美男子であったフランシス=デレハムとも深い関係にありました。最終的に、彼女の甥がクレプスのアン王妃の侍女の職を斡旋、彼女は宮廷に奉職することになります。

イギリスのカトリック教会の指導者達は、若く美しいキャサリンがヘンリー 8 世の次の王妃に最適と考えていました。キャサリンは直ぐに王を誘惑し、クレプスのアンとの離婚が成立する以前から肉体関係を結ぶ用になります。1540 年 7 月 28 日、クレプスのアンとの離婚後、わずか 60 日で、ヘンリー 8 世はキャサリン=ハワードを 5 番目の王妃に据えました。クレプスのアンとの結婚を推進したトマス=クロムウェルは死刑となっています。ヘンリー 8 世はキャサリンを評して「刺のないバラ」と評し、若く活発的な王妃のおかげで、ヘンリー 8 世の活力と情熱は再び盛り上がりました。しかしながら、キャサリンは結局、同世代の若い男性との関係を断ち切ることはできませんでした。彼女の私設執事を務めていたフランシス=デレハムとは密会を重ねていたのです。彼女の浮気については直ぐに露見し、トマス=クランマーはその事実をヘンリー 8 世に報告します。ヘンリー 8 世はそれを信じませんでしたが、処置をクランマーに一任します。キャサリンは国会裁判にて有罪を宣告され、1542 年 2 月に死刑に処せられました。



キャサリン=パール (Katherine Parr) 1512?-1548

キャサリン=パールの父は彼女が 5 歳の時に他界し、彼女と二人の兄弟は母によって育てられました。キャサリンは、15 歳と 20 歳の 2 度、結婚をしています。2 度目の夫であるラティマー卿は恩寵巡礼の乱の際にカトリック側に立って反乱に参加しましたが、後に恩赦をうけています。夫の死後、キャサリンは、キャサリン=ハワードと離別したばかりのヘンリー 8 世から求婚されています。キャサリン自身は、ジェーン=セイモアの兄であるトマス=セイモアと恋愛中でしたが、自分自身が年老いて肥え太っていたとしても、王の願いを退けることはできないと悟りました。

ヘンリーとキャサリンは 1543 年 7 月に結婚しました。キャサリンは王子エドワードの養母として優しく接しただけでなく、当時、非嫡出子とされていたメアリとエリザベスの認

知をヘンリー 8 世に働きかけました。カトリック派が彼女の身柄を拘束しようと画策したこともありましたが、将来にわたって、宗教面には関与しない旨の宣言をして切り抜けています。

ヘンリー 8 世は 1547 年に死亡しますが、最後にキャサリンとの離婚を承諾し、キャサリンはトマス=セイモアと再婚します。彼女は 30 代半ばに妊娠し、出産の途中に死亡しています。彼女はイギリスの王妃のなかで、唯一 4 度の結婚をした人物でもあります。

カードに登場する人物等

フッガー家 (Fuggers)

フッガー家はアウグスブルグに根拠地をおく大商人、銀行家です。最も有名な人物はヤコブ=フッガーで、1459 年に生まれています。ヤコブが成長するにつれ、以前から富裕な大商人であったフッガー家は、綿花、絹、ハーブ、胡椒などを手広く交易するようになりました。ヤコブの最大の功績としては、ハンガリーでの鉱山開発を開始したことがあげられます。また、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン 1 世に、そのイタリア戦争戦費調達のために資金貸与を行いました。戦後、神聖ローマ帝国からの有利な条件の免許を得たことと、同時にうまく立ち回ったことが功を奏し、フッガー家はヨーロッパに於ける銅鉱の取引をほぼ独占支配します。1519 年に次期神聖ローマ帝国皇帝の選挙が開始されると、カール 5 世は、選帝候を買収し、当選をより確実にするために、多くの資金をフッガー家から借用します。ヤコブは 1525 年に死亡しますが、その後もフッガー家はハプスブルグ家を支援し続け、カール 5 世が新教徒の弾圧を行うにあたり資金面から大きな功績を果たします。

デシデリウス=エラスムス (Desiderius Erasmus) 1466?-1536

オランダで庶子として生まれたデシデリウス=エラスムス(ラテン語で「望まれた愛情」の意)は、ロッテルダム近郊の修道院学校で幼少時にラテン語を学びました。僧侶として働く資格を得ましたが、エラスムスは聖職者になることはなく、パリ大学、その後オックスフォード大学へ入学しています。イギリスでは、当代の先進的な人文科学者であるジョン=コレット、ヤトマス=モア等と交流しています。エラスムスの最も有名な著書である「愚神礼賛」は 1509 年に執筆され、トマス=モアに献呈されています。その本の中で、エラスムスはカトリック教会の偶像崇拜と慣行を風刺しています。この有名な本は、エラスムスが亡くなるまでに、40 刷を重ね、ヨーロッパ全域に、ルターによるカトリック教会批判を受け入れる土壌を形成することに貢献したと云われています。このため、「エラスムスが卵を産み、ルターが孵した」という言い方がなされるのです。

「愚神礼賛」の出版以後、エラスムスの名声は高まります。聖ジェロームによって、千年前にラテン語に翻訳したウルガダ聖書の改訳版を脚注とともに発行(校訂版新約聖書)しています。1520 年までに、オックスフォードの書籍商は売り上げの 1/3 がエラスムスの著作であると報告しています。

エラスムスはルターの 95 箇条の論題に対して好意的で、その写しをコレットならびにモアに送付したりしています。しかしながら、ルターによる教皇への攻撃が辛辣さを増すと、エラスムスによるルター支援はかげりを見せます。エラスムスはローマカトリック教会の秩序破壊を望まず、後年には自由意思でルターに対して攻撃を行っています。このような状況ではあるものの、依然として、エラスムスは宗教改革の祖父と云うことができます。エラスムスの死後、彼の著作は全て、カトリック教会の禁書目録に追加されています。

フリードリヒ賢王 (Frederick the Wise) 1563-1525

フリードリヒは、ウェティン家の選帝候エルンストの息子として 1463 年にトルガウで生まれています。23 歳の時に父が亡くなり、フリードリヒが選帝候となりました。フリードリヒの治世は平和の時代で、エルンスト派ザクセンは 40 年の長きにわたり戦争に巻き込まれることがありませんでした。

フリードリヒは、絵画と文化の支援者で、ヴィッテンベルグをドイツの知的集積地にしようと奮闘しました。彼は、いにしへの巡礼者達の聖遺物を蒐集していましたし、1502 年にはヴィッテンベルグに大学を設立、マルティン=ルターとフィリップ=メランクトンの 2 名を教授として招聘しています。

ルターのローマ教皇への攻撃が激化すると、フリードリヒは、ルターを擁護すべく活動します。1520 年には、教皇庁が発行したルターを逮捕しローマに護送する旨の要請書を無効としてその受け入れを拒否しています。1 年後には、ルターがウォルムス公会議に安全に参加できるよう尽力していますし、カール 5 世によるルターへの聴聞が済んだのち、ウォルムスの街を離れたルターを配下の者に命じて誘拐し、バルトブルグ城にかくまうこともしています。ルターはヴァルトブルグ城で、公衆の目にさらされることなく最も生産的な日々を過ごすことができたのです。

フリードリヒは 1525 年に死亡し、ルターとメランクトンによって、ヴィッテンベルグ城内の教会に埋葬されました。

キャサリン=ボーラ (Katherina Bora) 1499-1552

キャサリン=フォン=ボーラはライプチヒ南方の零落した貴族の家に生まれました。彼女の母は彼女が 5 歳の時に死亡しています。彼女の父が再婚すると、彼女は近くの修道院に送り込まれました。16 歳までに、修道女になる誓いをたて、ドイツ語とラテン語の読み書きを修得しています。宗教改革運動の噂を聞きつけると、キャサリンを含む一団の修道女達はルターに接触、修道院を離れることに協力して欲しいと請願します。ルターは、ニシンを運搬するありふれた荷車を用立てて、彼女たちが修道院からこっそりと抜け出すことに協力しています。

こうして修道院を抜け出した元修道女たちは、キャサリンを除いて全員が夫を見つけ結婚していました。キャサリンは、ルターその人との結婚を胸に秘めていました。1525 年 6 月 27 日に、二人は結婚することになります。キャサリンが 26 歳、ルターが 42 歳のことでした。

マルティンとケイト=ルター夫妻は 6 人の子供に恵まれています。また、4 人の孤児を引き取り、居住地の近傍の修道院とビール醸造所の運営にも尽力しました。彼女は、シュマルカルデン戦争の惨禍から逃れるためにヴィッテンベルグを離れた期間も含め、ルターの死後 6 年間を生きながらえています。

ヨハン=ザボリヤ (John Zapolya) 1487-1540

ヨハン=サボリヤは、ハプスブルグ家を筆頭とする外国勢力に支配に反抗したハンガリーの指導者です。1505 年に、現行王の死後、外国人がハンガリー王に就任することを禁止する法案の成立を支援します。その後、彼は、王位継承権の強化のために王女アンナとの結婚を画策します。しかしながら、王女アンがオーストリアのフェルディナンドと婚約したために、彼は、トランシルバニア地方の領主へと体よく追い払われてしまいます。

このときに冷遇されたことが、おそらく、1526 年のモハーチの戦いの際に、彼が、若きハンガリー王ラヨシュ 2 世の支援に、トランシルバニア軍を率いて駆けつけるのが遅くなった理由とされています。ラヨシュ 2 世が戦死した後、ハンガリー貴族達は、ヨハンを国王に擁立しようとしませんが、ハプスブルグ家のフェルディナンドも、王女アンナの夫であることを理由に国王就任を宣言、ヨハンとの政争に打ち勝ち、ハンガリー王に就任します。ヨハンは国外追放されてしまいます。ヨハンは 1529 年にオスマン=トルコ帝国がハンガリーを蹂躪しているまさにそのときにハンガリーに戻ってきます。オスマン=トルコ帝国は、ヨハンをハンガリー王に据え、オスマン=トルコに隷従させ、毎年、納税、労務の提供、オスマン=トルコ陸軍のハンガリー国内の自由通行権を認めさせます。

1538 年にヨハンはハプスブルグ家との対立を終わらせ、彼の死後、ハンガリー王位をハプスブルグ家のフェルディナンドに譲渡することにします(ヨハンには子供がありませんでした)。しかしながら、死の数ヶ月前にヨハンに子供ができてしまいます。ヨハンの子、ヨハン=ジギスムントもまた、ハンガリー王位を継ぐ者として成長することになります。

マキャベリ (Niccolo Machiavelli) 1469-1527

フィレンツェで生まれたニコロ=マキャベリは、25 歳で同市の行政官となります。その後 18 年間にわたり、フィレンツェの外交官として、フランス、ドイツ、イタリア都市国家等々を歴訪しています。教皇ユリウス 2 世の神聖同盟が、1512 年にイタリアからフランス勢力の駆逐に成功すると、フィレンツェにはメディチ家が再度戻ってきます。その結果、マキャベリを含む多くの共和国官吏が収監されるかその地位から追われています。

公職を追われた後、マキャベリは執筆活動にはいり、歴史家、音楽家、詩人、コメディアン、そして、最重要な活動として、政治哲学の著作を書き記します。彼の著作で最も有名なのは、「君主論」で、その中で、君主になるための手段とその地位を守るための手法について書き記しています。君主論のなかで、述べられている「結果が手段を肯定する」というテーゼから、冷酷な権力志向の人物をマキャベリアンと呼称するようになりました。

ローマの掠奪の噂が伝わると、メディチ家によるフィレンツェ支配も終焉を迎えます。マキャベリは再度公職に復帰することを希望しますが、フィレンツェに戻ると直ぐに病に倒れ死亡してしまいます。「君主論」彼の死後、非公式に回読されていましたが、正式に出版されたのは、10 年以上たってからでした。

ジュリア=ゴンツァガ (Julia Gonzaga) 1513-1566

ジュリア=ゴンツァガはイタリアのポー川流域のガズウロで生まれました。彼女は美貌で有名で、イタリアで最も美しい女性として知られており、幾百の詩人が彼女に捧げる詩を作っています。彼女は 13 歳のときに、ヴェスパジアーノ=コローナと結婚し、2 年後に夫が死亡したため（夫は結婚当時に 46 歳で死亡）、トラジェット公爵夫人、フォンディ伯爵夫人となっています。

彼女の美貌の噂は海賊バルバロッサの耳にまで入っており、バルバロッサは、彼女をとらえて、シュレイマン大帝のハーレムに送り込もうとします。1534 年に、バルバロッサはナポリ近郊のフォンディに上陸し、ジュリアを探します。多分に怪しい言い伝えでは、彼女はこのとき、男性執事とともに、寝間着のまま馬で街を逃げ出したとされています。尚、言い伝えではこの執事はジュリアを襲おうとしたという罪状で死刑になっています。バルバロッサは、ジュリアが逃亡したことを知ると、フォンディの街に火を放ち、街は灰燼となりました。

ジュリアは美しいだけでなく、詩を創作したり、ナポリでひっそりと、おそらく 1536 年頃から結成されていた新教徒の集団で宗教議論を行ったりと活発に活動していました。この集団はカラファによる教皇異端審問の過程で弾圧を受け、ジュリア自身の身にも危険が迫りますが、カラファが 1559 年に死亡したことにより危うきを脱しています。1566 年に、ジュリアは修道院に入所、その後直ぐに死亡しています。

ロクセラナ (Roxelana) 1510?-1558

今日のウクライナで生まれ、幼名をアナスタシア=リソフスカといいました。ヨーロッパではロクセラナ、イスタンブールではロッサと呼ばれていました。彼は、ギリシア正教牧師の娘で、1520 年代にオスマントルコ軍に、おそらくはコーカサス地方でとらえられています。彼女はシュレイマン大帝のハーレムに送られ、そこには、同じような境遇の女性が 300 名余りいましたが、直ぐに頭角を現す様になり、シュレイマン最愛の寵妃となります。彼女は直ぐに、シュレイマンの職務に口をはさむようになっていきます。

1534 年には、シュレイマンの長子とその母を追放し、ロクセラナの子がシュレイマンの跡を継ぐことができるように、シュレイマンに請願します（尚、スレイマンの長子はその後暗殺されています）。シュレイマンの腹心の部下であるイブラハム=パシャは、ロクセラナのことを好ましく思っていなかったために、1536 年に暗殺されています。ロクセラナは、シュレイマンが公式に自分と結婚することで、我が子がシュレイマンの跡目を継ぐことが確実になると思い、シュレイマンとの婚姻に成功、シュレイマンはオスマン=トルコ帝国の皇帝としては史上初めて、公式に結婚をした皇帝となります。

ロクセラナは 1558 年に死亡し、イスタンブールのシュレイマンモスクにて、夫のシュレイマン大帝が埋葬される予定の場所の傍らに埋葬されました。1566 年にシュレイマン大帝が死亡すると、彼女の息子のセルムがスルタンの地位を引き継いでいます。

ゲラルダス=メルカトル (Gerardus Mercator) 1512-1594

幼名をゲルハルト=クレマーといい、フランドル地方のルブルモンドに生まれています。苗字をラテン語で商人を表すメルカトルに変えています。ルーベン大学に学び、そこで、ゲンマ・フリシウスと協同で、2 年かけて地球儀を制作しています。メルカトルの単独での業績としては、1537 年制作のバレスチナ地域の地図や、1538 年制作の世界地図があります。また、カール 5 世の依頼を受けて、地球の地測のため

の器具を製作しています。その後も 82 歳で亡くなるまで、地図、地球儀、世界地図を製作し続けました。宗教的には新教を信奉し、1544 年には 7 ヶ月間投獄されています。彼は幸運にも、同時に捕らえられた 42 名（うち、2 名が火刑、1 名が絞首刑、2 名が生き埋め刑）の中では幸運にもその境遇からの脱却に成功したのです。

メルカトルの地図製作にあたっての最大の功績は、航海に便利ように、緯度経度が直交座標を形成する投影法を発明したこと。また、地図帳という言葉を作り出したこと、測量器具の改善をおこなったことは、ヨーロッパ人が新世界の場所を正確に把握することを可能とし、それまでの、ポトレマイオスの地図によって引き起こされていた混乱からヨーロッパ人を解放したのです。

ニコラス=コペルニクス (Nicolaus Copernicus) 1473-1543

コペルニクスは富裕な実業家の息子として生まれ、クラクフとイタリアで、薬学と法学の教育を受けました。彼は、ポーランドでドメニコ・マリアー・ノヴァーラに師事したことから天文学に興味を抱くようになりました。ポーランドに帰国後、教会法規の研究や、地方公務員、占星術師、経済学者、軍司令官等々、職を転々としていました。その間、常に天文学を趣味として楽しんでいました。

彼の地動説は 1533 年には確立されていましたが、キリスト教会からの弾圧をおそれ、その公表は控えていました。しかしながら、遂に、1542 年、ヴィッテンベルグ大学の数学者で、メラクトンの友人でもあるゲオルグ=ヨアヒム=レティクス経由で原稿をニュルンベルグに送り、出版にこぎ着けました。言い伝えによれば、「天球の回転について」の初版本が彼の死亡するその日に彼の手許に届いたと云われています。彼の遺体はフロムボルク大聖堂に埋葬されたとされ、2005 年 11 月に、同大聖堂地下から、彼の遺骨が発見、鑑定されています。コペルニクスの地動説は、人類史上最も重要な科学面での進歩であり、ゲーテは、「人類の精神面に与えた影響としては、コペルニクスの地動説に勝るものは無い。地球が宇宙の中心であるという大前提の放棄が必要であったとき、地球が球体であるということさえ、一般的な考え方には無かったのである。人類に大きな試練をもたらしたであろう」と評しています。

ミケランジェロ (Michelangelo) 1475-1564

トスカナ地方のアレッツォ近郊で生まれた、ミケランジェロ=ロドヴィコ=ブオナローティ=シモニは、フィレンツェ郊外の彫刻家の家で育ちました。彼の活躍の場は、ローマ、フィレンツェ、ポーニャと 3 つに大別することができます。代表作には、システィナ大聖堂のフレスコ画やダビデ像があります。

Here I Stand では、彼は聖ピエトロ大聖堂の設計者としてゲームに関わっています。彼が、71 歳の時に、この世紀のプロジェットの主任建築家に任命されているのです。彼は、当初計画では建築が不可能であることが分かったため、報酬受け取りを拒否し、再設計をスケッチから執り行って、直径 41m、地上 135m もの大聖堂を作り上げ、聖ピエトロ大聖堂を、キリスト教世界では最も大きな教会へと仕上げたのです。ミケランジェロは大聖堂の完成を待たずに亡くなっています。が、実際、大聖堂の完成は彼の死後 50 年間の工事を必要としたのです。

ジェーン=グレイ (Lady Jane Grey) 1537-1554

レスターシャー出身のジェーン=グレイはチャールズ=バーボン、ならびにヘンリー 8 世の妹のメアリー=テューダーの孫に当たります。つまり、メアリー、エリザベス、エドワードの従姉妹で、この 3 人が後継者無しで死亡した場合には、英国王位を継承する立場にありました。十分な教育を受け、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、その他複数の言語を理解したと云われています。11 歳になるまで、王妃キャサリン=パールの侍女を務め、2 年後、プリンガーやスイスの他のツウイングリ派の宗教改革家と文通を始めています。このため、彼女は、当時としては最も見識に富んだ女性という評判を得ていました。

国王エドワード 6 世が急死すると、ジョン=ダドリーは、息子のギルフォードを国王位につけようと画策します。ジェーンはギルフォードと、ジェーン自身が反対したにもかかわらず結婚させられました。エドワード 6 世は、メアリーとエリザベスの王位継承権を抹消していたため、ジェーン=グレイが英国王位を継ぐことになりました。しかしながら、ジェ

ーンは、夫のギルフォードが国王となることを拒否しました。ジェーンの女王位はわずか 9 日間で終焉を迎えます。人々はメアリを支援し、メアリ自身も大軍を組織してロンドンへと進撃しました。ジェーンはロンドン塔に幽閉されました。後年、ジェーンの父が新教徒の反乱に荷担すると、メアリは、ためらうことなくジェーンとギルフォードを処刑しています。

ミカエル=セルベトス (Michael Servetus) 1511-1553

スペインで生まれサラゴザ大学、トゥールーズ大学、パリ大学で学んでいます。その途中で、プセルならびにエコランパディスと知り合っていたようです。最終的にリヨン近郊で開業医となりました。

セルベトスはいくつかの宗教論文を執筆し、カルヴァンと対立しています。1553 年には「キリスト教への回帰」という論文を発表、その中では、肺による呼吸循環を科学的に正しく説明しています。残念なことに、この本は焚書にあったため、わずか 3 部しか現存していません。セルベトスの仮説が一般に広く受け入れられるまでにはその後 60 年の月日を要しました。

フランスの研究家によれば、セルベトスは、ジュネーブから脱出仕様となりましたが、カルヴァンが市当局に彼の捕縛を要請、逮捕の末、処刑したとされています。セルベトスに対してカルヴァン自身が辛辣な対処をとったことが、新教にとって、一般市民との間を悪化させる原因になったされています。

イベントの説明

この章では、歴史的背景の章に出てきた重要なイベントについて説明します。

コムネロスの反乱

コムネロスの反乱 (Revolt of the Comuneros) 1520-1522

カール 5 世が新たな王（正確には情緒不安定だった母のジュアナの摂政）として 1516 年にスペインに到着した折には、よそ者がやってきたとらえられています。カール 5 世は、オランダから腹心の部下を連れてきて、キャストिलाとアラゴンの主要なポストに据えています。1519 年に神聖ローマ帝国皇帝に選ばれると、ユトレヒトのエイドリアン卿を留守番に指定して、ドイツへと旅立ちました。カール 5 世が出国するや否や、キャストिलाで、外国人支配者による重税に反対する暴動が起こりました。

反乱はトレドで発生し、カール 5 世が派遣した代官が追放され、市民の代表団（これをコムネロスと云います）が実権を握るようになります。このような反乱が、キャストिला全域で発生したのです。反乱者たちは幽閉されていたジュアナを解放し、親政を執らせる様画策しました。カール 5 世は反乱に断固とした対処をとり、自らに同調するキャストिला人貴族を主要な公職に就けることで、反乱を収めました。ジュアナは実際のところ、反乱派にとって何らかの利得にはなりませんでした。彼女は意識朦朧とした状態で自分自身の管理さえ満足にできない状態だったのです。反乱発生から 2 年後、全ての反乱が鎮圧されました。カール 5 世は母であるジュアナを、彼女が亡くなるまでの 35 年間の長期にわたり、幽閉しました。

ドイツ農民戦争 (Peasants' War) 1524-1525

宗教改革の動きが始まる前であっても、ドイツでは農民に関わる政情不安は日常的な出来事でした。ルターとカールシュタットによる「信仰によってのみ救われる」という呼びかけもあって、農民達はいつもに増して士気が上がっていました。反乱はスイス国境に近い村で 1524 年に発生しました。この地域の農民達が武装して立ち上がったのです。反乱は北方、東方へと広がり、ライプツヒ周辺でも反乱が発生しました。反乱農民側、貴族側とも残虐行為を働きました。ツウイングリはこの反乱を先導しましたが、ルターは否定的でした。農民側に全てを統括しうる指導者が不在であったため、反乱は各個に制圧されていきます。この反乱による農民側の損害は少なく見積もって 10 万人と云われています。

ローマの掠奪 (Sack of Rome) 1527

パピアの戦いの後、カール 5 世はチャールズ=バーボンの部隊（2 万人の新教徒の傭兵（ランツクネヒト）を含む）を

解散させず、北イタリアに配置したままにしました。しかしながら、カール 5 世には、チャールズ=バーボンの部隊を維持する資金がありませんでした。補給も絶え、傭兵代金の支払い目処も立たないなか、部隊は略奪者の集団へと変貌します。フィレンツェは贈賄で難を逃れましたが、ローマは贈賄するだけの資金を有しませんでした。一度、部隊がローマ市街になだれ込むと、ハプスブルグ家部隊は 8 日間、市街にて略奪行為を続けました。教皇クレメンス 6 世は生命の危険から逃れるため、その後 8 箇月間、サンアンジェロ御用邸に非難しなければならぬほどでした。ローマ市の人口も、55,000 人から 10,000 人に減少しています。ローマの掠奪は、ローマ教皇にとって、16 世紀最大の危機ともいえる出来事でした。ルターは、「教皇のためにルター派に試練を強いる神が、ルター派のために、教皇を破壊せざるを得なくなった」とコメントしています。

マールブルグの討論 (Marburg Colloquy) 1529

1529 年 10 月、フィリップ=ヘッセはマールブルグに所有する城に関係者を招き、ルター派とツウイングリ派の理論相違点をすりあわせし、両者の共闘を計りました。これにより、新教徒として団結してカトリック教会に対処しようとしたのです。ルター派からはルターとメランクトンが参加しました。ツウイングリ派からは、ツウイングリとエコランパディスが参加しています。両派の相違点は実際のところ、聖餐式についてのみ差異がありました。ルターは、化体説をとり、ツウイングリはパンと葡萄酒は象徴に過ぎないと捉えていました。両者の違いは埋めることができず、宗教改革は 2 つの勢力に分かれたまま推進されることになりました。しかしながら、両者の合意文書として 14 もの書類が起草されたことは、1 年後に、メランクトンがアウグスブルグの宗教告白を作成するにあたり大いに役立ったとされています。

モルッカ諸島の売却 (Sale of Moluccas) 1529

1494 年のトルデシリャス条約で、ヨーロッパを除く世界の支配権はスペインとポルトガルの間で二分されました。南北分割線の一つはヘルデ岬諸島の西方 100 リーグの距離に設定され、この結果、ポルトガルがブラジルを支配することになりました。しかしながら、南太平洋に於ける南北分割線は厳密に定義することが不可能でした。というのも、経線間の距離を正確に計る手段が確立されていなかったためです。マゼラン隊の 1521 年～1522 年にかけての地球周回航海以降、モルッカの香料諸島には、東回り航路であっても、西回り航路であっても、いずれでも到達可能であることが判明しました。しかしながら、カール 5 世は、マゼランの様な気概にあふれた冒険家を再度見つけることはできませんでした。マゼラン隊の航跡を辿る探検に 3 度失敗したのち、ハプスブルグ家の国庫が枯渇したこともあって、カール 5 世はポルトガルと張り合うことをあきらめ、1529 年のザラゴザの条約にて、モルッカ諸島に於けるスペインの権益を 350,000 ダカットでポルトガルに売却しました。

アウグスブルグの宗教告白 (Augsburg Confession) 1530

アウグスブルグの帝国議会の最中に、カール 5 世に提示された「アウグスブルグの宗教告白」は、21 章からなる文書で、ルター派の教義となるものでした。メランクトンが編集したこの文書は、その多くの部分が、マールブルグの討論で、ルター派とツウイングリ派とが合意に達した内容から構成されています。この文書によって新教の教義が理論的に確立されたことで、反宗教改革の動きにも対応することが可能となったばかりでなく、ルター派教会では、今日に至るまで、教義の基本として広く採択されています。ルター派以外の新教諸派も、後に同様の文書を作成するようになりました。

ブラカード事件 (Affair of the Placards) 1534

1533 年にニコラス=コップがパリ大学で行った説教によって、フランソワ 1 世は、フランス国内にも新教を信奉する集団が存在することを知ることになりました。フランソワ 1 世は、「忌々しいルター一派が、我が愛しのパリにまで浸透していることは誠に残念で怒りを感じる」と述べたとされています。この異端者達に対して、フランソワ 1 世は 2 通の勅令を発し対処を命じています。

一見したところ、新教徒勢力は排除された様に見える。しかしながら、1533 年 10 月 18 日、パリ市民達は、ブラカードを掲げて行進する群衆を目にしたのです。群衆が掲げたブラカードには、化体説を非難する文言が記載されていまし

た（これは、群衆達がツウィングリ派に依拠しており、ルター派ではないことを表しています）。続いて、市内のカトリック教徒虐殺の噂が広まりました。フランソワ 1 世のお気に入りの城（アンボワーズ城）の執事の部屋の扉にまで、群衆によってプラカードが掲げられたと云われています。フランソワ 1 世による対応は迅速かつ容赦ないものでした。数十名の容疑者が摘発され、即座に火刑に処せられました。フランスでも、宗教改革に伴う紛争が始まったのです。

修道院の解散 (Dissolution of the Monasteries)

1536 年の首長令によって、ヘンリー 8 世がイギリスの教会組織の長となりました。ヘンリー 8 世はトマス=クロムウェルに命じて、国内の修道院をの訪問者数の概要を調査させ、修道院が有する財産を推測させています。この過程で、修道院に關係する苦情やスキャンダルを記録して、修道院に関する政策立案のために使用されました。当初、議会は、歳入が 200 ポンド未満の修道院を閉鎖し、財産を没収することを法制化しました。しかしながら、これによって得ることができた資金は当初見積より少ないものでした。このため、1539 年には議会は改正案を制定、先の法で残ったものも含めすべての修道院を閉鎖することにしました。

修道院の閉鎖によって集められた資金は、ヘンリー 8 世治世の赤字財政を補填するために使用され、瞬く間に無くなってしまいました。長期的には、経済的に最も恩恵を受けたのは教会の土地を破格の安値で購入したジェントリー層でした。また、中世イギリスに関する多くの古文書が失われるという副次被害のほか、イギリス国内では政情不安が一気に高まります。また、恩寵巡礼の乱の直接の原因ともなっています。

恩寵巡礼の乱 (Pilgrimage of Grace) 1536-1537

1536 年秋、リンカーンシャーで発生した小規模な反乱を火種として、総勢 9,000 名におよぶ大規模な反乱が発生しました。ヨークシャー出身で、ロンドンにて法廷弁護士を務めていたロバート=アスケを首謀者として、反乱者たちはヨーク地方へと進んでいきました。彼らは、修道院の復活とクロムウェルの解雇、クランマーやラティマーを含む新教の宗教指導者を公開処刑することを要求していました。

ヨークでは、反乱者達は街中にカトリック教会を復活させました。最終的に反乱者は 40,000 名規模まで拡大したと云います。アスケは、反乱者を率いて南下、ロンドンを目指します。ドンカスターで、ノーフォーク侯爵率いるイギリス軍と対峙しました。ノーフォーク侯爵は、反乱に参加した全員の恩赦と翌年、ヨークにて議会を開催する旨を約束したため、アスケはこれを信じて反乱部隊を解散させました。

ヘンリー 8 世は上記約束を守るつもりはありませんでした。このため、1537 年には再び反乱が発生しますが、今回は、国王側も迅速に対応し、首謀者を逮捕、処刑しています。その後、反乱は下火になっていきます。

トレントの公会議 (Council of Trent) 1545-1563

この時代最大のキリスト教公会議が、北東イタリア、チロル地方のトレントで開催されました。16 世紀には 1545 ~ 1549 年、1551 ~ 1552 年、1562 ~ 1563 年に分けて 3 回の会合がもたれています。公会議は当初は、カトリック教会と新教徒との宥和を目指して、カール 5 世が教皇クレメンス 7 世に依頼する形で開催予定でした。しかしながら、会議は遅れに遅れ、実際に参加者が集まって会議として成り立つまでに 20 年の歳月を必要としたのです。新教徒には議題への投票権が与えられていなかったため、当初参加を意図していた新教徒側の宗教指導者（メランクトンなど）も、トレントへ向かう途中で参加を取りやめています。公会議は、新教徒への攻撃に終始していました。公会議での議論は、ローマカトリック教会の新教徒に対する反宗教改革の試みに関して、教義上のさらなる内部修正として寄与しました。

塩税暴動 (Gabelle Revolt) 1548

フランソワ 1 世はフランス南西部について、税率を引き上げる旨の指示を 1546 年に発しました。1548 年までに、新たに導入された税制は不評を被り、社会不安が高まり、ギユイエンヌ地方で暴動に発展しています。寄せ集めで 40,000 名の反乱軍が編成されたのです。ボルドーが反乱軍によって占領され、同地域の行政官輔佐が殺害されています。国王アンリ 2 世は、モンモランシーの部隊を派遣して鎮圧を計ります。アンリ 2 世は、反乱軍を撃破、主要な参加者数百人を処刑、同地方の街々から国王特許状を改修しています。